

14. 5-562  
1200501217731

445  
2

第<sub>ソ</sub>四<sub>目</sub>十<sub>号</sub>研究資料<sub>ノ</sub>聯邦諸民族の分布狀態

南滿洲鐵道株式会社調查部編



始



195  
14.5  
562

ソ聯研究資料第四十號 (昭和十四年九月)

# ソ聯邦諸民族の分布状態

南滿洲鐵道株式會社

調 査 部

例言

發行所寄贈本

一、その領土内に百餘の雑多な諸民族を包括し、民族共和國の聯邦といふ獨特の國家組織をなしてゐるソ聯において、帝政ロシア以來の困難な「民族問題」が如何に解決されつゝあるかは夙に世界の注目を集めてゐる。レーニン・スターリン主義の旗の下に、一踏社會主義建設を強行してゐるソヴェート政權にとつて、民族政策の成否は國內問題よりみて極めて重大であるのみでなく、國際的問題としても影響する所すこぶる大であるといはねばならぬ。

本書は、ソ聯邦における民族問題及びソヴェート政權の民族政策を研究するための基本的資料の一として、標題の如くソ聯邦民族の人口及び分布状態を明かにしたものである。民族關係の適當な資料が少いこと、殊に一九二六年以來民族別人口構成に關する数字が發表されてゐないことが、本書の内容を著しく制約したことは遺憾であるが、大體の狀態を知るためには、これをも充分間に合ふことと思ふ。

本書執筆者 山本幡男



昭和十四年七月



調査部第三調査室

# ソ聯邦諸民族の分布状態

## 目次

緒言	一
第一章 ロシヤニ多民族國家生成の歴史(概説)	九
第一節 モスクワ國以前の時代	九
第二節 モスクワ國の時代	一三
第三節 ロシヤ帝國の時代	一九
第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観	三一
第一節 舊ロシヤ帝國の民族分布状態と民族分類上の諸説	三一
第二節 ソ聯邦各民族の人口及び地域的分布状態	五六
第三節 グランデ教授の「民族表」について	八六
第四節 ソ聯邦主要諸民族の沿革及び特性に關する若干の資料	一〇四
第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観	一三〇

第一節 加盟共和國、自治共和國、自治州の民族別人口構成 ..... 一三〇

第二節 「民族的少數派」の問題について ..... 一五七

第三節 加盟共和國人口及び人口構成の過去十二年間における變化 ..... 一六五

第四章 民族同化に關する若干の資料 ..... 一六九

第一節 言語別人口構成からみた民族同化の諸結果 ..... 一七〇

第二節 民族間の雜婚について ..... 一七八

第三節 民族同化と宗教的對立 ..... 一八〇

別表

第一 ソ聯邦民族及言語別人口表 ..... 七九

第二 ソ聯邦民族表 ..... 八九

第三 ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國の民族別人口構成表 ..... 一三二

第四 一九二七年度ソ聯邦諸民族出生率及死亡率 ..... 一六七

第五 ソ聯邦歐領異民族間雜婚件數 ..... 一八一

第六 ロシヤ帝國主要宗教別人口分布表 ..... 一八四ノ次

緒言

ソヴェート聯邦は、舊ロシヤ帝國から、その龐大な領土と共に、驚くべき多數の諸民族をうけついだ。歐亞の大陸にまたがり、廣袤二千三百三十萬方呎の面積を占め、一億七千萬の人口を擁するソ聯邦には、現に百以上の雜多な民族が生活してゐるのである。(註一)

(註二) 一九二九年中央統計局發表の「民族一覽」には約一九〇種の民族、種族名が擧げられ、その後これを再編して總數一八五種となつてゐる。一九三五年四號の、更にそれを改訂して、總數一〇二の民族を網羅する「民族表」を作成した。前掲誌一九三六年四號の「ソヴェート聯邦」は、主として言語系統による分類に基きこれに再檢討を加へた結果、總數一二二種の民族を擧げ、「革命と民族」誌には約六十の民族、民族的グループ及び諸族が加入してゐる」と述べてゐるが、これは恐らく、聯邦加盟共和國、自治共和國、自治州、民族管區などの單位だけについて言つたものであらう。



一九二六年のソ聯邦國勢調査の結果によれば、總人口約一億四千七百萬のうち、十萬以上を占める民族の數だけでも四十餘のほゞである。その主なるものを列記すれば次の通りである。(註三)

民族別	人口	百分比
ロシア人	七、七九一、二二四	五三・〇五
ウクライナ人	三、一九四、九七六	二二・二七
白ロシア人	四、七三三、九三三	三三・三三
カザフ人	三、九六八、二八九	二七・七一

緒言

緒言

ウズベク人	三、九〇四、六三二	二・六六
タタール人	二、九一六、五三六	一・九九
猶太人	二、五九九、九七三	一・七七
グルジア人	一、八二一、一八四	一・二四
トルコ人	一、七〇六、六〇五	一・一六
アルメニヤ人	一、五六七、五六八	一・〇七
モルドワ人	一、三四〇、四一五	〇・九一
獨逸人	一、二三八、五四九	〇・八四
チエワシ人	一、一七、四一九	〇・七六
タヂク人	九七八、六八〇	〇・六七
波蘭人	七八二、三三四	〇・五三
トルクメン人	七六三、九四〇	〇・五二
キルギズ人	七六一、七三六	〇・五二
バシキール人	七三三、六九三	〇・四九
ウオチヤク人	五〇四、一八七	〇・三四
マリ人	四二八、一九二	〇・二九
チエチエン人	三一八、五二二	〇・三二
モルダヴィヤ人	二七八、九〇五	〇・一九
オセチン人	二七二、二七二	〇・一九

カレリヤ人	二四八、二二〇	〇・二七
ミシヤリ人	二四二、六四〇	〇・二六
ヤクイト人	二四〇、七〇九	〇・二六
ブリヤイト人	一三七、五〇一	〇・二六
ズイリヤン人	一二六、三八三	〇・二五
希臘人	一一三、七六五	〇・二四
アワル人	一五八、七六九	〇・二一
エストニア人	一五四、六六六	〇・二〇
ベルミヤク人	一四九、四八八	〇・二〇

(註) 「數字から見た全聯邦共産黨の民族政策」一九三〇年モスクワ發行。三六一―三八頁。

この表を見れば分るやうに、ソ聯邦において最多數を占める民族はやはりロシア人であるが、總人口に對するその比率は二分の一強に過ぎない。ソ聯邦人口の五分の一以上を占めるウクライナ人は、同じくスラヴ系ではあるが、民族的に觀ればロシア人とは全く別個のものである。總數百にも上る「少數民族」は、いづれも過去數世紀にわたつてモスクワ國やロシア帝國に征服され、あるひは同化された「異種族」であり、被壓迫民族である。

試みにモスクワ國及びロシア帝國の歴史地圖を(註)一瞥すれば、十四世紀より十九世紀にわたる約六百年の間に、ロシアの領土がいかに驚くべき大擴張をとけたか々わかる。このことは、西は波蘭の西境より東はベーリング海峡を越えて北アメリカ大陸のアラスカに至る二〇〇經度にわたつてロシアの侵略が着々とおこなはれ、東部ヨーロッパ及び北部・中央アジアの各地方に群る幾多の民族及び種族がツァーの權力によつて次々に征服されていつた事實を物語つてゐる。これらの被征服民族は、人種的にみても、言語系統からみても、宗教、風俗、習慣の方面からみても、きはめて多種多様であり、その經濟的、

文化的發展段階においても區々たるものがある。<sup>(註一)</sup> 尙また征服の年代もそれぞれ異つてゐるところから「ロシア化」の程度も決して一樣ではない。従つて「多民族國家」としてのソ聯邦の複雑性を理解し、この國における民族問題の特性を知るためには先づ過去の歴史に遡らねばならぬ。資料の不足はあらゆる種族・民族の歴史について詳述することを許さないし、又その餘裕もないから、第一章においては、きはめて概括的に、「異種族の征略」といふ言葉によつて特徴づけられる舊ロシアの歴史(主として封建制度成立以後)について若干の叙述をこゝろみ過去の民族事情及び「ロシア」における諸民族分布の狀態を知るための一助にしたいと思ふ。

(註一) この種の地圖は帝政時代に發行された「大百科事典」第十六卷、「小百科事典」第四卷、ソ聯發行の「ソヴェート小百科事典」第五、七卷に載つてゐる。

(註二) 一九二一年、ロシア共産黨第十回大會におけるスターリンのテーゼ(民族問題における黨當面の任務)中には當時のソ聯邦諸民族の經濟的發展段階に關するきはめて興味深い一節がある。その要旨は次の通りである。

ロシア共和國その他のソヴェート諸共和國には約一億四千萬の人口があり、大ロシア人以外の諸民族は其中で約六千五百萬を占めてゐる。非ロシア諸民族六千五百萬の中、多少とも産業資本主義の時代を經過したウクライナ、白ロシア、アゼルバイジャンの一部、アルメニア等を除けば、残る三千萬はトルコ諸族であつて、資本主義的發展を遂げず、殆ど工業プロレタリアートを有せず、多くの場合牧畜經濟と家長的・氏族制的生活を営み(キルギジヤ、バシキリヤ、北カウカサス)、或ひは半家長的・半封建的生活形態から脱出してゐない(アゼルバイジャン、クリミア)。主としてトルコ諸族より成る三千萬の中、既に土着して一定の地域内に定住するアゼルバイジャン、トウルケスタンの大部分、プハール、ヒワ、ダゲスタンの諸住民、沿ヴォルガ及びクリミア・タタール、山地民の一部(カバルチン、チエルクス、バルカル)その他を除けば、残る約一千万のキルギズ、バシキール、チエチエン、オセチン、イングーシ等の諸民族はその土地をロシア移民に犯され、目ぼしい農耕地を奪はれて、甚しい苦境に立つてゐる。その他、ロシア共和國には、一定の地域も、一定の階級構成もない民族的グループや民族少数派(ラトヴィヤ人、エストニア人、波蘭人、猶太人等)が住んでゐる。

ソ聯邦における民族問題の困難性は、以上の簡単な叙述によつても略々わかるはずである。

ソ聯邦における諸民族の分布狀態を概説するために、筆者は縦横二つの断面をつくることを適當と考へた。それは、諸共和國の聯邦といふ特殊な國家組織を念頭に措いたためである。先づ第二章においては、帝政ロシアをとり扱ふ場合と同様に、色々な「民族」共和國の存在を一應度外視して、ロシアソ聯邦全土にわたる諸民族の地域的分布狀態を概観した。ここでは一つ一つの民族や種族と、それらが占める分布地域とが敘述の焦點となつてゐる。第三章においては、ソ聯邦を構成する各々の共和國を中心として、その民族別人口構成を明かにすることが一番主要な問題となつてゐる。通じていへば、第二章第二節と、第三章第一節とが本書の骨子をなすものであつて、それ以外のすべての章節は、いはゞ補足的、説明的部分である。

世界大戦後、いはゆる「民族自決」の潮流にのつて、ポーランド、リトワニヤ、ラトヴィヤ、エストニア、フィンランドの諸國がロシアより新たに獨立し、なほ歐露の南部においてはベッサラビヤ地方がルーマニヤに併合された結果、ソ聯邦領土の面積は帝政ロシアのそれより大分縮小してはゐるが諸民族の地域的分布の狀態にはさほど大きい變化を來してゐない。古くからロシアの領土内に住んでゐる多くの「少數民族」は、ソヴェート政權の治下においても大體同一の地域に止まつてをり、著しい移動はおこなはれてゐないやうである。多少とも注目すべき變化といへば總人口に對するロシア人の比率が帝政時代の四割四分程度からソヴェート時代の五割三分に増加した點であらう。これはロシア人の率が非常に低かつたポーランド、フィンランド、リトワニヤ等々の獨立の結果によるものである。第二章のはじめに掲げた、一八九七年國勢調査資料によるロシアの「母國語」別人口構成表は、ロシア諸民族の地域的分布のみならず、ロシア總人口に對する各民族の大體の

「比重」を知らしめる點において、今日なほその意義を失つてゐない。この表を一瞥すれば分るやうに、歐露（ポーランドを除く）においては、スラヴ系のロシア人、ウクライナ人、白ロシア人が圧倒的多数を占め、猶太人がこれに次ぎ、トルコ系のタタール人が第五位に位してゐる。カウカサスにおいては、ロシア人に次いでタタール人が第二位を占め、ウクライナ人、アルメニヤ人、山地土人、グルジャヤ人がこれに續いてゐる。シベリヤは人口からいへば全くロシア人の獨り舞臺といつていゝ位で、その他の主な民族（ウクライナ人、タタール人、ヤクート人、ブリヤート蒙古人）はロシア人の數に比べれば各々二十分の一を超えてゐない。中央アジアにおいては、事情は自ら一變する。こゝは古くからトルコ族の根城であつて、カザーク、キルギーズ、ウズベク等の諸族が絶對多数を占め、ロシア人、ウクライナ人を合しても全人口の一刻に達しない。

ソ聯邦の地域・民族別人口構成についても、大略これと同様のことが云ひ得られる。

第二章の第一節においては、帝政ロシア時代における民族分布状態を概説すると共に、民族分類上の諸説について若干の敘述を試みたが、これはホンの参考資料に過ぎないものであつて、實際の見地からいへば、むしろ第三節に掲げたグラウンデ教授の「ソ聯邦民族表」の方が役立つであらうと思はれる。この表にはソ聯邦に住むあらゆる民族、種族が言語別にキチンと整理分類されてゐるばかりでなく人口に關する數字までも記入してあるから、非常に便利である。第二節は、前述の如く本章の眼目であつて、各民族、種族の人口及び分布状態を表にまとめあげたものである。この場合の「分類」は、第一節の末尾に紹介したソ聯邦科學院の「分類表」に準據してゐるから、任意の民族の分布状態を知らうと思へば先づその「分類表」について、その民族が何れの人種系統に屬するかを調べて戴きたい。

民族の分布状態を概説するに當つて、人口と分布地域のみでは物足りない感じがするので、第一章の「歴史」と平行的

に、各民族、種族の歴史をあらまし、だけでも述べやうと考へたが、前述の如く時間的に餘裕が無かつたので、せめて主要な民族の沿革あるひは特性だけでも一應簡単に書きとめておきたいと思ひ、どうにか出来上つたのが第四節である。この一節に取上げられた民族は何れもソ聯邦總人口の千分の一以上を占める多少とも有力な三十の民族である。曰く、ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人、猶太人、ポーランド人、エストニヤ人、カレリヤ人、モルダヴィヤ人、タタール人、バシキール人、ミシヤール人、チュワシ人、マリ人、ウドムルト（ウオチャーク人）、コシミ（ズイリヤン）人、モルドワ人、獨逸人、オセチン人、チエチエン人、アワル人、グルジャヤ人、アルメニヤ人、アゼルバイジャン・トルコ人、カザーク人、キルギーズ人、ウズベク人、タチク人、トゥルクメン人、ブリヤート人、ヤクート人。沿革は主としてソヴェート時代に入る前後までに止め、それ以後の變化は今後の研究に俟つこととした。民族によつて敘述に粗密があり、不揃ひになつたことは残念であるが、一つは資料の關係に制約され、一つは各民族の重要性を考へたことにもよる。しかし補足的資料として何かの参考になるだらうと信じてゐる。

第三章においては、ソ聯邦各共和國の民族別構成と共に、「民族的少數派」の問題について若干の私見を展げてみた。それはこの問題の重要性を少からず考慮に入れた結果である。第三節には一九三九年國勢調査の結果が一部分發表された機會を利用して各共和國の人口及び都市、農村別人口構成の變化を明かにし、これに伴ふ各共和國人口の民族別構成の變化について若干の推測を加へておいた。

民族同化といふ一つの重要なモメントを無視することは出来ないといふ考へから、第四章を特にこの問題のために割いたのであるが、論じ盡さない所が多く、また資料の貧困から龍頭蛇尾に終つた感がある。

一卷を通じていへば、この問題に携つて日なほ淺く、菲才の能く肝要を把へ得なかつたことを慥むのみである。唯一つ、ソ聯の色々な統計や數字を「別表」としてかなり多數譯載することができたのを、せめてもの満足とする。



これらの表は、冗長な記述に比して一目瞭然とすべてを描き出してゐる。あえて具眼の士に最大限の活用を希望してやまない次第である。

(筆者 山本幡男)

## 第一章 ロシヤニ多民族國家生成の歴史(概説)

### 第一節 モスクワ國以前の時代

#### ロシア族の移動

ロシヤの最も古い原住民については詳しいことは知られてゐない。たゞ歐露で発見された色々な遺跡によつて、この地に數萬年前マンモス狩獵者が住んでゐたこと、氣候の變化によつて氷河が萎縮すると共にこれら原住民は次第に遠く北氷洋、シベリヤの方面へ去り、マンモスが死滅して以來これを獵してゐた人間も死滅していつたが「今日もなほ北氷洋の岸に沿ふて彷徨し、そしてもはやマンモスの肉ではなく、マンモスと同時代の動物で、今まで生きのこつてゐる馴鹿の肉を食つてゐるラブランド族やサモエド族は彼等の苗裔であるらしい」ことがボクロフスキイによつて指摘されてゐる。その時以來、ロシヤの平原の住民は、おそらく何回も交替したらしい。石器時代の野蠻人の後にまだ鐵を知らなかつた青銅時代の人間が住んでゐたことも遺跡によつて明かである。今より約二千五百年前から、ロシヤの南部について書かれた物語によれば、その地方には當時遊牧を營むスキート人が住んでゐた。現在カウカサス山脈中に住むオセチン人はその後裔のやうである。スラヴ人に關する最初の記述はその後八百年を経てあらはれた。

(註) ボクロフスキイ著「ロシヤ史」岡田宗司譯一八頁。

スラヴ人は二世紀頃から七世紀頃までカルパチヤ山脈の北麓に住んでゐたやうである。こゝから南に出たものが、バルカン・スラヴであり、西に出たものがチエツク人やモラヴィヤ人やポーランド人であり、東に出たものがロシヤ・スラヴ人である。

(註) 大類伸著「列強現勢史・ロシヤ」七頁。ボクロフスキイも亦スラヴ語を次の三群に分けてゐる。西部群(チエツク語及ポーランド語)、

南部群(セルビヤ語及びブルガリヤ語)、東部群(大ロシヤ語、白ロシヤ語及びウクライナ語)。「ロシヤ文化史概論」深身尙行譯四一頁參照。

今のロシヤ民族の遠い祖先である古代スラヴ人は、四世紀頃の「民族大移動」の波におされてロシヤ平原へと續々移住していつたらしい。<sup>(註一)</sup>即ちはじめはこの平原の南西よりの小さな一隅(ポドリーヤ、東ガリチヤの地方)に住んでゐたものが五—七世紀にはアゾフ海沿岸にまで進み、八—九世紀のころ南方遊牧民族によつて黒海、アゾフ海沿岸から驅逐せられて方向を北に轉じ、ドニエブル河の流域(ヴォルガ上流まで)、北東はオカ河畔まで)の地を占めるに至り、更に北方へ、フィンランド灣とラドガ湖の方面へ移住をつゞけ、そして遂に今日の「大ロシヤ」一帯にひろがつていつた。この移動は約五百年にわたつておこなはれたが、移住の波がウラル山脈に達するまでの歳月をあはせ算へれば、まる一千年を要したことになる。<sup>(註二)</sup>

(註一) スラヴ人がロシヤ平原に移住していつた當時は、既にこの地にフィン族(ウラル・アルタイ語族)が先住してゐた。かれらは次第にスラヴ族に従へられ、同化されていつた。その間に混血がおこなはれたことも明かである。「モスクワ」「オカ」……なる名稱はスラヴ語ではなく、フィン語であるといはれる。(前掲「ロシヤ史」一九頁)。

(註二) 白ロシヤ人は最も古い時代のスラヴ移住民の苗裔であるらしい(同右二〇頁)。

(註三) ロシヤ・スラヴ人移動の最初三、四世紀については生活状態に關する確實な記録は残つてゐないが、古代スラヴ人の經濟の基礎が原始的農業であつたこと、狩獵と漁業——尙それ以前には養蠶が、補助的農業の役割を演じてゐたこと、牧畜は比較的遅れて發達したこと生活がきほめて野蠻であつたことなどはボクロフスキイの研究によつて明かである。

「先史時代」を特徴づけるものは純然たる氏族制社會であつた。第六世紀に「野蠻な」スラヴ人を目撃した希臘人の記述によれば、かれらは希臘の都市を襲撃した時一人残らず住民を殲滅したが捕虜はとらなかつたといふ。つまり當時のスラヴ人は奴隷を知らなかつたのである。

### キエフ公國の時代

ロシヤに征服國家がはじめて現れたのは九世紀の中葉であつた。<sup>(註一)</sup>そして最初の征服者は外來の種族

(ノルマン)であり、他ならぬ「奴隸賣買者」であつた。十世紀の頃にはロシヤにワリヤグ(ノルマン族)の諸公國が生れたが、その結合の中心となつたのがキエフであり、所謂キエフ公領時代は十二世紀の半ばまでつゞいた(八六二—一五七年)。この時代に關して特筆すべきは「強盜商業」の典型的代表者であり、あらゆる商業の始祖であるノルマン人の活躍によつて「ワリヤグより希臘に至る」水路に沿つて幾多の都市が發達したこと、ビザンチン文化が旺んに傳來したことなどであらう。<sup>(註四)</sup>

(註一) 傳説によれば南部にはアジア大陸から來たハザール族が現れ、北部にはスカンデナヴィヤ半島から來たノルマン族が現れ、後者は前者を征服してロシヤの統治者となつた。西紀八六二年はロシヤ建國の年とされてゐるが、これは有名なリューリツクがノヴゴロドを築いて支配の基礎を固めた年である。

(註二) リューリツクの發後、オレグ公は南方貿易振興の目的で首都を商業中心地キエフに遷した。

(註三) キエフ、チニルニゴフ、ペレヤスラヴル、ルベツチ、スモレンスク、ポロツク、ノヴゴロド等の都市。

(註四) オレグ公は既に九〇七年コンスタンチノープルを襲撃し、九一年ビザンチンとキエフとの間に最初の條約が結ばれた。その後貴族及都市の長老は諸公の例になつて大いにビザンチン文化を採り入れた。宗教的には希臘正教の傳來、「ロシヤの洗禮」、法律的には慣習法の制定等々。ロシヤはこの時代より永くビザンチンの文化的恩恵に浴した。

この時代の初期にロシヤ・スラヴ族はクニャージ(公)を戴き、ノルマン族によつて組織せられ、十世紀には南方の遊牧民族を撃破して黒海、アゾフ海沿岸に再び進出し、他方スラヴ移住民はオカ河を下り、ヴォルガ上流に沿つて進みつゞ、フィン族を驅逐し、アラビヤ文化の地方に到達した。十一世紀にはオカ河及びヴォルガ河流域の地方にますます多く定住し、ここにウラヂミルその他の新都市及び公國が發生した。

### ウラヂミル公國の時代

キエフ公國の没落は諸都市間の戰爭に起因するとされてゐる。周圍の諸都市を平定し、勢威大いにな

るつたキエフ公國も、十二世紀に入つて衰微し、遊牧ボーロフツ族との闘争にしばしば失敗し、一一六九年ウラヂミル公ア  
ンドレイの攻撃によつて遂に滅亡した。それ以來一三二八年までが所謂ウラヂミル大公領時代である。この時代の初期には  
西歐との經濟的、文化的交渉もしげくなり、貿易も大いに興つたが、その後二つの歴史的事件の影響によつて古代ロシヤの  
諸都市は十三世紀より衰落の一途をたどつていつた。第一の原因は西歐十字軍の遠征であつて、一二〇四年ビザンチンが占  
領せられ、ビザンチン帝國は事實上滅亡した。その結果「ワリヤグから希臘へ」の通商路(バルチック海—ロシヤ平原の  
河川—黒海或ひはカスピ海)がその意義を失ひ、都市もその重要性を失ひはじめた。第二の原因は東方の「蠻族」、いはゆる  
タタール(蒙古タタール)の侵略である。

**蒙古の侵略** 一二二四年の頃よりロシヤに侵入した蒙古族はロシヤ南方一帯の都市を片端から蹂躪し、キエフ市は  
全く衰微し、ロシヤの中心は北方のノヴゴロドやモスクワに移つていつた。<sup>(註)</sup>ロシヤはこれ以來全く「農業國」と化し、都市  
貴族は領主に變じていつた。それまでビザンチン文化に浴し、かたはら西歐文明の餘澤を受けてゐたロシヤは、その後二世  
紀半にわたつて「タタール」(蒙古族)の統治に服し、一二四三年ヴォルガ河畔サライを中心に建てられた欽察汗國をはじめ  
各地の汗はロシヤ諸公を隸屬せしめて絶対の至上権をふるつた。しかし同時に、このやうな大権力の下に従屬してゐたこと  
によつて、ロシヤにおける政治的権力の統一、國家中央集權確立の機運は著しく助長せられた。この趨勢を利用してつた  
のはモスクワ大公イワン一世(モスクワ大公國の建設者)であつた。

(註) 十三世紀に瑞典人はフィンランドを征服し、ノヴゴロドに背後より迫り、ドイツの植民者はバルト海東岸に移住した。また従來ロシヤの  
襲撃を受けてゐたリトワニヤ人は南ロシヤの弱化を利用して一獨立國を形成した。

## 第二節 モスクワ國の時代

### 封建制度の生成

十二世紀から十三世紀にかけて、今日の中部ロシヤの地に封建的諸關係が形成されていつた。氏族制  
的な土地共有體は次第に崩壊し、クニヤージ(公)の大規模な土地所有と農民收取の諸關係が現れ、それをめぐる闘争の渦  
中からモスクワ國家<sup>(註)</sup>が生れ出でた。都市の崩壊は封建制度への移行に決定的な影響を及ぼした。蒙古族の支配は却つて封建  
的諸關係をますます強化した。

(註) モスクワ王國、モスクワ・ルスとも呼ばれ、この時代をモスクワ大公領時代ともいふ。首都の名稱モスクワを冠したものである。モス  
クワ國家は所謂「スズダリ・ルス」即ちウラヂミル・スズダリ公國から生れ出でた。この公國はオカ河、ヴォルガ河上流及びその諸支流  
(シエクスナ、コストロマ河等)の流域を占め、スズダリ、ロストフ、ウラヂミルの三大都市を有した。スズダリ地方は既に十一世紀末  
より特殊の封建公國をなしてゐた。地理的環境に恵まれてゐたため、ロシヤの他の地方から續々と移民民が集まり、先住のフィン人と混  
血していつた。十四世紀の始より手工業發達し、都市が次第に繁榮した結果スズダリ地方の一小公國たるに過ぎなかつたモスクワが次第  
に勢力を占め、つひにモスクワ國家の形成—全國統一にまで發展した。

**モスクワ國の勃興** 十三世紀の頃は汗の「代官」に過ぎなかつたモスクワ公は、商業中心地としてのモスクワを利用して  
巨富をあつめ、一方汗の権力を利用して四圍の諸公を討ち従へた。そしてウラヂミル公の一支族イワン一世は名實共に大  
公となつた。教會の支持はモスクワ大公の覇業を助けた。或ひは征服によつて或ひは買収によつてモスクワ大公は他の封建  
領主の土地を收奪し、その政治的勢力は欽察汗國の羈絆をゆるぎに脱するまでに増大した。即ちドミトリイ三世は正面より蒙  
古族に叛き(一三八〇年クリコフの戦)、諸公の盟主としてロシヤ統一の實を擧げ、その後イワン三世は一四八〇年完全に欽  
察汗國の支配を絶滅して、強固なる統一國家を現出した。モスクワ大公國による政治的統一は商業資本の發達と因果關係が

ある。封建的諸障壁をのりこへて商業が自由に發達するためにはロシヤ統一が何よりも必要であつた。イワン三世はこの要求に即應して武力あるひは協定によつて當時最大の商業中心地であつたノヴゴロドを始め、トゥヴエル、ロストフ、ヤロスラウリ、リヤザン等々の諸公國を次々に服従せしめた。かくてモスクワ公國は一四六三年以後「モスクワ王國」をなすに至つた。それ以來驚くべき領土の大擴張がおこなはれる。

農奴制の強化

イワン三世の商業資本保護政策はその子ワシリイ三世(在位一五〇五—一五三三年)及び孫イワン四世(雷帝)(一五三三—一五八四年)によつて繼續され、國內市場の擴大と農産物取引の發展は農民收取をますます激化し、その形態をますます残酷化した。そして封建經濟の第一段階に代つて十六世紀の頃から農奴制の基礎が次第に強化されていつた。農奴制及びその政治的形態たる専制主義に對する農民大衆の絶望的反抗運動は既に十七世紀の初頭から勃發した(一六〇五—一三年)の所謂「動亂時代」<sup>(註一)</sup>。農民運動の分散的傾向及びその内部的軋轢は「貴族・商人ブロツク」の勝利を保障し、その政治的代表者たるロマノフ家<sup>(註二)</sup>が十七世紀以來全ロシヤの専制君主となつた。「農奴制ロシヤ」の強大化は、十七世紀中葉「ウクライナの併合」にまで至らしめ、十七世紀後半に勃發した有名なステンカ・ラージンの叛亂も失敗に歸し、ロマノフ王朝の専制政治は十八世紀に至つて更に強化した。

(註一)「宗教法典」と銘打つたアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の一聯の勅令(一六四九年)は農奴制を基礎とする官僚國家を法律的に完成したものに過ぎぬ。

(註二)「モスクワ大公領時代」(一三二八—一五九八年)について「僧帝皇立時代」(一五九八—一六一三年)次に「ロマノフ皇帝時代」(一六一三—一七二一年)と分ける人もある。ここではロシヤ帝國と公式に改稱せられた一七二一年までを「モスクワ國の時代」に入れた。

農奴制強化の手段としての封建的植民政策

民族問題の見地からこの時代の出來事は大いに注目されねばならぬ。モスクワ王國の力を背景に、農奴制地主は國內の農民だけでなく、商業資本と相結んで「邊境」に住む異民族大衆の奴隸化に積極政策をとりはじめ

た。即ちかれらは、交易關係の發達と共に、既に奴隸化した農民の年貢を取上げ耕地を擴張するだけでなく植民といふ手段(新しい土地の占領とそこに住む土民の收取と抑壓)によつても自己の利益を擴大した。シベリヤ及び中央アジアに住む東亞諸民族の多くがロシヤ植民政策の犠牲となり、征服せられ、土地を奪はれ、或ひは奴隸化されるに至つたのは實にこの時代以後のことである。

(註) ロシヤに征服された東亞諸民族の主なるものを挙げれば、(一)トルコ種族——ヤクート(レナ河上流)、キルギーズ・カザーク(アラル海附近)、カラ・キルギーズ(アルタイ及バミル)、ウズベク(中央アジア)、カラカルバク(アラル海附近)、トルクメン(小アジア)、(二)蒙兀種族——ブリヤート蒙古(バイカル湖附近)、カルムイク、(三)極北諸種族——ギリヤーク(アムール、樺太)、カムチャダール(カムチャツカ南部)、コリヤーク(カムチャツカ北部)、チユクチ(北氷洋沿岸)、ユカギール(スタノヴォイ山脈附近)、アレウト(カムチャツカ)、(四)ツングース種族——ツングース(シベリヤ)その他。

十六世紀末より十九世紀初頭に至るまで、植民地占領によつてロシヤの領土がいかに擴大されたかは次表によつて明かである。

年 代	領土面積(平方マイル)
一五九八年	一三〇、一三三
一六八二年	二六八、〇七八
一七二六年	二八二、四五四
一七四〇年	三一八、二七二
一七九六年	三五二、四七二
一八二五年	三六六、五八二

(註) ワナーグ著「ロシヤ民族史」第一卷第一分冊ロシヤ問題研究所譯四七頁

モスクワ國時代の「異種族」征略

モスクワ國家時代における「異種族」征略及び領土擴張の跡を略々年代順にたどつて見やう。「タタール」に壓迫されて、十三世紀當時のロシヤ民族は目覺ましい移住もなく、唯ノヴゴロド人が毛皮及び銀を求めてわずかに東方ザボローチエ領に進出したのみである。十四世紀に入つてノヴゴロド人は北氷洋の沿岸に達し、他方ベチョーラ盆地、ウラル山脈にまで至り、一三六四年にはオビの河畔に達した。ロシヤ人が毛皮を求めてシベリヤに侵入したのはこの時期に始まる。「タタール」(蒙古族)によつて席捲されたロシヤ南西部よりロシヤ人の勢力が次第に減退すると共に、ウクライナ地方は十四世紀に入つてリトワ國の領土となり、一三八六年リトワ國とポーランドの同盟成つて、モスクワ大公國の西方に強力なるポーランド・リトワ國が成立した。東方においては「タタール」は漸次勢力を失つたが、カザン、アストラハン、クリムの諸汗國は十四世紀に至つて尙モスクワの強力なる敵國をなしてゐた。ビザンチン教會の勢力は十四世紀に入つて失墜し、ロシヤの教會はますます「民族的」となつてゆく。

十五世紀——「タタール」の分裂はロシヤ人東方進出の機會を生じたがカザン汗國の威力はこれを阻止し、モスクワ人はこの世紀の末に北方ウラル山地を越えたのみである。リトワ國は經濟的に強力なるポーランド國の實權下におかれ、ロシヤ南西部よりリトワ人は次第に驅逐された。モスクワ國に對するリトワ國の戰(一四九九年)は後者の敗北に終り、モスクワ國の軍隊は更に進んでフィン灣に迫り、ドイツ「十字軍」の殘黨たるリヴォニヤ武士團と戰つた。

十六世紀初期に至つてモスクワ王國の領土は歐露の全北半を占めるに至り、十三世紀以來中絶してゐた南方及び南東方への植民はこの時以來旺んにおこなはれ、しかもそれは國家的性質を帯びるに至つた(南東——ヴォルガ地方、南——南ロシヤ草原地方)。コサツク民の非合法的植民の波は更に南方へ進んでいつた。東方、シベリヤの征服は有名なイェルマークの遠征に始まり、商業資本(ストロガーノフ家)の直接に指揮する「自由植民」はシベリヤを東へ東へと征略し、國家の植民はその後を追ふて進んだ(一五八五年——チューメン、一五八七年——トボリスク、一五九六年——ナリム、一六〇四年トム

スクを建設)。當時モスクワ王國の對外政策はモスクワ商業資本の利益を著しく反映し、ヨーロッパよりアジアに至る水路(バルト海——ヴォルガ河——カスピ海)をその手中に獨占し、且つ西歐の「太平洋諸國」と直接に貿易關係をむすぶことが大きい目標となつた。イワン雷帝時代一五五〇年代に至つてこの政策は遂に成功した。即ちモスクワ王國はカスピ海に至る全ヴォルガ地方の支配者となり、イギリスと直接の關係を結ぶに至つた。バルト海に港を得んとする企圖は、リヴォニヤ戰役を惹起したが後ポーランド及瑞典と戰つて利あらず、東方においては「タタール」の襲撃を受け(一五七一年モスクワに迫る)、モスクワ王國の霸業もすこぶる多難であつた。この世紀はヴォルガ地方及びシベリヤ諸種族に對する「銃と劍」による鬭争にみたされてゐる。一五五二年にはカザンが占領され一五五六年にはアストラハンが占領された。ヴォルガ沿岸に住んでゐたマリイ、チュワシ、タタール等の諸民族は、幾十年にわたつて(殊に有名なカザン占領後)征服者の農奴制的專横に對して猛烈に鬭つたか、かれらの土地は次々に奪取された。

十七世紀に入つてシベリヤの征略は更に東へと進行する。一六一八年にはエニセイスク、一六二八年にはクラスノヤルスク、一六四六年にはヤクーツクの建設がおこなはれた。オスチヤク人はこの世紀の中葉その大部分が農奴化した。「シベリヤ諸民族の弓矢はツンドラの野獸を狩ることはできたが、ロシヤ植民者の大砲や砲丸に對しては全く無力であつた。商人たちは農奴制國家の支持を受けて……十七世紀の三〇年代には既にヤクーツク地方に達し、レナ河のほとりに堡寨を築いた。ヤクーツク堡寨は他の堡寨と共にヤクーツク、ツングースその他被征服民族に對する植民的掠奪の最も大きい中心地となつた。一六四六年にはボヤルコフはオホーツク海に達し、四八年にはデジュネフが後のベーリング海峽を横きつて北氷洋より太平洋に達した。南方においてはこの世紀の半ばに外カマ盆地とシムビリスク盆地との結びつきが出来上り、西方においてはウクライナの植民が進んだ。ウクライナ人は當時ポルタワ、ハリコフ、クルスク、ヴォロネジを中心とする地方に住してゐた。この世紀の終りに政府の植民はドネツ河の岸に達し、コサツクの植民地は尙ドン河中下流地方に止つてゐた。

(註) ワナーグ著「ロシヤ民族史」前掲三一—三四頁。

西方政策の焦點はバルト海に集中されてゐたが、この方面では初め事態は甚だ悪かつた。リヴォニア戦役以來の創痕はロシヤの退却を餘儀なくさせた。一六一〇年ポーランド軍はモスクワを占領し、瑞典軍はノヴゴロドを占領した。瑞典との媾和(一六一七年)の後ノヴゴロドは取戻したがバルト海への進出は不可能であつた。そしてポーランドとの媾和(一六一八年)後スモレンスクをも失つた。しかしその後ポーランド・リトワ國內の農民一揆が東部へ波及するに至つて形勢は好轉した。かくてモスクワ軍は白ロシヤ全體を占領し、一六五四年ヴィリノに達した。その後露、瑞、波の間に三つ巴の戦ひが行はれ、瑞典に敗れたポーランドはスモレンスクをモスクワに返し、且つドニエプル河左岸の地全體及びキエフをも讓渡した(一六六七年の媾和)。ウクライナ分割の原因となつた一六四八—一六五四年のウクライナ農民戦争は、ポーランド貴族(地主)の桎梏より脱せんとする農民大衆の闘争であつたが、結局それはモスクワ王國による「ウクライナの併合」に終り、ウクライナ人の大部分は十七世紀の末に農奴化されてしまつた。かくてモスクワ王國のツァーは「全大ロシヤ、小ロシヤ及び白ロシヤの君主」となつたのである。この世紀の終りには南方トルコの勢力圏に侵入し、一六九六年にはアゾフが占領された。

#### 農民戦争の波

十七、十八世紀のロシヤは有名な「農民戦争」によつて特徴づけられる。新しい植民地——異民族地方の大多數には大ロシヤ農奴制地主の占領以前から封建關係が存在した。即ち、モスクワ王國の西部「邊境」たるポーランド、白ロシヤ、沿バルト地方のみならず、タタール、パンキール、チュワシ、モルドワ等々の諸民族の間にも封建制度はひろく發達してゐたし、カウカサスの地方もさうであつた。かくて「農民戦争」は大ロシヤ人の地主と、自民族の封建的要素や家長的勢力者との二重の壓制に對する植民地地方農民大衆の反抗として現ははじめた。ウクライナ征服以後、「農民掠奪」の主力は沿ヴォルガ地方及び沿ウラル地方に集中され、この地方に住んでゐたチュワシ、マリ、モルドワ等々の諸族は次

次に植民地奴隸となつていつた。ドン・コサツクの蜂起を導火線とするステンカ・ラージンの叛亂に、モルドワ、チュワシ、マリ、タタール族の農民大衆が大舉加はつたことは偶然でない。農奴制地主は沿ヴォルガの叛亂を鎮定した餘勢をかつてウラル地方に入りパンキール農民の收取を強化した。兩世紀にまたがるパンキール族の必死的反抗及び大量的虐殺によるその鎮定ほどロシヤ植民政策の暗黒面を露呈したものはあるまい。

### 第二節 ロシヤ帝國の時代

#### ロシヤの資本主義化

ロシヤに「西歐の窓」を開き新しい文明を輸入した有名なピョートル大帝の治世に始まり、ニコライ二世の退位に終る凡そ二百餘年の時代は、經濟的には、農奴制經濟が幾多の矛盾によつて次第に崩壊し、ロシヤ資本主義がきほめて獨特なしかも相當目覺ましい發達をとげた時代である。ロシヤは比較的近代まで自然經濟的色彩を止め、商業資本の發達にもかゝらず、十八世紀までは「農奴制マニファクトリア」以外に工業の見るべきものは無かつたが、「原始的蓄積」の時期といはれるピョートル大帝の治世以來、西歐の文明、技術を吸收し、工業の躍進に端緒を開いた。十九世紀初頭には既に資本主義的マニファクトリアが興り、國家の保護と出資によつて大工場も續々と設立せられ、ます／＼多く農民の賃労働を吸收するに至つた。十九世紀後半に入つてこの状態は特に著しくなり、一八五一年には最初の鐵道が建設せられ、クリミア戦役このかた産業資本主義は急速に發達した。産業、交通の發達は主として國家の保護政策と國債募集によつておこなはれ、獨自の天下りの「國家資本主義」の擡頭を見たが、その背後には英、佛、獨等の金融資本がひかへてゐた。專制的・警察的國家資本主義はかくの如くして發生した。一八六一年の「農奴解放」は、ロシヤを近代國家化し、封建君主政治より「ブルジョア君主政治」への轉換をもたらしたが、專制の基礎は容易に揺がなかつた。廣大なロシヤ帝國の領土内における資本主義の發達は地方的にきほめて不均齊であり、跛行的であつた。資本主義化した地方は主として大ロシヤ人の住む

歐露の北西部及び中央部、バルト海沿岸地方、キエフ地方、ウラル及びカウカサス地方の一部のみで、その他の「異種族」地方は舊態依然として原始經濟、中世經濟に止つてゐたのである。

(註) 資本主義の發達、生産力の増大に伴つてロシヤの人口は十九世紀以來すばらしく増加した。その間領土の擴張もあるし、公表數字も正確とは云ひ難いが、帝政ロシヤ時代の「百科辭典」から引用した次の表は大體のロシヤ人口動態を示してくれる。單位百萬。

年次	人口	年次	人口
一七二二	一四百萬	一八一五	四五百萬
一七四二	一六	一八三五	六〇
一七六二	一九	一八五一	六九
一七八二	二八	一八五八	七四
一七九六	三六	一八九七	一二九
一八一二	四一		

バルト海の制覇 敘述はロシヤ帝國時代の初期にかへる。

バルト海に出て海上通商路を得やうとする永い間のロシヤ商業資本の要望は十八世紀初頭に至つて實現された。ピョートル大帝は北方戰役(一七〇〇—二一年)に勝つてバルト海東岸の瑞典領(今のエストニア、ラトヴィヤ、リトワニアの一部)フィンランドの南端)を奪ひ、更にロシヤはポーランド領の海港を覗ひ、一七七二年先づ白ロシヤを取り、一七九三年及び九五年にはポーランド領ウクライナの殘部、リトワニアの大部分及びクルランドを掌中に收めた。バルト海をめぐる鬭争はその後瑞典との間に二回の戰爭を惹起し(一七四一—四三年、八八—九〇年)、この戦によつて瑞典はバルト海東岸の全領土を失ふことになつた(一八〇九年、フィンランドは完全にロシヤ領となつた)。世界戰爭後「民族自決」の原則によつて獨

立するに至るまで、沿バルト諸民族は永くロシヤ帝國の統治下にとゞまつた。

(註一) 所謂「ポーランド分割」。奧太利は東ガリチヤを、普魯西はリトワニアの小部分を獲た。その後一八一五年ポーランドはロシヤ帝國の統治下に入り、特別の憲法を許された。

(註二) ポーランドをも含めて、これらの「外交的に」征服され併合された地方に對しては「ロシヤ化」政策が強行されたにも拘らず、人口構成から見てもロシヤ人の比率はきほめて微々たるものであつた。即ち一九一四年當時の公表數字によれば、ロシヤ人の百分比はフィンランドにおいて〇・二%、ポーランド(沿ヴォイストラ地方)において六・七%、中央アジアにおいては八・九%に過ぎなかつた。これに反しロシヤの古い植民地方、例へば西部シベリアでは、大多數(八八・七%)が歐露出身の住民——ロシヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人であつた。(ソヴエト小百科事典一九三〇年版第七卷四一〇頁)

南下政策の強行

ロシヤは十八世紀の後半「南下政策」に主力を注いだ。既にピョートル大帝は印度への陸路を目指して南に遠征し、ペルシヤとの一戰(一七二二—二三年)に勝つてカスピ海の西岸カウカサスの一地方(今のダゲスタンのあたり)までも占領したが、カザクスタン遠征は失敗に歸した(一七二六年の頃)。十八世紀末に至つてロシヤの「カスピ海制覇」は決定的となり、アジアからヨーロッパへの通商路(カスピ海—ヴォルガ河—バルト海)開設の夢が實現されるに至つた。一方、地中海への出口を得んとする黒海への進出は、一七六八年以後着々とおこなはれ、第一次トルコ戰爭の結果、黒海に面する歐露南端の地方一帯を占領し、第二次トルコ戰爭によつて一七八三年クリミヤを獲得した。かくてロシヤはカウカサスを除く歐露の全體を掌握し、虎視眈々として南、トルコの首都を目指すに至つた。エカアリナ二世以來の「希臘政策」がその一步を踏みだしたわけである……

こゝで十八世紀ロシヤの「國內問題」について若干書いておく必要がある。

封建的 反動

商業資本の利益に主眼をおくピョートル大帝の「改革」はロシヤを「西歐化」した點において極めて

進歩的であつたが、その結果においては英、和兩國の資本が遅れたロシヤ本國のそれを壓倒することとなり、重税、募兵より脱れんとする農民の大衆的逃亡、財政難等々に基く經濟的危機はエカテリナ一世時代より封建的反動を強化せしめ、大農奴制地主(貴族)の獨裁をますます強めていつた。一七六〇年頃から階級分化の影響による國內市場の擴大、國內關稅の撤廢(一七五三年)、輸出貿易(主として原料、半製品)の殷賑等々によつて經濟的活況を示し、「封建貴族」は次第に「商業貴族」に轉化していつた。しかしながら、それは封建的壓制を軽減しなかつたのみでなく、貴族階級はむしろその政治的特權を利用して商業資本の伸張を圖つたのであり、この傾向は十八世紀後半の對内外政策にも反映されてゐる。

**十八世紀における農民  
植民地大衆の解放闘争**

この時代のロシヤは、商品・貨幣經濟の發達、市場における地主の役割の増大等によつて益々積極化される植民地強奪と農奴收取に對する農民大衆の闘争によつて充されてゐる。前世紀にひきつゞいて農民の反抗は各地に幾多の暴動をひき起し、それは「異種族」の廣汎な大衆のみならず、労働者、兵士にも波及した(一七〇五年のアストラハン暴動、一七〇七年のブラヴィン蜂起、一七〇五—一〇九年のバシキールの大暴動、四〇年代におけるトロイツェ・セルギエフ修道院農民の暴動、十八世紀中葉沿ヴォルガ諸地方の農民一揆、幾多の工場における農奴労働者の反抗、植民地被壓迫民族——タタール、カルムイク、バシキール等の反抗。殊にバシキールは三〇年代に殘酷極まる鎮壓を受けたにもかかはらず、一七五四年、改宗問題、増税、人員徴發問題及び鹽の強制的專賣問題をめぐつて勘忍袋の緒を切らし再び絶望的叛亂をまき起した)。この時代には植民地的壓迫のために宗教(ギリシヤ正教)が旺んに利用された。これより先ピョートル大帝は事實上—官吏—宗教長官によつて支配される宗務院(シノド)を創設して國家的教會の形式を確立し、エカテリナ二世は一七六四年修道院領地を沒收してギリシヤ正教をますます國家に隸屬せしめたのであるが、一七五四年以後のバシキール一揆が宗教的スローガン(「われらの豫言者ムハメットの助力によつて不信心なロシヤ人を打破らう」)の下に結成されたことは注目に價する。バシキールの叛亂はタタール、キルギーズ人などにも傳播したが時のオレンブルグ總督は叛亂を鎮壓する

ために民族間の反目及び異民族の「上流階級」を利用し、それは大いに成功した。嗟しかけられたタタール、キルギーズ、チュワシ人は前後してバシキール人に向ひ、殲滅的打撃をあたへたのである。かくてウラル地方バシキールの農奴制的植民化に對する闘争はきはめて悲惨な敗北におはつた。

**ブガチヨフの叛亂**

バシキールの叛亂後二十年とたぬ間に、内亂は沿ウラル地方一帯から沿ヴォルガ地方にまで波及していつた。バシキール、タタール、モルドワ人農民大衆の抵抗を次々に粉碎しつゝ、ロシヤの植民は南下し、キルギーズ人、カウカサス人、カルムイク人などと衝突した。衝突を避けて逃亡したものも少くない。例へば一七七一年には五萬のカルムイク人がシベリヤ奥地のオイロチヤへ移住した。<sup>(註)</sup>十八世紀の七〇年代にウラル、ヴォルガ地方で廣汎に展開された農民運動は強化された農奴制的抑壓に對する直接の應答であつた。新しい農民戦争の主力として起つたのは、ヤイク地方のコサツクであり、その指導者ブガチヨフは自らピョートル三世と稱し、コサツクの一揆部隊を率ひて進み、叛亂は沿ウラル、沿ヴォルガの諸地方を席捲した。ブガチヨフはバシキール人やタタール人に回教信仰の自由を約束して、かれらを味方に入れ、キルギーズ人、チュワシ人、モルドワ人等も叛亂に加はつた。しかしこの自然發生的な、統一を缺いだ農民一揆は國家的勢力で組織された農奴制地主の敵ではなかつた。かくて有名なブガチヨフの亂も一七七五年に鎮定された。

(註) ワナーグ著「ロシヤ民族史」前編八八頁

**進む植民政策**

この世紀の前半は、主として東方への植民政策が強行された。一七二三年にはエカテリンブルグが建設され、後一七三〇年サマラ(ヴォルガ中流)地方に移り、オレンブルグ(ウラル河中流)地方に伸び、遂にトゥルクスタンの境にまで到達した。後半には、南方及び南東方への植民が進んだ。トルコ戦争の勝利はこれに拍車をかけた。ドン・コサツクは一七〇八年既に投降し、ザホロージェ・コサツクの一掃(一七七五年)以後は、コサツクの自由植民に代つて逃亡者の移住がおこなはれた。ザボロージェ・コサツクは一部はクバンに移り、一部は國境を越えてトルコに移つた。七十年代



には北カウカサスの植民が始つた。(ついでながら、アムール河流域一帯の極東地方及び樺太を除く全東シベリヤは十七世紀中既に完全にロシヤの領土と化した。)

#### ロシヤ帝國 隆盛の頂點

十八世紀の終りを特徴づける事件は、革命的フランスに對する同盟にロシヤが参加したことである。

(一七九九年)。これは正式の英露同盟の第一歩をなすものであつた。十九世紀のはじめ約三〇年間はこの同盟が支配した時代である。<sup>(註)</sup>英露同盟は對佛戦に敗れ、アレクサンドル一世はやむなくチルヂツト講和を結んでナポレオンの「大陸封鎖」を承認したが、皇帝はこの講和を利用してフィンランド(一八〇九年)及びベツサラヒヤ(一八一二年)を併合し、のち經濟的理由によつて「大陸封鎖」令を破棄し、一八一二年ナポレオンの大軍を迎へ撃つた「祖國戦争」は一八一四年ロシヤ軍の巴里占領に終つた。この戦勝によつてアレクサンドル一世は「ツァー中のツァー」と呼ばれ、「神聖同盟」の締結によつてロシヤは東歐諸國の盟主となつた。ポーランドが決定的にロシヤの支配下に入つたのは、一八一五年のことである。黒海の商權を掌握せんとしてロシヤはコンスタンチノーブルの領有を目指し、一八〇六——一二年のトルコ戦争はじめ再三對トルコ干渉及び戦争を試みた。そして、その結果、アドリアノーブルの講和(一八二九年)によつて、(一)ボスフォラス、ダーダネル海峡の開放、(二)ドゥナイ河口、アナバ以南の黒海東岸の一部割讓、(三)希臘の獨立保障(四)モルダヴィヤ、ワラヒヤ、セルビヤの「自治」をトルコに承認せしめたのである。「サルタンの支配下に在る基督教徒を救ふ」といふ道義的理由はロシヤ近東侵略の巧な偽裝に過ぎなかつた。

(註) この同盟の基礎をなすものはロシヤ商業資本とイギリス工業資本との利益の一致であつた。ロシヤはイギリスにとつて必要な原料(木材、脂肪、小麦)を輸出しイギリスより工業製品を輸入した。後ロシヤ工業の發達はこの同盟を弛緩せしめた。それ以後、兩國の反目がつゞく。

#### 外交政策の轉變

十九世紀の半ばより「神聖同盟」の威力は衰へていつた。ニコライ一世は壞の裏切り、英の反對にあ

つて「近東政策」をもてあましてゐたが一八五三年又もトルコに戦端を開きモルダヴィヤ、ワラヒヤを占領した。しかしトルコを援けた英佛との所謂クリミア戦争に敗れて一八五六年巴里講和の己むなきに至りロシヤの外交政策はその後西方に轉じた(クリミア戦争は農奴制ロシヤのブルジョアの西歐に對する屈服におはつた。こゝから、西歐依存の外交政策への轉換がおこなはれたのである)。今その概略を述べれば、次の通りである。一八五九年ロシヤはフランスと同盟を結んだが、經濟的提携にまで至らず、その後、工業の發達著しいプロシヤと密接なる經濟關係を生じ、一八六三年露佛同盟に代つて露普同盟が結ばれた。この同盟は普佛戦争において大きい役割を演じ、ロシヤも亦一八七三年に成立した「三帝同盟」(獨露英)を利用して近東政策に再び突進せんとし、アレクサンドル二世はバルカン半島のスラヴ族を使喚して一八七五年以來各地に反トルコ運動及び叛亂を起さしめ、壞と秘密協定を結んでトルコに出兵したが英は公然とトルコを援助し、ロシヤは數次の敗北の後サン・ステファンに講和を締結した(一八七八年)。しかしその後ロシヤが中央アジアへ侵入し、遂に「インドへの關門」ハララートへ進撃を開始したため英露の關係は再び險惡となつた。その當時露獨の關係は、表面的にはブルガリヤ問題のために、實際には經濟上の軋轢(穀物關稅問題)によつて悪化し、これを誘因として再び露佛同盟が結ばれた(一八九〇年)。その後一八九三年には軍事協定が成立し、この關係は世界大戰の日まで持續されたのである。

かくの如く、十九世紀後半にロシヤは幾多の外交的失策をくり返し、その對トルコ「近東政策」を十分遂行し得なかつたのであるが、中央アジア方面及び後カウカサスへの侵略は比較的「順調」に進み、十九世紀末までには、ロシヤは現在の國境線内の全領土を占めるに至つた。

#### 農奴制崩壞期の 侵略政策の強行

中央アジア及び後カウカサス征略の経緯を述べる前に、國內の經濟的變化について簡単に記しておか

う。前述の如く十九世紀の初ロシヤの工業資本は大いに勃興し、殊に貴族にとつては一大打撃であつた大陸封鎖がこの傾向を著しく助長した。しかしその後ロシヤがナポレオンを破り「神聖同盟」が確立されてより反動の時期が到来した。農奴制

經濟の胎内から遅れて成長したロシヤの工業資本はそれ自身微力であり、外國との競争に對する保護を強力なる中央集權國家に求めざるを得ず、從つて專制を打倒し、農奴制を撤廢せんとするブルジョア階級の企圖(有名な一八二五年のデカブリストの亂もその一例)は悉く失敗に終らざるを得なかつた。しかしながら二〇年代の農業恐慌によつてますます顯著となつた農奴制崩壊の危機は、「神聖同盟」の強力な反動的役割を以てしても喰ひ止めることは出来なかつた。そののみか、急速に産業資本主義の發達した西歐諸國は、ロシヤを専ら農産原料の供給者として、工業製品の市場として經濟的に從屬せしめようと試み、「植民帝國」としての農奴制ロシヤの統一と獨立とを脅威するに至つたので、專制政府は、製鐵、羅紗、製紙工場等多數を占有する農奴制地主の要求によつて西歐の工業製品に對し禁止的高率關稅を設定した結果かへつて國內の資本主義的工業は急テンボの發達をはじめ農奴制工業を壓倒するに至つた(工業における農奴關係は一八四〇年つひに廢止せられた)。十九世紀初頭よりますます顯著となつた農奴制の矛盾及び危機を克服するための活路は、植民地及びロシヤ商品の市場を南方に求め、その目的で他國の屬領を侵略することであつた。前述のクリミア戦争やカウカサス侵略がそれである。

**カウカサスの征服**

後カウカサスの中グルジャは既にパーヴェル一世時代(一七九六—一八〇一年)に占領されてロシヤの植民地となつてゐたが、その後ロシヤは上述の目的でベルシヤに對して露骨に挑戦し、後カウカサスの諸地方を續々と占據していつた。グルジャにおけるロシヤ軍隊の長官はベルシヤの半屬領カラバフ、シルワン、ダゲスタン等の諸州を奪ひ(一八一三年ギョリスタン條約)、更にエリワン、ナヒチエワンの兩汗國を占領した。(一八二八年のトルクマンチャイ媾和)。その後トルコと戰つて黒海の東海岸に面する一帯の地域(アナバ、アハルカラキ、アハルツイフ等)を占領したことは前述の如くである(一八二九年アドリヤノーブル媾和)。しかしながらカウカサス山地土民は頑強に反抗し、それを鎮壓することなしにはベルシヤとトルコに對する勝利を確保することは不可能であつた。かくて殘忍きはまる山地土民狩りが展開される。野蠻な征服手段は山地諸族の結束を強めた。チエチエン人は既に十八世紀末から反露闘争に入り、族長マンヌル・ウシ

ユルマの指導の下に、カバルダ人と聯合して北カウカサス山地諸族の強力な武力抵抗をまきおこした。執拗な闘争は一七八五年の最初の衝突以來數十年も繼續された。そしてこの場合にも『回教徒は不信心者の權力下にあつてはならない、いかなる者の奴隸ともなつてはならない。回教徒の第一の仕事は不信心者との聖なる戦である』といふ合言葉が山地民大衆を結束せしめた。ロシヤと特別の關係にあつたアワル汗、ダゲスタン侯の一族は殺され、ダゲスタンの住民も「邪教徒」(基督教徒)の軍隊に反抗した。しかしダゲスタン及びチエチエンの頑強な大衆的叛亂も一八五九年に至つて遂にロシヤ軍の武力によつて鎮壓された。かくてロシヤの軍隊は更に黒海沿岸のチエルケス族に對して征服の手をのべることができた。パトゥム、カールスクは一八七八年ロシヤ領に併合された。

**中亞への侵略**

中央アジア及びカサクスタン(それを通じて支那及びインド)の諸族とロシヤの諸族が交渉をもちはじめたのは古い時代のことであり、ヴォルガリカマ通商路は、ドネブル通商路(所謂ワリヤグより希臘に至る水路)より以前に開かれたものであるといはれてゐる。カザク諸汗とイワン雷帝との親善關係は史録に残つてゐる。ピョートル大帝が「中央アジアへの關門の鍵」たるカザクスタンの征服に失敗したことは既述の如くであるがカザクスタンは當時その諸汗の間に不斷の反目闘争がつき、この内亂を利用して東部からチュンガル族、南西よりはカルムイク族、北方よりはバンキール族がカザクの地に侵入した。その頃カザク族は、大、中、小の三つのオルダをなし、遊牧經濟に基づく特殊の(氏族制的色彩の濃厚な)封建制度の下に在つたが、諸汗の闘争と外來遊牧民の襲來によつて民族及び中央集權的國家にまで發展する途を絶たれ、加ふるに露、支兩大國の間に介在し、南に中央アジア諸汗國(コカンダ、ブハーラ、ヒワ、イラン)を控へてゐる關係上累卵の危きに近づいてゐた。ロシヤと經濟的に密接な關係にあるカザク族は支那よりもロシヤに傾き一七三二年先づ小オルダがロシヤに併合され、一七四〇年には中オルダが、一八四五年には遂に大オルダもロシヤ領土となつた。カザクスタンの被支配民は汗の裏切り及びロシヤの統治に反抗すること一再でなかつたがエカテリナ二世當時鎮定せら

れ、それ以後ロシヤとカザクスタンとの経済的、文化的諸關係はますます緊密化した。<sup>(註)</sup>ロシヤの侵略は更に進んで中央アジアの奥深くまで及び、一八五三年にはペロフスク、一八六五年にはタシケントを占領し、一八八四年にはトウルケスタンを奪ひ、カスピ海以東の地において、ベルシヤ及びアフガニスタンと直接境を接するに至つた。

(註) カザクスタンが東洋諸國に比べてより「進歩的」なロシヤに併合されたことは、支那あるひはイラン、ヒワ、ブハラ等々の「非文化國」に征服されることに比すれば「不幸中の幸」であり、「まだしもの幸福」であつたとロシヤ史家のみならず、マルクスやレーニンがこれを認めてゐる。そしてソ聯の一評論家が最近のカザクスタン・プラウダ紙(一九三九年一月十八日附)に「不幸中の幸」論を蒸し返してゐるのも興味あることと謂はねばならぬ。

#### ロシヤ帝國の膨脹

十九世紀の中葉、英佛等の歐洲資本主義諸國が支那を侵蝕しはじめた機會を覗つて、ロシヤは一八五八年アイグン條約及び六〇年の北京條約によつてアムール、ウズリイスク地方を領有し、現在の沿海州をも含む全極東地方にロシヤの國旗がひらめくやうになつた。それ以來一八六四年アラスカ及びアリューシヤン群島を米國に讓渡したこと以外には世界戦争に至るまでロシヤ帝國はその領土を失ふことなく、一九一四年現在の國土面積は約二千八百八十万方呎、人口約一億七千八百萬を算へるに至つた。

#### 「農奴解放」と「異種族」

ロシヤ資本主義の急激な發展を保障した一八六一年の所謂「農奴解放」は、農奴制經濟の矛盾崩壊過程に一つの結末をつけたものであり、それは十八世紀末から十九世紀にかけてますます強化された農奴收取より自らを解放せんとする廣汎な農民運動によつて促進されたものである。しかしながら「解放」は一般農民に期待されたほどの經濟的利益をもたらさなかつたのみならず、結局において農民が地主の隷屬者たるの地位に甘んじなければならぬカラクリをもつてゐた。<sup>(註)</sup>ウクライナ、沿ヴォルガ諸縣においては特に「解放」の條件がひどかつたが「植民地」においてはそれ以上に劣惡であつた。唯一つの例外はポーランド諸縣の農民であつた。こゝでは一八六三年に大ロシヤ人地主に對する叛亂がおこり、

労働者、農民、小市民以外に一部のポーランド貴族もこれに参加し、農民はその「民族闘争」を利用して自國の地主に對しても攻撃を加へ、ブルジョア革命の性質すら帯びるに至つた。この叛亂は成功しなかつたが、革命運動のウクライナその他への波及を恐れた専制政府は、ロシヤ帝國の「統一」と「不可分」を維持するために、ポーランド農民に對する「解放」の條件を幾分よくしたのである。……東部の植民地では、資本主義關係の浸透がまだ弱く、農奴制の崩壊過程は特にゆるやかに行はれ、まだ完全に消滅してゐなかつた氏族制度の殘滓と封建關係との結合のために、地方封建領主の抑壓は特に強かつたし、農民運動はきはめて地方的に限定された性質を帯びてゐたから、改革は一そう甚だしく農奴制的相貌を持続した。後カウカサスの一部、ギリヤ、ミングレリヤにおいては比較的廣汎な商業關係の影響で封建關係の崩壊がずつと顯著であつたから、五〇年代には(殊にミングレリヤにおいて)……比較的組織立つた農民運動が行はれた。<sup>(註)</sup>ギリヤ、ミングレリヤにおける農民の叛亂は後カウカサスにおける「改革」を促したが、それはポーランドほどの大きい「讓歩」を伴はず、グルジャにおいては條件が更に劣惡であつた。最も困難な條件におかれたのはパンキールであつた。こゝでは殆んどすべての土地資源が、ツアー政府の官吏やロシヤ移民によつて農民の手から掠奪された。北カウカサス地方でも同様のことがおこなはれた。チエチエン人の蜂起は「改革」の着手を促したが、山地民には土地の附與を絶対に認めず、「身代金」もきはめて高かつた。カバルダ、オセチン、アディゲイ等の諸族の「解放」も封建領主を富まし、農民をこれに隷屬せしめたに止つてゐる。かくて「農奴解放」はこれら植民地においては大ロシヤ、ウクライナ等の農民に比して一層苛酷な條件を付加し事實上の「收奪」におはつたわけである。二十世紀初頭の民族解放運動は既に一つの「宿命」であつた。

(註一) 農奴「解放」は農民の間に激しき反對を喚起す。農民騷擾は二万件以上のほり、農民の殆ど半数は解放の證書に署名することを拒む(一八六一—一八六二年)——ボクロフスキ「ロシヤ史」前掲七〇一頁。

(註二) ワナーグ「ロシヤ民族史」前掲一九二頁。

第一章 ロシヤ多民族國家生成の歴史(概説)

十九世紀末の國內事情 (註) しかし一方において、「農奴解放」は「自由な」労働力の激増をもたらし、ロシヤ工業はこの影響によつて驚くべき發展を遂げた。資本主義工業の發達は、十九世紀末より組織的労働運動を擡頭せしめ、一八九一年の大飢饉とそれにつゞく商業恐慌とは社會不安を深刻化し、社會民主主義の勃興と相まつて罷業は各地に頻發した。一九〇五年の革命は戸口に立つてゐた……。

(註) 十九世紀末ロシヤ工業の發展は次の數字によつて明かである。

年次	工場數	労働者數	生産額(千留)
一八五四	九,九四四	四五九,六三七	一五九,九八五
一八八一	三一,一七三	七七〇,八四二	九九七,九三三
一八九三	二二,四八三	一,四〇六,七九二	一,七五九,四三一
一八九六	三八,四〇一	一,七四二,一八一	二,七四五,三四五

(改造社「社會科學大辭典」一二五〇頁)

結 言

きはめて粗雑ではあつたが、十九世紀末までの「概説」をこゝで打切ることにする。舊ロシヤの民族政策について二、三の附言を許されるならば、それは有名なウワロフ(ニコライ一世時代の大臣)の「希臘正教、專制政治國家主義」といふ言葉によつて充分特徴づけられてゐる。あるひは農奴制的抑壓の一語に盡きるであらう。多數の諸民族を統治する上の手段として、イギリスがインドに對して行つたと同様に、各民族、民族間の不和、反目を激成する政策がとられたことは周知の如くであり、かの猶太人に對するボグロムやタタール、アルメニヤ人等に對する虐殺をもあえて辭せずまた少數民族の經濟的、文化的發展を極度に抑制し、ひたすら宗教と強權による大ロシヤ化の政策を追求したことは人も知るところである。そして被壓迫民族の不滿、鬱憤がつひに爆發して「民族解放」の闘争にまで進展し、二十世紀初頭の革命において大きい役割を演じたことも議論の餘地はなからう。

(註) 帝政ロシヤの役人が使喚して一地方住民擧つてその地方の特定民族を迫害せしめること。

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

第一節 舊ロシヤ帝國の民族分布状態と民族分類上の諸説

ソ聯邦における民族分布状態をみる前に、先づ帝政ロシヤ時代の資料について一通り諸民族の地域的分布を大観しやう。「小百科」に掲載されてゐる「母國語別人口構成表」は、きはめて簡單ながら、一應の参考にはなるだらうと思ふ。

一八九七年國勢調査資料による母國語別人口構成表 (『小百科』)

言語群 (總數)	主要言語	人 口 (單位 千)					全帝國合計
		歐露五〇縣	波蘭一〇縣	カウカサス	シベリヤ	中央アジア	
一、スラヴ語群 (九二,〇八九,七三三)	ロシヤ語	七四,七九七	六三二	三,一五五	四,六五九	六九〇	八三,九三四
	大ロシヤ語	四八,五五九	二六七	一,八三〇	四,四二四	五八八	五五,六六八
	小ロシヤ語	二〇,四一五	三三五	一,三〇五	一一三	一〇二	二二,三八〇
	白ロシヤ語	五,八二三	三〇	二〇	一一	一	五,八八六
	波蘭語	一,一一〇	六,七五五	二五	二九	一一	七,九三一
	其他スラヴ語	二二三	八	四	一	一	二二五
	レツト語	一,四二二	五	一	七	一	一,四三六
	リトワニヤ語	八九七	三〇五	五	二	一	一,二一〇
	ジエムツド語	四四八	一	一	一	一	四四八
二、レツト・リトワニヤ語群 (三,〇九四,四六九)							

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

三、ローマンズ語群 (一、一四三、〇〇〇)	四、ゲルマン語群 (一、八一三、七一七)	五、イラン語群 (七八四、七四六)	六、アルメニア語群 (一、七三三、〇九六)	七、其他インド・ヨーロッパ諸民族 (一、三三二、七五五)	八、セム語群 (五、〇七〇、二〇五)	九、フィン語群 (三、五〇〇、一四七)	一〇、トルコ・タタール語群 (一、三六〇、二五二)
ルーマニア語 モルダヴィア語 其 他	獨逸語 其 他	オセチヤ語 タタール語 其 他	アルメニア語 希臘語	希 臘語	猶 太語 其 他	エストニア語 モルドワ語 其 他	タタール語 バシキール語 チユワシ語 キルギズ語 カイサクト語 サズベト語 ウズベト語 其 他
一、一〇九	一、一七	一、三二二	四九	一、一六	三、七一五	九、九〇	一、一〇
五	二	四〇七	一	一	一、二六七	二	一
七	二	五七	一、二一八	一〇八	四〇	三	一
一	六	一	一	七	三三	四	一
一、二二二	二二	一、七九一	一、一七三	一、三三三	五、〇六三	一、〇〇三	一、〇二四
二二	二二	七九五	一	一	七	一、四七三	一、四七三
一、二二二	七二六	九六八	四、〇八四	八四三	三、七三七	一、三三二	一、三三二
二、二二二	七二六	九六八	四、〇八四	八四三	三、七三七	一、三三二	一、三三二

一、蒙古語群 (四八〇、二一八)	二、其他ウラル・アルタイ語群 (八五、五四一)	三、カルトヴェル語群 (イヴェル語群) (一、三五二、五三五)	四、カウカサス山地民族語群 (一、〇九一、七八二)	一五、其 他
カルムイク語及プリヤイト語 サモエド語、ツングイス語	グルジヤ イメル シゲレ スワ チエ アヴァ アロ アチ アロ アチ アロ アチ アロ アチ	北氷洋諸民族語、日本語支那語等		
一七三	四	一	一	四
一五	八二	一〇八八	二	一〇四
二八九	八二	一〇四	二	一〇四
三	三	一七	一	一七
四八〇	八六	一、〇九二	一、〇九二	一、〇九二
九三、四四三	九、四〇二	九、二八九	五、七五九	七、七四七
九、二八九	五、七五九	七、七四七	二、二五、六四〇	二、二五、六四〇

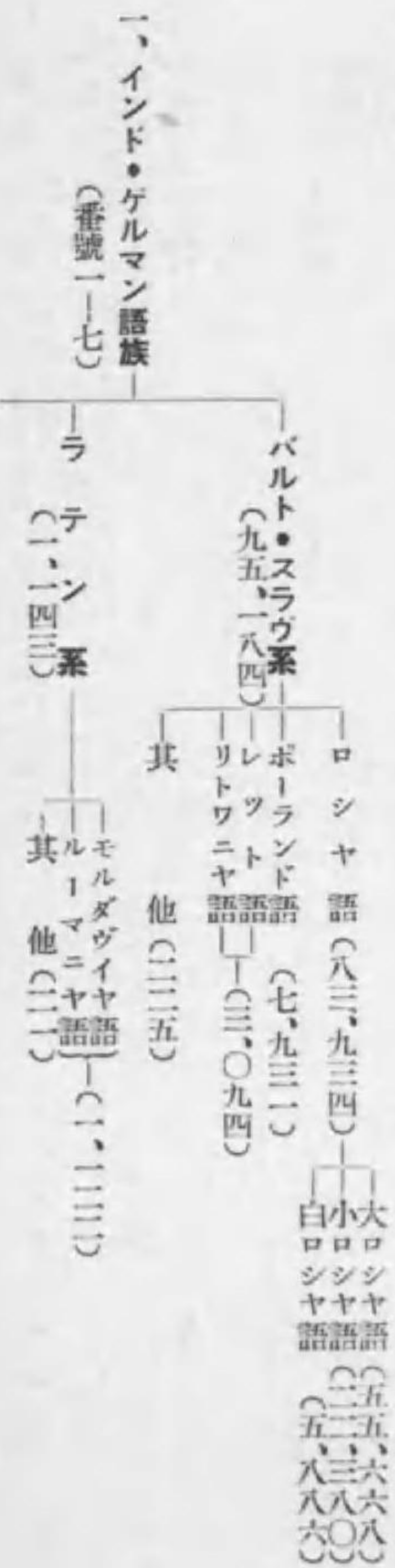
こゝで問題になるのは分類の方法である。ロシアに住む色々な民族は、人種學・土俗學的に、種族別にあるひは言語系統によつて、古來さまざまなグループに分類されてゐるのであるが、それらの分類は必ずしも確實な基準によるものとは云ひ難い。むしろ、その多くは常識的、便宜的乃至は「政治的」な分類に過ぎず、どの程度まで科學的批判に堪えうるかは疑はしいものである。概していへば、世界の人種系統一般に關する嚴密な定説さへ確立されてゐないのであるから、ロシアだけに限つた問題ではないとも考へられる。しかしロシアにおける種族・民族の分類は特に困難な状態におかれてゐるやうである。その原因としては要するに(一)地理的、歴史的に歐亞の大連にまたがるロシア諸民族の人種學的・種族的構成が非常に複雑であること、(二)永い歴史を通じて色々な種族の間に夥しい混血、同化がおこなはれたこと、(三)若干の種族に關する考古學、土俗學、言語學的研究がきかぬ不十分であること、(四)一局地の特殊の種族と思はれるものが實はヨリ大きいグループの一支族であり、移動にとり残されて特定の地方に永住した結果に過ぎないといふやうな例が少くないこと、(五)人種學上の謎とされるカウカサス地方を含むこと、などが挙げられる。「科學の進歩」を誇るソ聯邦においてさへ、一九二六年末

の國勢調査によつて判明した二百近くの雑多な「民族」をもてあましてゐたやうな状態であるから、帝政時代の民族分類の方法が杜撰であつたとしても無理からぬこと、いはねばならぬ。

筆者はもとより過去の色々な分類に對して嚴密な科學的検討を加へるだけの力も無いし、又その場所でもないと思ふから本章においては、在來の分類中で資料關係からもつとも便宜と考へられるものを利用しつゝ、諸民族の分布状態を述べることにした。科學的に根據のある、より確實な分類は、これを人種學、言語學、考古學等の將來の進歩に期待すべきであらう。

しかしながら、どんな分類でもそれ相當の根據をもつてゐるのであるから、ロシア諸民族の特性を知る上に示唆する所少くないと思ふ。我々はしばらく貴重な紙数をロシア諸民族分類上の諸説に費さねばならぬ。

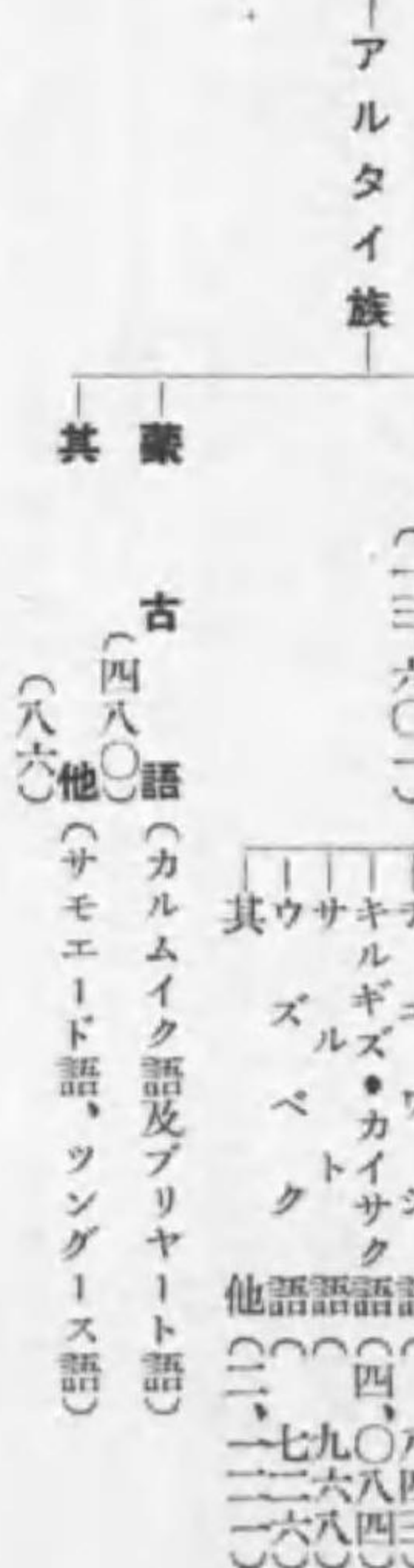
一、先づ帝政ロシアの諸學者がロシアの諸民族をいかに分類してゐたかを見よう。本章のはじめに引用した「小百科」掲載の「構成表」はその一例である。こゝでは一八九七年現在のフィンランドを除く全ロシア人口が、きはめて無難作に十五の「語群」に大別されてゐるかに見える。しかし仔細に觀ればそこに一つの系統が無いではない。これを世界の言語系統によつて整理すれば次の如く圖式化することができる。(人口單位一十千)



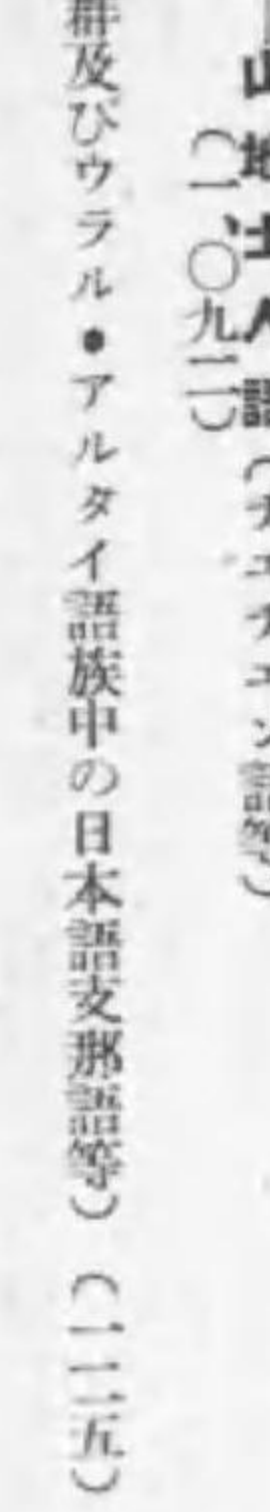
二、セム・ハム語族 (番號八)



三、ウラル・アルタイ語族 (番號九)



四、カウカサス・ヤベテ語族 (番號一三)



五、其他 (番號一五)



(註) 系統的分類の方法は大體において金田一京助氏の説(平凡社大百科事典「言語」の項参照)に準據した。括弧内の番號は第一章初めの「構成表」の「語群」番號である。

二、帝政ロシアのアヌーチン教授も略々これと同様の分類を發表してゐる。即ち一八九九年發行の「百科辭典」第二七卷Aに掲げられてゐる同教授の「人種誌」的分類によれば、ロシアの諸民族は言語を基準にして二つの最も基本的なグループに大別できる。

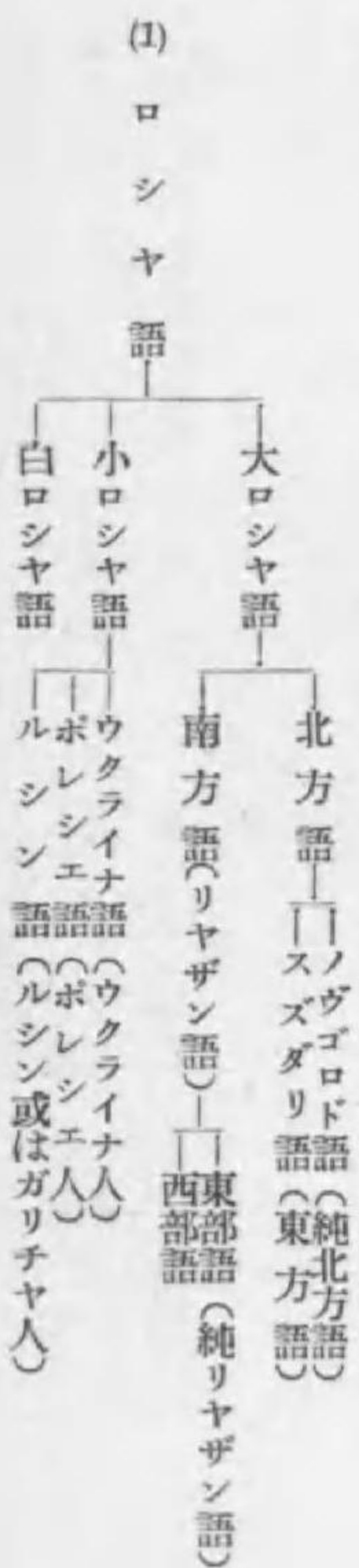
- A アーリヤ語族(インド・ヨーロッパ語族)
- B ウラル・アルタイ語族

尙その外に、C セム語、D カウカサス語、E その他のアジア諸族語(「極北語群」の謂であらう)の三つがある。ア教授の敘述は非常に廣汎にわたつてゐるが、これを要約して、以上五つの主要な「語族」を再分すれば次の如くである。

(A) アーリヤ語族(インド・ヨーロッパ語族)

これは前表と大體同じである。即ち I スラヴ語群、II レット・リトワニヤ語群、III ゲルマン語群、IV ロマンズ語群、V 希臘語群、VI イラン語群、VII 印度語群に分たれる。

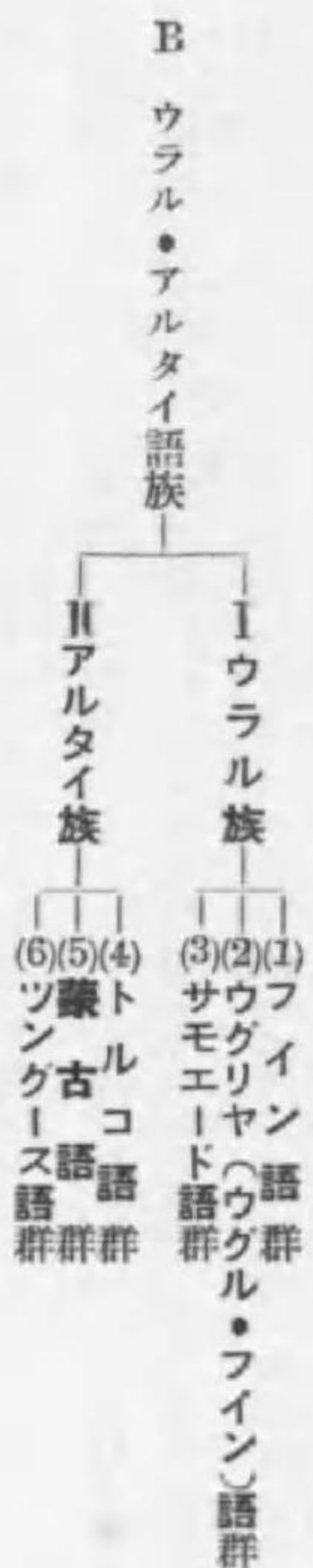
I スラヴ語群は更に(1)ロシア語、(2)ポーランド語、(3)ブルガリヤ語に再分される。その中(1)ロシア語を方言に細分すれば



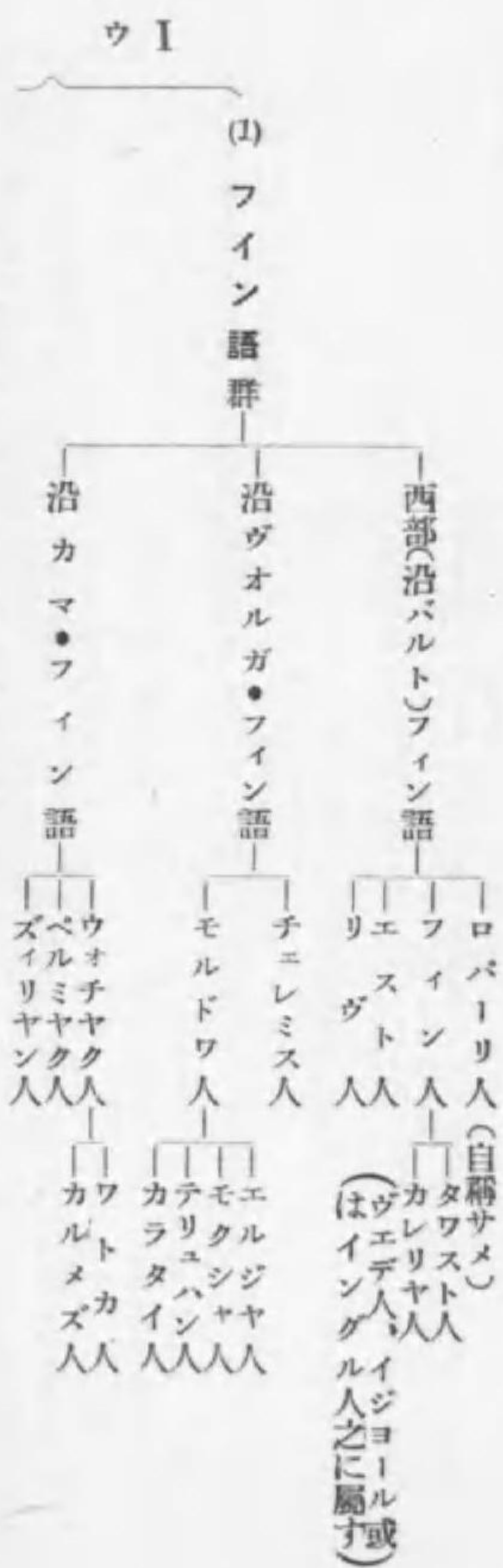
となり、IV ロマンズ語群はロシヤ南部に若干住んでゐるルーマニヤ人やイタリヤ人、フランス人によつて代表されるのみ。VI イラン語群は(1)タヂク語、(2)ベルシヤ語、(3)タート語、(4)クルド語、(5)オセチン語、(6)アルメニヤ語に分たれる。

VII 印度語群を代表するものはロシヤに散住するジブシイ族のみである。  
(B) ウラル・アルタイ語族

大別すれば次の二族及び六語群に分たれる。



アヌーチン教授は更にこれを「種族」別に細分してゐる。



第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

(2) ウグリヤ(ウグル・フィン)語群 「ウナグール人」「オスチヤク人」同一のマンジ族(自稱)を成す。

(方言別)

(3) サモエード語群

- ユラク人
- エニセイ・サモエード人
- タヴギ人(アワム・サモエード人)
- オスチヤク・サモエード人
- 遊牧ソイオト(ウリヤンハイ)人も之に屬す。

(4) トルコ語群

- ヤクイト人
- アルタイ人(山地カルムク人、テレウト人、テレンゲト人)
- オビ上流タタール人(化エニセイ人及サモエード人)
- 西部シベリヤ・タタール人(土着)及バラバイ人
- キルギーズ・カイサク人(キルギーズ人)
- カラ・キルギズ人
- ウズベク人(チヤガタイ方言)
- サルト人
- タランチ人
- トルクメン人
  - エルサル人
  - サロル人
  - サツルイタ人
  - チヤウドゥル人
  - ヨムレド人
  - ギョクレン人
  - タタール人(オスマン・トルコ及カラ・ババフ人々に類す)
- アデルベイジャン人
- カラ・カルパク人
- ノガイ人
- クムイク人
- クリミヤ・タタール人
- ヴォルガ・タタール人
- バシキール人(メシチエリヤク人及テプテヤリ人も之に屬す)
- チユワシ人
- 東蒙古人
  - ブライヤイト人
  - 北部蒙古人(ハルハ人)
  - 南部蒙古人(シャロンゴル人)

(5) 蒙古語群

(6) ツングース語群

- 西蒙古人(オイロト人)
  - オホチヨン人(養鹿ツングース)
  - マニグダ人
  - ゴリヤイト人
  - ラムイト人
  - チユンガル人
  - トルゴウト人
  - ホシゴウト人
  - ヂユルビト人
- 滿洲人
- ツングース人

(C) セム語

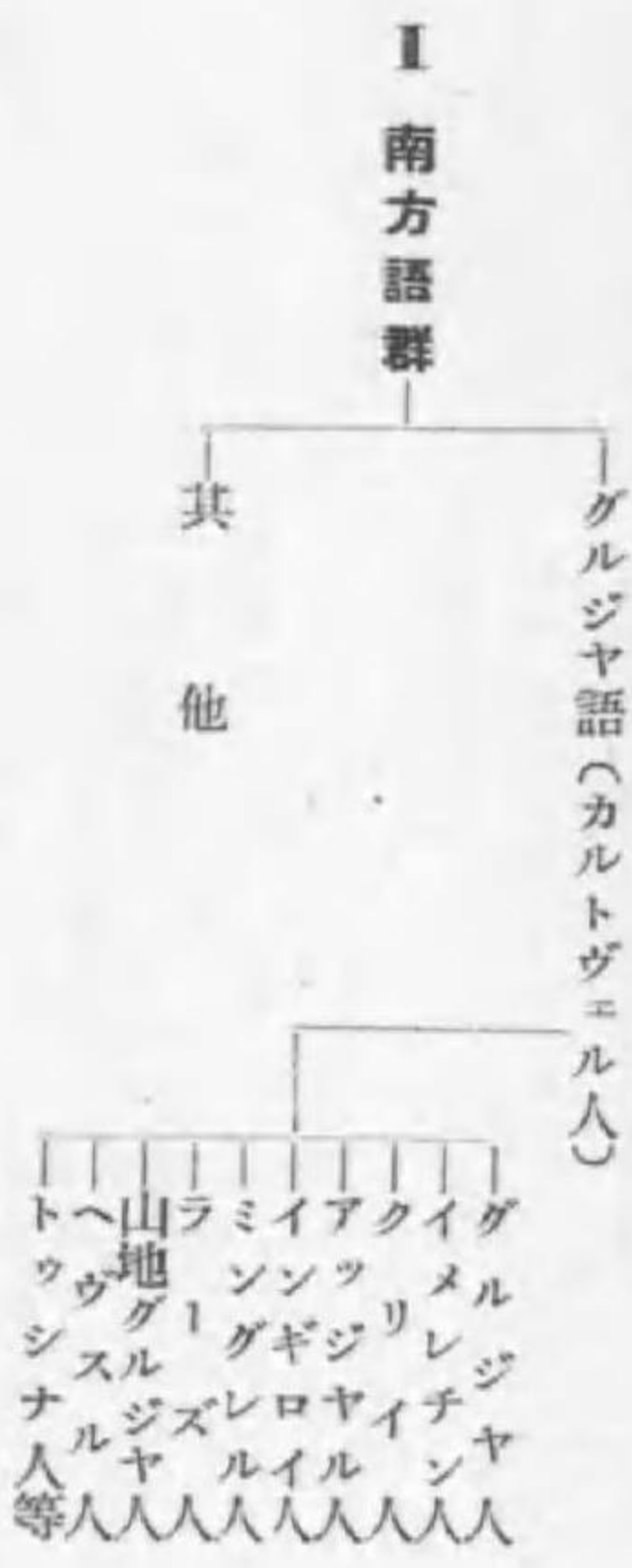
セム語といつても、中亞及びダゲスタンの少數アラビヤ人はその國語を殆ど用ひず、「マホメット」語は回教徒の經典(コーラン)語として残るに過ぎない。約四百萬の猶太人は主として十五世紀以後獨逸からポーランド、西部地方及び小ロシアに移住した(尤もそれ以前から古代キエフにも一部住んでゐたことは事實である)ので此のひどいドイツ語の方言を用ひるもの多く、カライム人はクリミヤ・タタール語を用ひてゐる。

(D) カウカサス語

大別すればI北方語群とII南方語群に分たれ、それを細分すれば次の如くである。







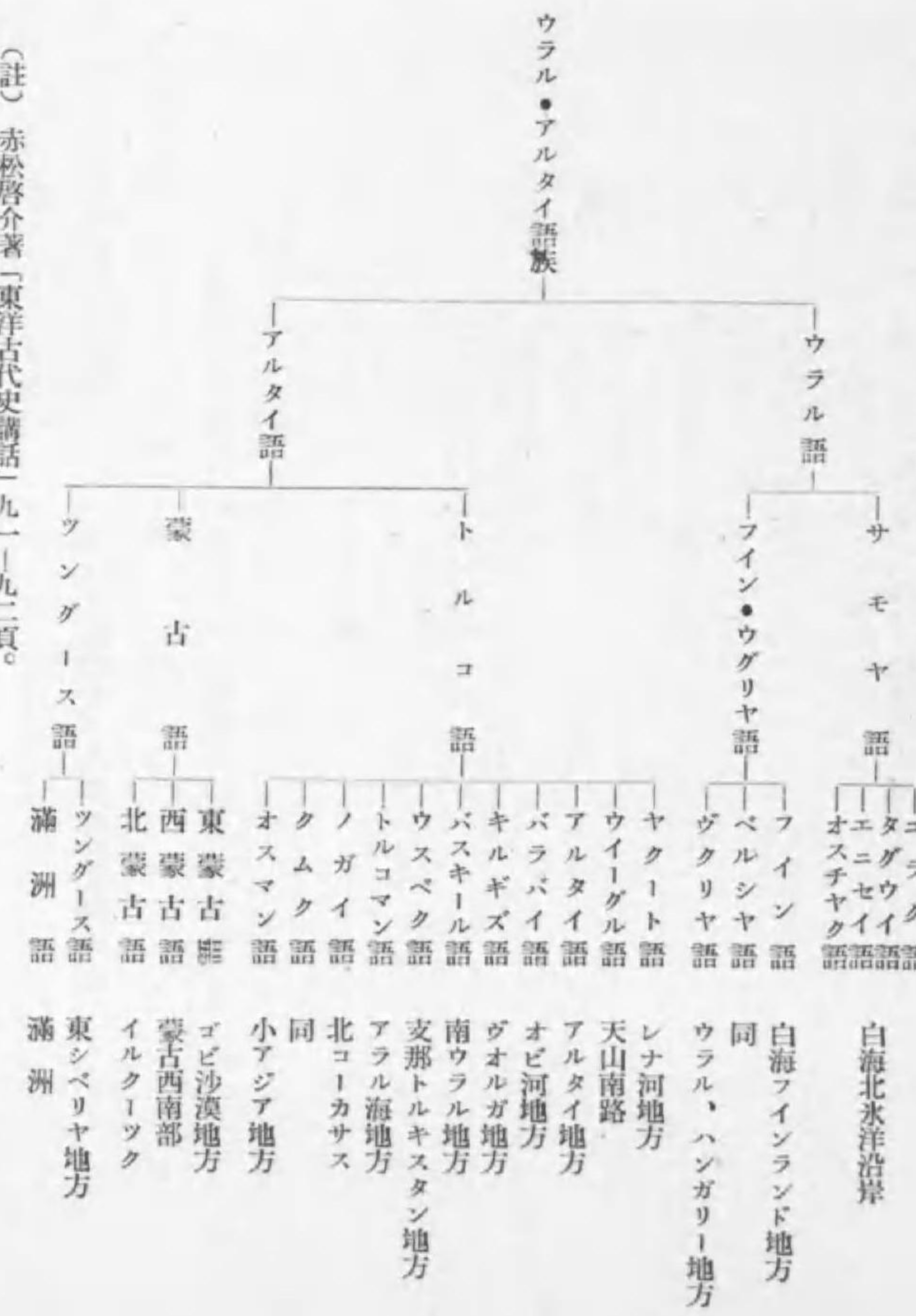
(E) 其他 (極北語群)

以上何れの語族にも属しないものに I エニセイ・オスチャク人、II ユカギール人、III コリヤーク人、IV カムチャダール人 V チュクチ人、VI アイヌ人等がある。その他ロシアには相當数の支那人、朝鮮人及び少數の日本人が住んでゐる。

アヌーチン教授の分類は大體右の通りであるが、その正否は別としてロシアに住む殆どすべての諸民族を言語系統によつて細大洩らさず分類してゐる點に特長があるやうに思はれる。各種族の沿革や特性に關する敘述もかなり良心的であり、詳細にわたつてゐるが、それらは今後の説明に利用されることにならう。

フィン族は非常に古い時代からヨーロッパに住んでゐるが、それがアジアから移住したといふ説には反對論がある。即ち帝政ロシアの「大百科」にも、フィン族は「歐洲における基本的古代住民とみなすべきである」と書かれてゐるし、アヌーチン教授も亦フィン及びサモエード族が共に南アジアから來たとの説に反對して「フィン族の故郷が歐露であると考へる根據は充分ある」と述べ「サモエード族はサヤン山地から來たものゝ如くである」と言つてゐる。しかし言語系統からみて兩者ともウラル・アルタイ語族の「ウラル族」に屬してゐることは既述の如くである。これによつて見ても、北部アジア、中央アジア及び北歐に亘るウラル・アルタイ語族の分布地域がいかに大きいかと解る。因みに日本の碩學赤松啓介氏の分類を

紹介しよう。これも前記アヌーチンの分類と大きい差は無いやうだ。



(註) 赤松啓介著「東洋古代史講話」九一九二頁。  
三、もう一つ帝政ロシアの「大百科」にのつてゐるロシア人口の「種族的構成」を調べてみよう。これは歐露、フィンランド、カウカサス、シベリア、露領中亞について別々に敘述されてゐるが、數字は肝心の一八九七年國勢調査資料が間に合は

なかつたために七〇年代の雑多な資料に準據したものであり、歐露以外はきはめて簡單にしか述べられてゐないから、さほど珍重するに當らないと思ふ。歐露人口の構成は相當詳しく書いてあるが、分類の方法は大體アヌーチン教授と同一で、唯部分的にいくらか違ふだけである。

A 十九世紀七〇年代の歐露（フィンランドを除く）人口の種族的構成

一、スラヴ系種族（歐露全人口の約七九%）

(イ) ロシヤ人（全人口の約七二・五%）——總數約八千六百萬強。

(1) 大ロシヤ人

(2) 小ロシヤ人 細別はアヌーチン説と略々同じ

(3) 白ロシヤ人

(ロ) ポーランド人（全人口の約六・六%）

(ハ) アルガリヤ人（總數約十二萬五千）

二、リトワニヤ種族（全人口の約三・九%）

(イ) リトワニヤ人

(ロ) ジムード人（合計約百八十萬）

(ハ) レットト人（約百三十五萬）

三、ゲルマン系種族

(イ) 獨逸人（全人口の約一・三%）——總數約百五十萬

(ロ) 瑞典人（總數約九千五百）

四、其他ヨーロッパ諸族

(イ) ルーマニヤ人（モルダヴィヤ人）約九十萬

(ロ) 佛蘭西人及び伊太利人——若干。

(ハ) 希臘人（約十萬）

(ニ) アルメニヤ人——カウカサスを除き約五十萬人。

(ホ) ジブシイ人——各地に散在。

五、セム系諸族

(イ) 猶太人（全人口の三・四%）——ロシヤ全體で約四百萬。

(ロ) カライム人（約一萬）

六、フィン種族（全人口の約六・六%）

(イ) 沿バルト・フィン族

(1) ロバリ（ラブランド）人（約三千五百）

(2) フィン人

(3) カレリヤ人（約二十萬乃至三十萬）

(4) エスト人（約九十萬）

(5) リーヴ人（約三千五百）

(ロ) 沿ヴォルガ・フィン族

(1) チェレミス人（約三十萬乃至四十萬）

第二章 ヲ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

- (2) モルドワ人 (約一百万) ———— | エルジャヤ人
- (ハ) 沿カマ・フィン族
- (1) ヴォチヤク人 (約四十萬)
- (2) ベルミヤク人 (約九萬)
- (3) ズイリヤン人 (約十七萬)
- (ニ) ウグル・フィン族
- (1) ヴォグル人 (約七千)
- (2) オスチヤク人 } マンジ族 (合計三萬餘)
- (ホ) サモエード族 (歐露では精々數百戸)
- 七、トルコ・タタール系種族 (歐露人口の四%)
- (イ) キルギーズ族 (不明、アストラハン縣に約二十五萬)。
- (ロ) ノガイ族 (約十萬)
- (ハ) クリミヤ・タタール族 (約十五萬)
- (ニ) ヴォルガ・タタール族 (約百三十萬)
- (ホ) バシキール族 (約百三十萬)
- (ヘ) メシチエリヤク族 (約十三萬) | フィン系
- (ト) テプチャリ族 (約三十萬)
- (チ) ベツセルモン族 (約十萬)

(リ) チェウシ族 (約六十五萬) | フィン族との混血族。

八、蒙古種族——歐露にはカルムイク人 (約十二萬) のみ

B 十九世紀末におけるカウカサス人口の種族的構成

「大百科」の説明によれば、カウカサス住民の「種族的構成」はきはめて複雑であるが、それはこの地方の地理的位置によつても領けることである。即ちこの地方は古い時代幾世紀にわたつてアジアの諸族がヨーロッパへ移動した通路であり、近世においてはその反對の「移動」がおこなはれた通路なのである。加ふるにこの地方は山地的特性をもち、各々の流域、河谷盆地は互に隔絶閉鎖されてゐるから、移動の際とり残された色々な種族が、その「人種誌的」型、言語、風俗、習慣などを、久しきにわたつて純粹に保持し得たわけである。

これを「人種」別に分けてみると次の如くである。

- 一、ヨーロッパ人種 (インドゲルマニヤ族)
- (イ) ロシヤ人 約三百萬
- (ロ) 希臘人、獨逸人、波蘭人、チェツク人、ルーマニヤ人 | 合計十二萬。
- (ハ) アルメニヤ人 約百二十五萬
- (ニ) オセチン人 約十九萬
- (ホ) タート人 約十三萬五千
- (ヘ) クルド人 約十二萬
- (ホ) 其他のイラン族 (ベルシヤ人、タリシ人、ジブシイ人) 合計約八萬五千。
- 二、カルトヴェル族 (カルトヴェニルはグルジャヤ人の自稱)。

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

- (イ) 　　グルジャ人 約四十五萬
- (ロ) 　　イメレチン人 約四十七萬五千。
- (ハ) 　　ミンダレル人及ラーズ人 約二十二萬五千。
- (ニ) 　　クリイ人、アツジャル人、スワン人、ブシヤヴ人、インギロイ人、ヘヴスール人、トゥシナ人等合計——約八十五萬

三、山地 諸 族

- (イ) 　　チエルケツス人、カバルチン人、その他——合計約十八萬
- (ロ) 　　アブハズ人——約六萬五千。
- (ハ) 　　チエチエン人——約二十萬
- (ニ) 　　インゲーシ人——約三萬
- (ホ) 　　レズギン人その他東部山地住民——合計六十五萬。

四、セ ム 族

- (イ) 　　猶太人——約五萬
- (ロ) 　　アイソル人及びハドレイ人(二千有餘)

五、アジア人種

- (イ) 　　タタール人——約百五十萬
- (ロ) 　　クムイク人——約十二萬
- (ハ) 　　ノガイ人——約六萬

族

- (ニ) 　　トルコ人——約七萬
- (ホ) 　　カラチャエフ人、カラババフ人、トゥルクメン人等——合計約八萬
- (ヘ) 　　蒙古人(カルムイク人) 約一萬二千。
- (ト) 　　フィン人(エスト人及モルドフ人) 約千五百。

因みに一八九七年の國勢調査では、カウカサスの總人口は九百二十四萬八千六百九十五人となつてゐる。

C 一八九〇年におけるフィンランド人口の種族的構成

- 一、フィン人 八六・一%
- 二、瑞典人 一三・五%
- 三、其 他 〇・四%(ロシア人は約五千八百人)

因みに一九〇〇年現在のフィンランド總人口は二百六十七萬三千二百人となつてゐる。

D 露領中央アジア人口の種族的構成

「大百科」には各州の人口及び宗教別構成以外には、種族的構成に關する數字(百分比さへも)が示してないから、概述のみに止めよう。中央アジアの原始住民は(一)イラン人(インド・ゲルマニヤ族)より成つてゐるが、これは現在に至るまで主として西部地方の河谷に残存し、農耕、牧畜に従事してゐる。

最も多數を占めるものは(二)トルコ諸族(キルギズ人、ウズベク人、トゥルクメン人)であり、東部には(三)蒙古族が住み、各地に(四)タチツク人、サルト人等(原住イラン人とトルコ系との混血)が住んでゐる。ロシア人はきはめて少數。

E 十九世紀末シベリア人口の種族的構成

一八九七年の國勢調査によるとシベリアの人口は約四百五十萬人であり、これを大別すれば

(イ) ロシヤ人 約四百萬

(ロ) 土民及びロシヤ人以外のヨーロッパ人 約五十萬

西部シベリヤのエニセイ縣ではロシヤ人が九〇%を占め、東部シベリヤのイルクツク縣及びザバイカルでもロシヤ人が壓倒的多数を占めてゐるが、ヤクート州及び沿海州では土民が優勢である。

(イ) シベリヤのロシヤ人にも色々の系統種類がある。

(a) 最初シベリヤに移住したコサツク義勇兵

(b) 「軍務」に服したコサツク

(a) (b) がシベリヤ各地方の占領者であつた。

(c) スタロジール(舊住民) 古い時代に強制的に移住させられたもの、或は自發的に移住したもの、流刑者及び刑期満了の囚人。それらの子孫。

(d) ノヴォセル(新移民) 歐露各地よりの移住後日淺く、郷里の風習、世態を保ち、舊住民と未だ合流しない人々。

(e) ヤクート人、ブリヤート人等と混血して言語、風俗、習慣、職業等々において著しく「土民化」した者。

概して云へば、シベリヤ在住のロシヤ人には、「シビリヤーク」といふ特殊の型が認められる。それは生活様式においても方言においても、又「性格」においても典型的ロシヤ人とは異つてゐる。移民條件を緩和、改善した「移民法」の公布によつて十九世紀末のシベリヤ移民は著しく増加し、八〇年代は毎年二萬乃至三萬に過ぎなかつたものが、九〇年代には年二十萬以上にものぼつてゐる。

(ロ) ロシヤ人以外のヨーロッパ人移民としては、ポーランド人、獨逸人、猶太人、エスト人、レット人等が挙げられる。シベリアの土民を文化の程度によつて分類すれば

(a) 最も野蠻な漂泊民——シベリヤ北東の狩獵民(ツングース人)

(b) 漁民——オスチャク人等

(c) 遊牧民——キルギーズ人等

(d) 農民——ブリヤート人、タタール人等

宗教方面でも色々の差異がある。

(a) 最も頑固な回教信者(タタール人、キルギーズ人等)——約六萬。

(b) 喇嘛教を信ずるブリヤート人及びカルムイク人(約二十五萬)

(c) 公式には「正教への轉宗」となつてゐるが、實際には最も蒙昧且つ原始的な偶像崇拜者であり、「靈魂」や自然力を神秘化して種々の呪物を禮拜する土民(シャーマン信者等)。

以上三つの分類を比較してみると、先づ「小百科」の方は一八九七年國勢調査の資料を利用してゐるので人口の數字は正確であるが、分類がきはめて概略的であり、アヌーチン教授の分類は言語系統を基準にして非常に細かく分けてゐる點に特徴がある。「大百科」の方は數字が不正確であり、地域によつてごく簡単にしか記述されてゐない部分もあるが、歐露、シベリヤ等の「種族的構成」はかなり詳細であり、益するところ少くない。

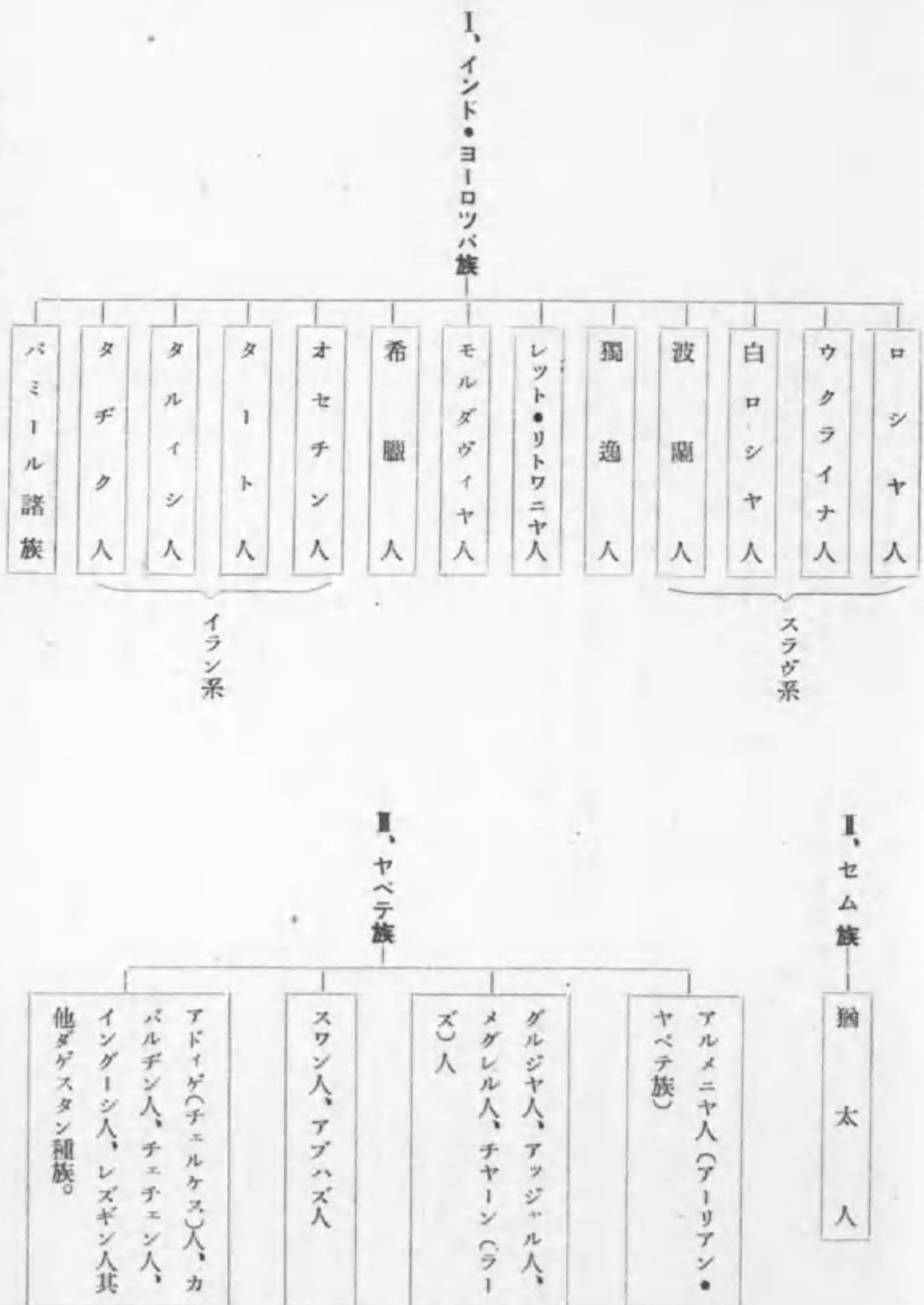
こゝで一つ注意しておきたいのは「ロシヤ人」といふ呼稱の問題である。ソ聯の學者は、帝政時代の色々な民族關係の統計につてゐる「ロシヤ人」なる名稱が民族としてのウクライナ人、白ロシヤ人の獨自性を抹殺するために用ひられてゐることを指摘してゐる。例へば、帝政時代において本當のロシヤ人即ち大ロシヤ人は帝國總人口の四三%しか占めてゐないにも拘らず、統計では、ウクライナ人や白ロシヤ人までも「ロシヤ人」の中に加へて、「ロシヤ人」の比率を六五%にしてゐると非難する人がある。なるほど四三%と六五%とは大きい違ひであるが、この「見解の相違」は、政治的意味において興味

少しとしない。單純に考へれば、同じロシア・スラヴ系の種族なのであるから、一括して「ロシア人」と呼んでも差支へないやうにも思へるが、歴史的に形成された諸民族を、その民族としての獨自的特性において把握する立場からすれば、同一名稱の下に包括するのは適正でないともいへる。おそらく帝政時代においては、大ロシア主義乃至は汎スラヴ主義の立場から、すべてのロシア・スラヴ系乃至はスラヴ系の諸民族を統計上「一視同仁」する傾向が強かつたのであらう。大ロシア人小ロシア人といつても「方言」の相違、風俗上の若干の相違に過ぎない——と軽く扱つてゐるやうに思はれる。しかしながら今日、大ロシア人、小ロシア人、白ロシア人が民族としてそれ／＼獨立的地位にあることを否定するものは恐らくあるまい。混亂を避けるために、以下「大ロシア人」をロシア人或ひはロシア民族と呼ばふ。我々が普通ロシア人といつてゐるのも結局「大ロシア人」のことなのであつて、ウクライナ人等はその中に含まれてゐない。

四 ついでながら、ソ聯邦の學者がその諸民族をいかに分類してゐるかを見よう。こゝでも問題は最終的に解決されたわけではない。諸民族の系統的分類については色々議論の餘地があり相當手こづつてゐるやうである。前述のグラウンデ教授の「民族表」は有名なマール博士のヤベテ説などを援用した、かなり科學的（言語學的）根據あるものと考へられるが、これはいづれ後の節で紹介することにしよう。

「ソヴェート小百科」の第八卷（一九三〇年版）にはソ聯邦科學院「ソ聯人口種族構成調査委員會」の資料に基づいて作成された「ソ聯邦人種地圖」が掲げられてゐる。「凡例」中の諸種族は大まかに五十四に色分けされてゐるが、それらは大別して I インド・ヨーロッパ族、II セム族、III ヤベテ族、IV フィン・ウグリヤ及びサモエド族、V チュウワン族、VI トルコ族、VII 蒙古族、VIII ツングース滿洲族、IX 舊アジア族、X 極東文化民族にそれ／＼包括されてゐる。この地圖はソ聯邦諸種族の地域的分布を一目瞭然たらしめる點で甚だ便利である。

いま、での色々な分類に締め括りをつける意味で、これを簡単に要約すれば、次の分類表ができあがる。



IV、フィン・ウグリヤ及サモエード族



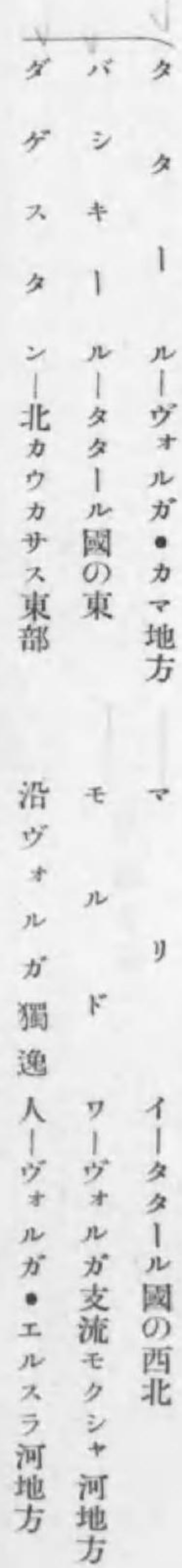
VI、トルコ族



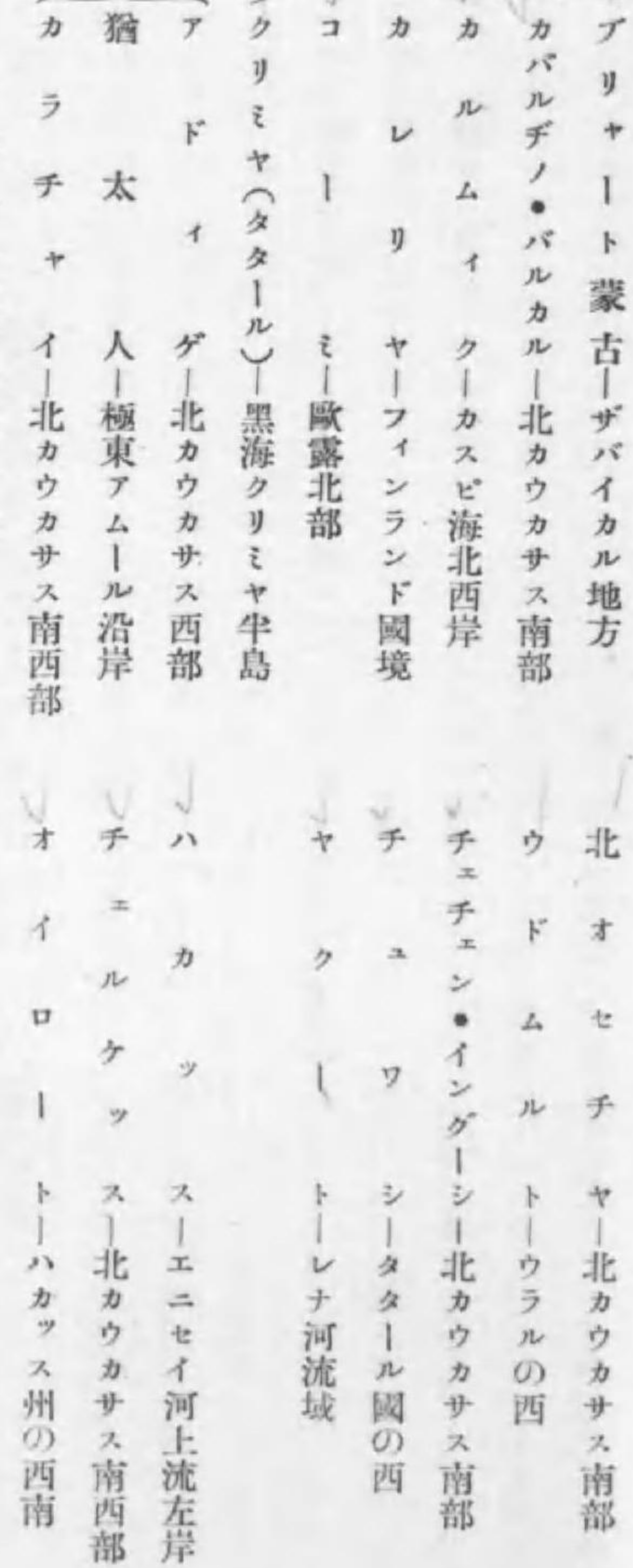


「ソヴェート小百科」には尙ソ連邦人口の「民族的構成」に関するイ・ザルーピンの敘述があるが、分類は大體右の表に準據してゐる。

ソ連邦の所謂「民族的・地域的單位」即ち「民族的」加盟共和國、自治共和國、自治州、民族管區などの位置を見ることによつても地域的民族分布の概要を知ることができる。これに就いては、いづれ第三章において一通り述べるつもりであるが、「スターリン」新憲法以後の十一加盟共和國、二十二自治共和國、九自治州の名稱及び位置だけでもここに列記しておく。



自治共和國



二、ウクライナ共和國(歐露の南西部)

モルダヴィヤ自治共和國(ウクライナ共和国の南西隅)

三、白ロシア共和國(歐露の西部ソ波國境地帯)

四、アゼルバイジャン共和國(南カウカサスの南東隅)

ナヒチェワン自治共和國(南カウカサス最南端)

山地カラバフ自治州(ナヒチェワンの東)

五、ゲルジャ共和国(南カウカサス西部、黒海に面す)

アブハジャ自治共和國(ゲルジャの西端) 南オセチヤ自治州(ゲルジャ北部)

アツジャール自治共和國(ゲルジャの南西端)

第二章 ソ連邦全土にわたる諸民族分布状態の概観



- 六、アルメニヤ共和国（南カウカサスの南部）
- 七、トルクメン共和国（カスピ海南東岸、アラル海地方）
- 八、ウズベク共和国（中アジア、アラル海より南東）  
カラ・カルバク自治共和国（アラル海南岸）
- 九、タジク共和国（ウズベク國の南東、アフガニスタン、印度國境）  
山地・バダフシャン自治州（タジク國の西端）
- 十、カザーク共和国（アラル海以東一帯の地域）
- 十一、キルギーズ共和国（中アジア、新疆と隣る）

### 第二節 ソ聯邦各民族の人口及び地域的分布状態

ソ聯邦全土にわたる諸民族の分布に關する最も正確な資料としては一九二六年十二月十七日の國勢調査資料が有るのみでそれ以來、ソ聯の人口は約一億四千七百萬から約一億七千萬に増加してゐるから、<sup>(註)</sup>總人口の民族的構成や諸民族の地域的分布の状態にもそれ相當の變化を生じたことは容易に推察できるのであるが、残念なことに、一九三九年一月十七日の國勢調査に基く各民族の分布状態に關する數字は未だ公表されてゐないし、今後いつ發表されるかも見當のつかない現在としては、しばらく一九二六年末の資料や數字で満足しなければならぬ。一九二六年以後もソ聯邦の人口は屢々算定されてゐるのであるが、各民族別人口に關する算定までは行はれなかつたものか、ソ聯のどんな新しい圖書や雑誌を探しても、人口の民族的構成や諸民族の地域的分布に關する數字は悉く一九二六年末國勢調査の資料に準據してゐるやうである。尤も個々の民族に關する數字は一九三〇年のもの、或ひは一九三三年のものが無いわけではない。例へば前記グランデ教授の「民族表」には

部分的に三〇年、三三年の數字が引用されてゐる。さうした數字はこの際大いに貴重であるから、できるだけ利用しやうと思つてゐるが、ソ聯邦全土にわたる諸民族の分布状態を大觀する場合には、今のところどうしても一九二六年末の數字を基礎にしなければならぬ。十二、三年も前の數字であるから大變古臭いやうにも思へるが、大體の分布状態を知るためにはこれで充分間に合ふ筈である。

(註) ソ聯邦人口の増加 (イズヴェスチヤ紙一九三九・六・二)

國勢調査	總人口		都市人口		農村人口		總人口に對する(%)	
	男	女	計	計	計	計	計	計
一九二六年十二月十七日 國勢調査	七,044,333	五,949,533	一三,013,866	二,711,114	一,107,401	一,708,715	20.8	12.7
一九三九年一月十七日 國勢調査	八,164,961	八,801,103	一七,066,064	五,560,628	二,445,737	八,006,365	30.2	16.7
一九二六年に對する	二二	二六	二五	二〇	二二	二二	—	—
一九三九年に對する	—	—	—	—	—	—	—	—

ソ聯邦各民族の人口を一目瞭然たらしめるために、一九二六年國勢調査資料による「ソ聯邦民族及言語別人口表」(別表第一)を七八頁に掲げておこう。見らるゝ通りこの表には人口千にも足りない少數の「民族」まで網羅されてゐるのであるが、このやうな微力な「民族」は政治的にも經濟的にもわざわざ取り上げるほどの意義はないと思ふ。我々の敘述は、多少とも顯著な民族だけに限定されることになるだらう。

(註) 「數字から見た全聯邦共産黨の民族政策」前掲三六—三八頁  
各民族の地域的分布状態に關しては、「ソヴェート小百科」にイ・ザルービンの要領よくまとまつた敘述がある。以下これを土臺にして、ソ聯全土にわたる諸民族の分布を鳥瞰することにしよう。(斷るまでもなく人口は一九二六年十二月十七日現在)

民族	人口	分布地域	備考
東スラヴ群 ロシア人	七七、七九一、一二四 (ソ聯邦人口の五三・〇五%) ロシア共和国 七四、〇七二、〇九六 (ロシア共和国人口の七三・四二%)	ロシア人の最も多く集中してゐる基本的地域は、云ふまでもなくロシア共和国のヨーロッパ領、つまり、「歐露」の大部分を占める一帯の地域である。こゝでは「少数民族地方」を除けば、全人口に對するロシア人の平均率は九〇%に近い。殊に歐露中央部の諸地方では九九%以上に達するところがあり、黒土地帯の南部に至ればこの率は次第に低減し、ヴォルガ中流及び下流地方では六二%乃至七四%となる。 北カウカサス地方では「少数民族地方」を除けば到る處ロシア人が絶對多數を占めてゐる。 シベリヤでは平均七八%、極東地方では六二%がロシア人に占められてゐる。 その他「少数民族」の共和国、自治共和国、自治州等でもロシア人はかなりの比率を占めてゐる。即ち、ウクライナ共和国の北境地帯(四二%)、白ロシア共和国の南東部(二六・三三七%)、カレリヤ自治共和国(五七%)、オイロト自治州(五二%)、ブリート蒙古自治	ロシア語の普及は、ロシア民族の人口に比して著しく廣汎である。(これは主として帝政時代にロシア化政策が強行された結果である。) ロシア語を「母國語」と認めてゐるものゝ數は 全聯邦—約八千四百十六萬(五七%)、 ロシア共和国—約七千七百八十二萬(七七%)、 つまりソ聯邦の非ロシア民族の中、約六百四十萬人がロシア語を以て「民族語」としてゐるのである。 (註)「別表第一」參照。數

ウクライナ人	三三、一九四、九七六 (ソ聯邦人口の二・二七%)	ウクライナ共和国 二三、二一八、八六〇 (ウクライナ共和国人口の八〇・二%)	共和国(四四%)、バシキール自治共和国(四〇%)、タタール自治共和国(四三%)、ヴォチヤク自治州(四三%)、タリミヤ自治共和国(四二%)などがそれである。 ウクライナ人の約四分の三はウクライナ共和国に集中してゐる。 その他ウクライナ人の分布してゐる主要な地域は 北カウカサス—約三百十萬七千 中央黒土地方—約百六十五萬二千 ヴォルガ下流地方—約四十四萬 カザーク共和国—約八十六萬一千 シベリヤ—約八十二萬七千 極東地方—約三十一萬五千。 白ロシア共和国の主として農業地帯に住んでゐる。 白ロシア以外では主としてシベリヤ(約三十二萬)及び白ロシア共和国の西境地方に住む。ロシア共和国内の白ロシア人は約六十三萬七千。ウクライナ共和国には約七萬六千。	ウクライナ語を母國語と認めてゐるものゝ數はウクライナ民族の人口よりも少い(總數約二七、五七二、〇〇〇)。 即ち言語的に「大ロシア人」—その他に同化されたウクライナ人の數が約三百六十萬に上つてゐるわけだ。 白ロシア語を用ひるものゝ數は白ロシア民族の人口よりも遙かに少い(總數約三百四十六萬七千)。
白ロシア人	四、七三八、九三三 (ソ聯邦人口の三・三三%)	白ロシア共和国 四、〇一七、三〇一 (白ロシア共和国人口の約八〇%)	主としてウクライナ及び白ロシア共和国に住む。 ウクライナ共和国—約四十七萬六千。	ソ聯邦内のポーランド人は著しく民族的獨自性を失
その他のスラヴ系諸族				
ポーランド人	七八二、三三四			

ブルガリヤ人	一〇一、二九六	白ロシア共和国——約九萬七千。 ロシア共和国——約十九萬八千。	ひ、ポーランド語を用ひるものは半數以下である(約三十六萬三千)。
チエク人及びスロヴァキヤ人	二七、〇〇〇	大多數はウクライナ共和国のステツパ地方の農村に住む(約九萬二千)。	ほとんど全部(約十萬三千)がブルガリヤ語を用ひてゐる。
バルト諸族	一四一、七〇三	主としてウクライナ共和国の諸地方—ポレーシエ、ドゥネプル右岸地方、及びクリミア、黒海地方に住む。	民族語を用ひないもの、數は、ラトヴィヤ人—約二萬六千、リトワニヤ人—約半(一萬九千)。
ラトヴィヤ(レット)人	四一、四六三	ソ聯邦の到る處に住んでゐるが、その主なる分布地域は、レニングラード・カレリヤ地方、中央工業地方。	九八%以上が民族語を用ひる。
リトワニヤ人	九、一八八	ソ聯邦内のイラン系民族中で最多數を占めてゐる。大部分はタヂクスタン(タヂク共和国)に集中し、その他は主としてウズベク共和国。	言語においてタヂク人と近縁の關係にある。(以下三つ同様)。
インド・イラン群	九七、八、六八〇	主中央アジア諸共和国、後カウカサス聯邦共和国、ダゲスタン自治共和国、北カウカサス地方の山地村落に住む。	大部分は民族語を失つて
タヂク人	四三、九七一	ブハラ及びサマルカンドの近傍(ウズベク共和国)に	
ベルシヤ人	二七、二、二七二	のみ居住する。	
イラン人	一、〇〇〇	トルクメン共和国のタフタ・バザル地方。	
	一五〇	トルクメン共和国のバイラム・アリ地方。	
	二七、二、二七二	主として北オセチヤ自治州(十二萬八千)及び南オセチヤ自治州(六萬)に住し、それぞれ當該州人口の八四%、六九%をなしてゐる。	約九八%は民族語を用ひてゐる。
	七、三三三	その他	
	二八、七〇五	グルジャ各地——五萬三千。	
	五四、六六一	北カウカサス地方——二萬五千。	
	一四、五二三	アゼルバイジャン共和国の舊レンコラン郡。	約九八%が民族語を用ひる。
	二五、〇〇〇	アゼルバイジャン共和国の舊バクラー郡、クバン郡などに住む。	約八七%が民族語を用ひる。
		アゼルバイジャン共和国の舊クルヂスタン郡に住み(約三萬七千)、郡人口の七三%を占めてゐる。	民族語を用ひるものは三・四%。
		その他、後カウカサスの他の地方及びトルクメン共和国にも若干住んでゐる。	
		クルド人に近い。アルメニヤ共和国に住んでゐる。	約九六%が民族語を用ひる。
		殆ど山地・バダフシャン自治州にのみ集中、州人口の約九〇%を占める。タヂク共和国々境地帯にも若干。	

チエムシツド人	約 一、〇〇〇		
ベルベール人	約 一五〇		
オセチン人	二七、二、二七二		
タルイシ人	七、三三三		
タート人	二八、七〇五		
クールド人	五四、六六一		
エジド人	一四、五二三		
沿バミール・イラン人	約 二五、〇〇〇		
シマール・ナシ人			
ワシグ・ナシ人			
ハバシ人			
ズグレンム人			

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

ヤグノフ人	約 二、〇〇〇	タチク共和国、ベンチケント地方にのみ住んでゐる。	
ベルーチ人	九、九七四	トルクメン共和国の南部、バイラム・アリ、ヨロタン、メルフ、サラハ地方に住む。	
ブハフイ人	約 三、〇〇〇	ベルーチ人と同じ地方に住し、文化的にはベルーチ人によつて同化されてゐる。	その民族語を保持し、ソ聯邦におけるドラ、ダ、イ、ダ語の唯一の代表者。
ジブ(ツィイガン)	六二、二三四	ソ聯邦の各地に散在。	インド系の民族語を保持するもの約四萬二千。
獨逸人	約 一、二三八、五四九 (ソ聯邦人口の〇・八四%)	沿ヴォルガ獨逸人自治共和国 三、七九六、三〇〇 (自治共和国人口の六六・四%)	中央アジアのジブシイはタチク語及びウズベク語のみを用ひる。
その他のインド・ヨーロッパ族	約 二七八、九〇五 (ソ聯邦人口の〇・一九%)	モルダヴィヤ自治共和国 一、七二二、四一九 (自治共和国人口の三〇・一四%)	約九五%は民族語を用ひてゐる。

希臘人	約 二二三、七六五 (ソ聯邦人口の〇・一四%)	主としてウクライナ共和国の沿黒海地方、(約九萬八千)及びロシア共和国(約五萬、内クリミア一萬六千)及びグルジャ(約五萬四千)。	民族語を保つもの約七三%。
アルバニヤ人	約 三、〇〇〇	主としてウクライナ共和国メトロポリシチナに住む	

アルメニヤ人	約 一、五六七、五六八 (ソ聯邦人口の〇・七%)	アルメニヤ共和国に半分居住してゐる。その他、山地カラバフ自治州——十一萬二千(九四%)、グルジャ共和国——三十萬七千(一一・五%)、アゼルバイジャン共和国——十七萬一千、北カウカサス地方——十六萬二千、中央アジア諸共和国——二萬九千(何れも概數)住んでゐる。	インド・ヨーロッパ族よりヤベテ族への「過渡的」民族をなす。 約九二%は民族語を用ひる。
南カウカサス・ヤベテ群	約 一、四九二、九〇七 (ソ聯邦人口の二%強)	殆ど全部(九八%)グルジャ共和国に住む。アツジヤル人、メグレレル人と共に同共和国人口の六七・〇六%を占める。	殆ど全部(約九五%)が民族語を用ひる。
グル(カルトヴェル)	約 一、四七四、五〇七	メグレレル、スワン、ラーズ等と共にグル、ジャ、ヤ人に屬するものとされてゐる。殆ど全部アツジヤル自治共和国	殆ど全部が民族語。
アツジヤル人	約 七〇、八二八		

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

六四

メグレレル人 (ミングレル)	自治共和国人口の五三・六七%	殆ど全部グルジャ共和国に集中する(内アブハズ自治共和国には約四萬二千—二〇%)。	同右
スワン人 (チャン人)	一四二、九九〇 (ソ聯邦人口の〇・一七%)	スワネチャに住む。	同右
北カウカサス・ヤベテ群	一三、二一八 六四三	アッジャル自治共和国。	同右
西部	五六、九五七	殆ど全部アブハズ自治共和国に住む。	約八四%が民族語を用ひる。
アブハズ人	アブハズ自治共和国 自治共和国人口の二七・八二%	大部分(約六萬四千)はアディゲイ自治州及びチェルケス自治州に住み、前者の人口の四九%、後者の三七%を占める。	種族的に細別すればベスケセク・アバズ、ウブイフ等々に分たれる。約九八%が民族語。
チエルケス人	七九、〇九五	大部分がカバルデン・バルカル自治州に住む。残りの中約一萬二千はチエルケス自治州(人口の三三%)。	殆ど全部民族語。
カバルルチン人	一三九、九二五 カバルルチン・バルカル自治州 (自治州人口の六〇%)	チエチエン自治州に殆ど全部集中してゐる。	殆ど全部民族語。
中央部	三二八、五三二 (ソ聯邦人口の〇・三三%)		
チエチエン人	チエチエン自治州		

イングーシ人	(自治州人口の二九・二五九%) 七四、〇九七	主としてイングーシ自治州に住む。	同右
バツビイ人 (ツォワ・トツシ)東部	約 二、〇〇〇	北カウカサス中部。	
アワル人	一五八、七六九 (ソ聯邦人口の〇・二%)	主としてダゲスタン自治共和国に住し、同自治州人口の一七・六一%(約十三萬九千)をなす。	同右
レスグ人	一三四、五二九	ダゲスタン自治共和国に約九萬(一一・五%)、アゼルバイジャン共和国に約三萬七千(一・六%)	同右
ダルギン人	一〇八、九六三	ダゲスタン自治共和国に殆ど全部集中し(二〇八、九二六)、自治州人口の一三・八二%	同右
ラーク人	四〇、三八〇	ダゲスタン自治共和国に殆ど全部集中し(三三九、八七八)	同右
タバサラン人	三一、九八三	ダゲスタン自治共和国に殆ど全部集中し、自治州人口の四・〇五%	約九三%が民族語を用ひる。
ツアフル人	約 一九、〇〇〇	ダゲスタン自治共和国の南部、及びアゼルバイジャン共和国の北部地方。	
カイタク人	約 一四、〇〇〇		
ルトウル人	約 一〇、〇〇〇		
其他二十一種族	百人乃至八千人程度。		詳細なる資料無し。

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

六五

民族	人口	分布地域	備考
猶太人	二、五九九、九七三 (ソ聯邦人口の〇・七七%)	約二百六十萬の猶太人はソ聯邦の到るところに住んでゐるが、主として都市。 人口では白、ロ、シヤ、共和國において第二位、(約四十萬一八・二%)を占め、ウ、ク、ラ、イ、ナ、共和國において第三位、(約百五十七萬—五・四%)を占め、その他の地方においても相當の率を占めてゐる。 ロ、シヤ、共和國には約五十六萬七千(その中モ、スク、ワ、及びレニングラードに約二十一萬六千)。	猶太語(イディッシュ)を母國語と認める者はその中約百八十八萬九千。(約七四%)。
クリミヤ猶太人	.....	クリムムチャクとも呼ばれる(約六千)。クリミヤ自治共和國。	クリミヤ・タタール語を用ひる。
グルジャ猶太人	.....	約二萬一千。グルジャ共和國に住む。	グルジャ語を用ひる。
中亞猶太人	.....	ブハーラ猶太人とも呼ばれる(約一萬八千)。ウズベク及タヂク共和國。	タヂク語を用ひる。
山地猶太人	.....	約二萬六千。ダゲスタン自治共和國及びアゼルバイジャン共和國に住む。	タート語を用ひる。
アラビヤ人	二八、九七八	主としてウズベク共和國に、一部はタヂク共和國に	ウズベク人によつてすつ

(西部—歐洲猶太人と風俗習慣及び言語の異なるもの)

アイソル人	九、八〇八	各地に散住。主にカウカサス諸國。モスクワ、レニングラードにも若干。	かり同化せられ、民族語を保つもの約六千のみ。 九〇%以上は民族語。
-------	-------	-----------------------------------	--------------------------------------

四、「トルコ族」

人口及び分布面積においてソ聯邦第二位を占め、言語學的徴表によつて五分されてゐる。

民族	人口	分布地域	備考
北西トルコ族	三、九六八、二八九 (ソ聯邦人口の二・七%)	北西トルコ族中最も多数を占め、ほとんど全部(九四%)カザーク共和國に住んでゐる。	殆ど全部民族語を用ひる。
カザーク人	三、七二三、三九四 (共和國人口の五七・一%)	その他は、ウズベク共和國の隣接地方に(約十萬七千)、シベリヤに(約四萬八千)、ヴォルガ中流及び下流地方に住み、主として農村。	
キルギーズ人 (或はタイルギズ)	七六二、七三六 (ソ聯邦人口の〇・五二%)	カラ・キルギーズとも呼ばれ、主としてキルギーズ共和國に住み、又、ウズベク共和國(約九萬)及びタヂク共和國(約一萬一千)の隣接地方にも住んでゐるその全部が農村人口をなしてゐる。	同右
カラ・カルバク人	一四六、三二七	八一%までがカラカラバク自治州に集中し、その他	約八七%は民族語を用ひ

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

タタール人	二、九二六、五三六 (ソ聯邦總人口の一・九九%)	一 概に「タタール人」と自稱してはゐるが、言語の異なるさまじくの諸族より成つてゐる。これを大別すれば (一)沿ヴォルガ(或ひはカザン)タタール、(二)クリミヤ・ステツプ地方タタール、(三)クリミヤ南岸タタール、(四)チユルイム・タタール、(五)チユルネウイ・タタール、(六)クンドロフスキイ・タタール(カラガシ)等々に分たれる。その各々の分布状態を番號順に述べれば (一)タタール自治共和國に約百十六萬、バシキール自治共和國に約四十六萬。その他は主としてヴォルガ、ウラル兩河の流域地方。尙ソ聯邦の到る處に(シベリヤ、中央アジア、北カウカサスにも)群住し、ソ聯邦、アジア領の都市人口中相當の比率を占めてゐる。 (二)クリミヤのステツプ地方及び北部山麓地帯(約十二萬五千)。 (三)クリミヤ南岸の都市及村落(約五萬四千)。 (四)西部シベリヤのトミ及びチユルイム河流域の原生林地帯(約三萬)
カラカルバク自治州	一、二一六、二二五 (自治州人口の三八・一三%)	るが、ウズベク共和國内のカラカルバク人二萬八千の内、民族語を保つものは一萬に止まる。 タタール語はタタール人以外にも普及し、ソ聯邦でタタール語を用ひるものゝ數は約三百五十七萬人。その中にはクリヤ、シエン人(洗禮を受けたタタールの意?)、ミシヤリ人の大部分、タリミヤ・カライム人、タリミヤ、駱太人、及びバシキール人の一部、シベリヤ、ブ、ハ、ラ人も入つてゐる。大部分は言語的に北西トルコ族である。 (三)南西トルコ語
バシキール自治共和國	四六一、八七一 (自治共和國人口の一七・三三%)	(五)南東トルコ語 (六)南西トルコ語
クリミヤ自治共和國	一七九、〇九四 (人口の二五・〇九%)	
カザーク共和國	八〇、六四二 (人口の一・二四%)	

ミシヤリ人	二四三、六四〇	(五)西部シベリヤ北アルタイ地方の森林地帯(約九千) (六)ヴォルガ下流地方左岸の沿カスピ海ステツプ(約六千)。 ロシア共和國全體にタタールは約二百八十五萬(二八・二%)を占める。 バシキール自治共和國に約十三萬六千(五・一%)。その他、モスクワ州南東部、ニジネゴロド地方、ヴォルガ中流地方及び下流地方、ウラル州、タタール自治共和國。 大多數はバシキール自治共和國に住み、他はウラル州及びヴォルガ中流地方に住んでゐる。
バシキール人	七三三、六九三 (ソ聯邦人口の〇・四九%) バシキール自治共和國(自治共和國人口の二五・四八%)	大多數はバシキール自治共和國に住み、他はウラル州及びヴォルガ中流地方に住んでゐる。
ナガイバク人	一一、二一九	ウラル州に住む。タタール人に數へられることがある。
オイロト人(オイラト)	五一、〇〇〇	アルタイ人、テレウト人、テレングト人、クマンチン人等より成る。オイロト自治州に住み、その數約四萬、州人口の四二%を占めてゐる。その他は近接地方。オイロト自治州に三五、六〇一(州人口の三五・七二%)
アイルタイ人	(四〇、六〇〇)	

クムイク人	九四、五四九	北カウカサスのダゲスタン自治共和国に住む(主として東部地方)。その數約八萬八千(ダゲスタン自治共和国人口の一・二%)	殆ど全部が民族語を用ひる。
ノガイ人	三六、二七四	ダゲスタン自治共和国の主として北部地方に住み、その數約二萬六千(ダゲスタン自治共和国人口の三・三%)	同右
カラチャイ人	五五、一二三	主としてカラチャイ自治州に住んでゐる。	同右
バルカル人	三三、三〇七	カバルデン・バルカル自治州のバルカル區人口の九八%を占める。	同右
カライム人	八、〇〇〇	半數はクリミヤ自治共和国に、その他はロシヤ共和国及びウクライナ共和国の各地に散住。	同右
南西トルコ族	一、七〇六、六〇五	南西トルコ族の中最も多數を占めてゐる。	同右
アイゼン・トルコ人	一、四三七、九七七	主としてアゼルバイジャン共和国に集中し、ナヒチエワン自治共和国人口の八四・五七%(八八、四三三人)をなしてゐる。その他、後カウカサス各地及びダゲスタンに住んでゐる。	同右
トウルクメン人	七六三、九四〇	大部分トウルクメン共和国に集中してゐる。その他	殆ど全部民族語を用ひ

オスマン・トルコ人 (アナトリア・トルコ)	トウルクメン共和国 (共和国人口の七・九%)	中央アジア諸共和国及びカザフク共和国に住み、一部分は北カウカサス地方及びヴォルガ下流地方にもある	ほとんど全部民族語を用ひてゐる。そのみかウズベク語は、その民族以外にも普及し、ソ聯邦においてウズベク語を「母國語」と認めるものゝ數は約四百六萬一千人に達してゐる。ウズベク共和国に住むカラカルバタ人、トウルクメン人アラビヤ人、ジブシイ人等の多數はウズベク語を用ひてゐる。
カラバフ人	約 八、五〇〇	後カウカサス。	
南東トルコ族	約 六、〇〇〇	後カウカサス。(但し、アルメニヤ共和国のレニナカ地方のみ)	
ウズベク人	三、九〇四、六三二	「小百科」に約三百九十三萬九千とあるのはキプチャク人を加へたものであらう。中央アジアのウズベク共和国に大部分(九〇%近く)住んでゐる。南東トルコ族中の最多數民族であり、隣接諸共和国にも相當住んでゐる。——即ちキルギズ共和国では約十一萬(一一%)、トウルクメン共和国では約十萬(一〇・五%)、タヂク共和国では十七萬五千(二二%)を占めてゐる。ウズベク人は土着民と半遊牧民とに分たれる。そして更に細かく「部族的」に再分される。キプチャク人はウズベク人と大體同一族であるが、その特性によつて一應後者から分離することができ。	
キプチャク人	三三、五〇二	ウズベク共和国。	
クラマク人	五〇、〇七九	ウズベク人にもカザフク人にも近い「民族」である。	同右



ウイグル人 タランチ人 カシュガル人	約 一〇九、〇〇〇 五三、〇一〇 五、五〇〇(?)	主としてタシケント地方に住んでゐる。 タランチ人、カシュガル人はその系統が略々同一であり、ウイグル人と總稱されてゐる。共に主としてカザーク共和国及びウズベク共和国に住んでゐる。タランチ人はその大部分(五一、八〇三)がカザーク共和国に在り、同國人口の〇・八%をなしてゐる。	タランチ人は殆ど全部民族語を用ひてゐる。
北東トルコ族 ヤクート人	二四〇、七〇九 (ソ聯邦人口の〇・一六%) ヤクート自治共和国 自治共和国人口の八一・六(一%)	ほとんど全部ヤクート自治共和国にあり、その少数がトゥルハン地方に住んでゐる。	ほとんど全部が民族語を用ひる。
ドルガン人 ハカツス人 アバカン・トルコ人 シヨール人	六五六 四五、六〇八 一一、六〇一	トゥルハン地方。ヤクート化されてゐる。 サガイ人、カチン人等々。ハカツス自治州人口の半分を占めてゐる。 西部シベリヤ地方ゴルノ・シヨール區人口の半分を占めてゐる。	九四%は民族語を用ひてゐる。
カラガス人	約 二、八〇〇	シベリヤ各地に散在。	

五、「チユワシ族」

チユワシ人	一、一一七、四一九	言語的、土俗的特性においてマリイ人、タタール人	殆ど全部が民族語を用ひ
-------	-----------	-------------------------	-------------

六、「蒙古族」

	(ソ聯邦人口の〇・七六%) チユワシ自治共和国 (自治共和国人口の七四・六五%)	と共通性多く、前者と混血してゐる。その半数以上はチユワシ自治共和国に住んでゐる。その他は主として沿ヴォルガ地方、一部はタタール自治共和国(約十二萬七千)、バシキール自治共和国(約八萬五千)、シベリヤには約四萬八千。	
--	--	---	--

ブリヤート人	二三七、五〇一 (ソ聯邦人口の〇・一六%) ブリヤート蒙古自治共和国 (自治共和国人口の四三・七六%)	ブリヤート人の中約九〇%はバイカル湖附近のブリヤート蒙古自治共和国に住み、他はその隣接地方にある。	殆ど全部民族語を用ひる
カルムイク人	一一九、三三二 カルムイク自治共和国 (自治共和国人口の七五・五九%)	約八〇%はカスピ海北東岸に面するカルムイク自治共和国、その他は隣接地方。	同右
サルト・カルムイク人	約 二、七〇〇	キルギズ共和国の舊カラコル郡に一種の特殊部落をなしてゐる。	

七、「ツングース・満洲族」

民族	人口	分布地域	備考
ツングース族	三七、五四六	東部シベリヤ、極東地方、ヤクート自治共和国等きはめて廣大な地域にわたつて分散してゐる。 オロチヨン、マネグル人等々に再分される。 主としてカムチャツカ。 ニコラエフスク地方。	民族語を保つもの六割強
ラムート人	二、〇〇〇		
ネギダール人	六八三		
滿洲族	六、〇〇〇	沿海洲、ハバロフスク地方及びニコラエフスク地方の一帶に住む。	
ゴリド人 (サモギール人共)	二、〇〇〇		
オロチ人 (ウデヘ人共)	七三三		
オロク人	一六二	ニコラエフスク地方及び樺太。	

八、「フィン・ウグリヤ、サモエード族」

民族	人口	分布地域	備考
バルト・フィン族	二四八、二二〇	カレリヤ自治共和国、モスタワ州の北西部、及びレ	殆ど全部民族語を用ひ

エストニヤ人	(ソ聯邦人口の〇・一七%) カレリヤ自治共和国 (自治共和国人口の三七・三七%)	大部分レニングラード州に住み、又カレリヤ自治共和国、シベリヤにもある。	一割強はロシア語を「母國語」と認めてゐる。
フィン人	約 一九、〇〇〇	主としてレニングラード州及びカレリヤ自治共和国。	ほとんど民族語を用ひる。
レニングラード・フィン人	約 一一五、〇〇〇		
イジヨル人	一六、一三七		
ヴェブス人	三三、七八五		
ヴォルガ・フィン族	一、三四〇、四一五	沿ヴォルガ地方に主として住み(約九十六萬二千)、モルドワ自治共和国に最も多く、バシキール自治共和国(約五萬)、タタール自治共和国(約三萬五千)、チュワシ自治共和国(約一萬三千)等にも住んでゐる。	九四%は民族語を用ひる。
モルドワ人	(ソ聯邦人口の〇・九一%)	シベリヤには約十一萬。	
マチェリミス人	四二八、一九二	半分以上はマリイ自治共和国に住み、他は主としてバシキール自治共和国(約八萬)及びウラル州に住んでゐる。	殆ど全部民族語を用ひる。
ベルミ・フィン族	マリイ自治共和国 (自治共和国人口の五一・四四%)		
ウオチヤク人 (ウドムルト人)	五〇四、一八七 (ソ聯邦人口の〇・三四%)	七八%は以前のウオチヤク自治州、現在のウドムルト自治共和国に住む。その他は主としてウラル州(三	同右

ベセルミヤン人 (ズイリヤン人)	ウドムルト自治共和国 (自治共和国人口の五二・三 七%)	ウオチヤーク人と大體同族で、同一地域に共住する。 大部分はコーミ自治共和国に住み、その他はシベリ ヤ及び歐露北部に住んでゐる。	ウオチヤーク語。 殆ど全部民族語を用ひ る。
北部フィン族 ロバリーリ人	一〇、〇三五 三三六、三八三 (ソ聯邦人口の〇・一五%)	主としてウラル州のコーミ・ベルミナク民族管區に 住み(約十一萬七千、管區人口の七七%)、その他はウ ラル州各地。	コーミ語方言。
ウグダリヤ族 オスチヤク人 ウオグール人	約 一、七〇〇 三三、三〇六 五、七五四 一五、四六二	西部シベリヤの北部地方。 歐露及びシベリヤ(主として西部)の北方ツンドラ 地帯に住む。ネネツ民族管區人口の四四%。	八三・五%は民族語 八八・九%は民族語 約八九%が民族語。
サモエード人 (ネネツ人) トウルハンスク・ サモエード人 ユラエード人 オスチヤク・サモ エード人	約 二、〇〇〇 二、〇〇〇		

九、「舊アジア諸族」

チユクチ人	約	極東地方の極北東端、及びヤクート自治共和国。 (極東のチユクチ民族管區に多く住んでゐる。)	殆ど全部民族語。
コリヤーク人	約	カムチャツカの北部。	同右
カムチャダール人	約	カムチャツカの中部及び南部。	著しく民族性を失つてゐる。
ユカギール人	約	ヤクート自治共和国。	著しく民族性を失つてゐる。
チュウワン人	約	カムチャツカ。	
エニセイ人	約	トゥルハンスタ地方。	
ギリヤーク人	約	アムール河下流及び樺太。	
エスキモー人	約	チユコット半島。	
アレウト人	約	コマンドル島。	

十、「極東文化民族」

朝鮮人	約	主として極東地方。	その中ソ聯國籍者八萬七千
支那人	約	同右	ソ聯國籍者一萬。
ドワンガン人	約	キルギズ共和国及びカザーク共和国	

(別表第一)

## ソ連邦民族及

民 族 別	總 人 口			全聯邦人口に 對する百分比
	男	女	合 計	
ロシア人	36,704,137	41,086,987	77,791,124	53.05
ウクライナ人	15,160,197	16,034,779	31,194,976	21.27
白ロシア人	2,335,854	2,403,069	4,738,923	3.23
猶太人	1,229,422	1,370,551	2,599,973	1.77
ポーランド人	375,551	406,783	782,334	0.53
ブルガリヤ人	56,866	54,430	111,296	—
レツト人	74,642	67,061	141,703	—
リトワニヤ人	22,722	18,741	41,463	—
フィンランド人	62,760	71,941	134,701	—
エストニヤ人	75,672	78,994	154,666	0.10
カレリヤ人	116,261	131,839	248,120	0.17
ヴエブス人	15,375	17,410	32,785	—
イジヨル人	7,430	8,707	16,137	—
モルダヴィヤ人	138,533	140,372	278,905	0.19
希臘人	104,854	108,911	213,765	0.14
クリミヤ人	6,622	8,085	14,707	—
ジブシ人	30,309	30,925	61,234	—
タタール人	1,413,027	1,503,509	2,916,536	1.99
(内クリミヤ人)	—	—	179,094	0.12
バシキール人	342,703	370,990	713,693	0.49
ミシヤリ人	113,403	129,237	242,640	0.16
クリヤシエン人	47,132	54,315	101,447	—
テプテヤリ人	12,707	14,680	27,387	—
チュワシ人	538,925	578,494	1,117,419	0.76

言語別人口表(共ノ1) (1926年國勢調査資料による)

言語申告において母國語と認めたる言語による人口の分類	他民族の言語		人口百人中 自己民族の言語 を用ひる者の數
	自己民族の言語	總 數	
77,586,179	153,677	—	99.7
27,171,539	3,945,303	3,926,585	87.1
3,404,934	1,327,660	1,307,092	71.9
1,870,102	720,116	700,649	71.9
335,663	444,193	162,155	42.9
102,878	8,222	5,908	92.4
110,938	30,427	28,201	78.3
19,461	21,866	17,549	46.9
129,104	5,587	5,001	95.8
136,688	17,758	16,467	88.4
236,971	11,130	10,875	95.5
31,025	1,760	1,757	94.6
14,184	1,952	1,937	87.9
257,382	21,088	8,947	92.3
155,414	57,763	28,974	72.7
7,755	6,936	6,598	52.7
39,285	21,365	13,161	64.2
2,884,222	29,316	21,292	98.9
384,082	328,656	474	53.8
197,073	45,398	38,425	81.2
100,492	944	696	99.1
636	26,713	15	2.3
1,102,952	13,682	12,069	98.7

(別表第一)

## ソ 聯 邦 民 族 及

民 族 別	總 人 口			全聯邦人口に 對する百分比
	男	女	合 計	
マ リ イ 人	201,725	226,467	428,192	0.29
ヴ オ チ ヤ ー ク 人	236,936	267,251	504,187	0.34
ズ イ リ ヤ ン 人	105,827	120,556	226,383	0.15
ベ ル ミ ヤ ク 人	70,428	79,060	149,488	0.10
ベ セ ル ミ ヤ ン 人	4,821	5,214	10,035	—
モ ル ド ワ 人	639,116	701,299	1,340,415	0.91
獨 逸 人	599,678	638,871	1,238,549	0.84
カ ル ム イ タ 人	66,650	62,671	129,321	—
ノ ガ イ 人	20,094	16,180	36,274	—
ナ ガ イ バ ク 人	5,055	6,164	11,219	—
ガ バ ル チ ン 人	71,061	68,864	139,925	—
バ ル カ ル 人	17,143	16,164	33,307	—
カ ラ チ ヤ ー エ フ 人	27,762	27,361	55,123	—
チ エ ル ケ ス 人	41,074	38,021	79,095	—
オ セ ッ ト 人	139,409	132,863	272,272	0.19
イ ン グ ウ シ 人	37,163	36,934	74,097	—
チ エ チ エ ン 人	163,394	155,128	318,522	0.22
ア ヲ ル 人	76,549	82,220	158,769	0.11
ラ ー ク 人	15,142	25,238	40,380	—
ク ム イ タ 人	48,440	46,109	94,549	—
ダ ル ギ ン 人	51,519	57,444	108,963	—
レ ズ グ 人	69,854	64,675	134,529	—
タ バ サ ラ ン 人	15,911	16,072	31,983	—
山 地 猶 太 人	12,583	13,391	25,974	—

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

言 語 別 人 口 表 (共ノ2) (1926年國勢調査資料による)

言語申告において母國語と認めたる言語による人口の分類			人 口 百 人 中 自己民族の言語 を用ひる者の數
自己民族の言語	他 民 族 の 言 語		
	總 數	そ の 中 露 語	
425,340	1,762	1,685	99.3
498,870	4,975	3,971	98.9
218,459	7,755	7,696	96.5
140,322	9,098	9,039	93.9
9,962	72	38	99.3
1,260,388	79,276	77,138	94.0
1,175,061	61,517	54,150	94.9
128,380	896	787	99.3
35,268	998	92	97.2
10,684	535	30	95.2
138,925	926	149	99.3
33,184	122	4	99.6
54,851	179	27	99.5
77,252	1,771	710	97.7
266,437	5,691	1,982	97.9
73,751	272	142	99.5
317,715	365	182	99.7
157,593	318	37	99.3
40,141	230	10	99.4
93,825	711	50	99.2
107,133	1,697	10	98.3
131,049	3,358	446	97.4
29,711	2,272	—	92.9
25,185	734	203	97.0

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

(別表第一)

## ソ 聯 邦 民 族 及

民 族 別	人 口			全聯邦人口に 對する百分比
	男	女	合 計	
グ ル ジ ヤ 人	916,107	905,077	1,821,184	1.24
ア チ ヤ リ ヤ 人	37,331	34,095	71,426	—
メ グ レ ル 人	120,907	122,083	242,990	0.17
ラ ズ 人	347	296	643	—
ス ワ ン 人	6,331	6,887	13,218	—
ア ル メ ニ ヤ 人	797,967	769,601	1,567,568	1.07
ト ル コ 人	899,138	807,467	1,706,605	1.16
ア ブ ハ ジ ヤ 人	29,180	27,777	56,957	—
グ ル ジ ヤ 猶 太 人	10,794	10,677	21,471	—
ア イ ソ ル 人	5,139	4,669	9,808	—
ク ル ド 人	28,395	25,266	54,661	—
イ エ ジ ド 人	7,351	7,175	14,526	—
タ ル イ シ 人	39,960	37,363	77,323	—
タ ー ト 人	15,046	13,659	28,705	—
波 斯 人	25,715	18,256	43,971	—
カ ザ ー ク 人	2,090,529	1,877,760	3,968,289	2.71
キ ル ギ ズ 人	399,815	362,921	762,736	0.52
カラカルバク人	76,323	69,994	146,317	—
ウ ズ ベ ク 人	2,069,541	1,835,081	3,904,622	2.66
タ デ ク 人	516,929	461,751	978,680	0.67
トウルクメン人	401,116	362,824	763,940	0.52
中 亞 猶 太 人	9,364	9,334	18,698	—
ア ラ ビ ヤ 人	15,367	13,611	28,978	—
キ プ チ ヤ ク 人	17,644	15,858	33,502	—

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

## 言 語 別 人 口 表 (共ノ3) (1926年國勢調査資料による)

自己民族の言語	他 民 族 の 言 語		人 口 百 人 中 自己民族の言語 を用ひる者の數
	總 數	その 中、露 語	
1,757,840	62,945	7,452	96.5
70,504	915	13	98.7
242,484	481	205	99.8
375	268	1	58.3
13,154	61	1	99.5
1,449,120	117,127	36,531	92.4
1,601,643	96,921	1,047	93.8
47,812	9,128	111	83.9
21,379	81	52	99.6
8,935	827	405	91.1
18,810	35,677	37	34.4
14,006	507	36	96.4
75,583	333	—	97.7
24,863	3,777	12	86.6
29,797	13,814	1,109	67.8
3,951,316	16,015	2,753	99.6
755,070	2,352	141	99.0
128,098	17,824	18	87.5
3,869,741	29,922	196	99.1
961,889	14,773	18	98.3
743,640	20,118	72	97.3
17,539	1,137	70	93.8
4,610	24,300	18	15.9
33,406	69	1	99.7

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

(別表第一)

## ソ 聯 邦 民 族 及

民 族 別	總 人 口			全聯邦人口に 對する百分比
	男	女	合 計	
タ ラ ン チ 人	28,191	24,819	53,010	
ク ラ ム 人	27,067	23,012	50,079	
ウ イ グ ル 人	23,092	19,458	42,550	
ド ウ ン ガ ン 人	7,735	6,865	14,600	
イ ラ ン 人	4,804	4,384	9,188	
ベ ル チ 人	5,393	4,581	9,974	
ア ル タ イ 人	19,925	20,675	40,600	
シ ョ ー ル 人	6,561	6,040	12,601	
ハ カ ツ ス 人	23,363	22,245	45,608	
ブ リ ヤ ー ト 人	119,853	117,648	237,501	0.16
ヤ ク ー ト 人	125,244	115,465	240,709	0.16
ウ オ グ ー ル 人	2,945	2,809	5,754	
オ ス チ ヤ ク 人	11,808	10,498	22,306	
サ モ エ ド 人	7,997	7,465	15,462	
ツ ン グ ー ス 人	19,577	17,969	37,546	
チ ュ ク チ 人	6,144	6,188	12,332	
コ リ ヤ タ 人	3,815	3,624	7,439	
カ ム チ ヤ ツ カ 人	2,161	2,056	4,217	
支 那 人	9,479	768	10,247	
朝 鮮 人	47,945	39,054	86,999	
其 他	47,085	47,328	94,413	
總 計	70,781,593	75,855,937	146,637,530	100

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

八五

言 語 別 人 口 表 (共 4) (1926年 國 勢 調 査 資 料 に よ る)

言語申告において母國語と認めたる言語による人口の分類			人 口 百 人 中 自 己 民 族 の 言 語 を 用 ひ る 者 の 數
自 己 民 族 の 言 語	他 民 族 の 言 語		
	總 數	そ の 中、露 語	
52,731	267	7	99.5
8,216	41,826	—	16.4
22,407	20,067	3	52.7
14,486	113	15	99.2
1,499	7,688	3	16.3
9,965	9	—	99.9
31,604	8,869	8,677	77.8
11,814	631	621	93.8
40,979	4,337	4,301	89.9
233,094	4,036	3,238	98.1
240,098	421	333	99.7
5,115	639	634	88.9
18,617	3,680	3,229	83.5
13,738	1,718	258	88.9
23,961	13,528	5,077	63.8
12,248	81	70	99.3
7,091	347	309	95.3
860	3,257	3,347	20.4
8,826	1,347	1,210	86.1
86,072	812	764	98.9
966	34,754	17,856	1.0
138,292,139	8,102,753	6,593,248	94.3

第二章 ソ 聯 邦 全 土 に わ た る 諸 民 族 分 布 状 態 の 概 観

八四

## 第三節 グランデ教授の「民族表」について

「緒言」で一才説明しておいたグランデ教授の「ソ聯邦民族表」をこゝに掲げることにした(別表第二参照)。このついでにこの「民族表」の特徴及び意義について簡単に述べることにしよう。

(一) この章の第一節において、我々はロシアソ聯邦の諸民族を、あるひは人種學的に、體質の方面から、あるひは言語學的に、言語系統の方面から分類するさまざまの説を紹介した。一般的に見て、種族乃至民族を分類するもつとも基本的な標準となるものが、人種學的に把握された體質的特徴であることはいふまでもなからう。體質に次いで、ある場合にはそれ以上に重要なのが言語である。蓋し「言語はその種族を他の種族からわかた一つの徴表であり、それは疑ひもなく他の文化現象に比して強固に持続された」からである。しかしながら「體質的特徴によつて分類される人種乃至民族と、言語の祖源的系統によつて區別される語族乃至言語が必ずしも一致するとはいへない。」<sup>(註)</sup>ロシアの如く歴史的に諸種族間の混血、同化の甚しい國においては、體質的特徴によつて雑多な民族を分類することには少なからぬ錯綜、困難が伴ふことは前述の通りであり、むしろ言語の異同によつて區分する方が簡單でもあり、實際的意義をもつやうにも思はれる。いふまでもなく、言語の共通性は民族を民族たらしめるもつとも根本的な要素の一つであり、色々な點から考へて、言語を基準とするグランデ教授の分類方法及びその「民族表」に對しては大きい妥當性を認めるべきであらう。

(註) 赤松氏「東洋古代史講話」八九頁、九四頁

(二) グランデ教授の「民族表」には大別一〇二の諸民族の名が挙げられてゐる。その中には、嚴密な意味において「民族」と稱し得ないほどの文化的、經濟的に遅れた種族も含まれてゐる。そして若干の民族に對しては更に細かい再別がなされ

てゐる。思ふに一九二六年國勢調査の結果にもとづき中央統計局によつて作成された「民族一覽」は亂雑であり、無系統であつた。これを系統づけ「整理」したグランデ教授の努力は大いに多とすべきであらう。

(三) 「民族表」には一九二六年の國勢調査による各民族の人口が「民族關係」と「言語關係」と別々に示されてゐる。この點、本章第二節に掲げた別表第一と大同小異である。

「民族關係」と「言語關係」との人口をそれ／＼比較對照することによつて、各民族の言語的同化の程度を推知することができる。

(四) 「民族表」の「文字」の欄には各民族のアルファベットが示されてゐる。一々調べてみれば分るやうに、ソ聯邦の諸民族のうち、ロシア・アルファベットを用ひるものは、ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人等のスラヴ系民族及びジブシイ人、モルドワ人、コマリイ人、コーミ人、ウドムルト人、チュワシ人等の古くからロシア文化に著しく同化された民族のみで、その他の諸民族は主として革命後の民族語政策によつてラテン・アルファベット(ローマ字)を採用したものが多く、或ひは又アラビア文字を用ひてゐる。ソ聯邦における民族文化の複雑性は、この欄を一瞥するのみでも容易に理解することができると思ふ。

(五) 古い時代から現在のソ聯邦領土内に住んでゐる諸民族以外に、外國から入國して、ソ聯邦に常住してゐるもの(英人、佛人等々)が別個に一括されてゐる。

(六) 本書においては、資料の關係でグランデ教授の分類及び「民族表」を充分利用することはできなかつたが、一九三九年國勢調査資料による民族別人口構成表などの作成に當つては、さしあたりこの「民族表」が一つの基準として利用されることになるであらう。その意味で、別掲の「民族表」は、今後公表されるであらう新しい民族關係の資料と對比せしめるために、我々によつても大いに利用されなければならぬ。



[別表第二]

ソ 聯 邦

民族の名稱	言語	人口(註)	
		民族關係	言語關係
1. ロシヤ人	ロシヤ語	約 78,000,000 (ロシヤ共和國 74,000,000)	84,000,000 以上
2. ウクライナ人	ウクライナ語	約 31,200,000 (ウクライナ共和國 23,200,000)	27,560,000
3. 白ロシヤ人	白ロシヤ語	約 4,739,000 (白ロシヤ共和國 4,017,000)	3,367,000
4. ポーランド人	ポーランド語	782,000	362,000
5. チェク(及スロヴァキヤ)人	チェク及スロヴァキヤ語	27,123	25,079
6. ブルガリヤ人	ブルガリヤ語	111,296	106,000
7. ラトヴィヤ(レツト人)	レツト語	141,559	115,905
8. ラツトガル人	ラツトガル語	9,707	8,070
9. リトワニヤ人	リトワニヤ語	41,463	21,800
10. イラン(ベルシヤ)人	ベルシヤ語	53,081	76,236
10. a ハザラ人	ベルシヤ語	(1930年) 678戸	—
10. b ジェムシツド人	ベルシヤ語	(1930年) 1,400	—
10. c ベルベール人	ベルシヤ語	(1928年) 180戸	—
11. タヂク人	タヂク語	979,000 (タヂク共和國 617,000)	1,008,576
11. a ヤグノブ人	ヤグノブ語	(1930年) 約 1,800	—
12. ベルージ人	ベルージ語	約 10,000	—
13. クールド人	クールド語	69,000	34,000
14. タルイシ人	タルイシ語	77,323	80,644
15. アフガン人	アフガン語	1,635	4,570
16. タート人	タート語	28,705	約 50,000
17. シュグナン・ルシヤン人	シュグナン語四方言	(1931年) 約 23,000	—
17. a ワハン人	ワハン語	(1931年) 約 4,500	—
17. b ヤズグリヤム人	ヤズグリヤム語	(1932年) 約 2,000	—
17. c イシカシム人	イシカシム語	(1932年) 約 500	—
18. オセチン(オス)人	オセチン語	272,231 (北オセチヤ自治州 128,000) (南オセチヤ自治州 64,400)	267,000
19. 獨逸人	獨逸語	1,238,000 (沿ヴォルガ獨逸人自治共和國 379,600)	1,120,000

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民 族 表 (グランデ教授編)

(其ノ1)

細 別	文 字	摘 要
—	ロシヤ語(ロシヤ字母)	—
—	ウクライナ語(ロシヤ字母)	—
—	白ロシヤ語(ロシヤ字母)	—
—	ポーランド語(ラテン字母)	波蘭國の主要民族
—	チェク語(ラテン字母)	チエコ・スロヴァキヤ國の主要民族
—	ブルガリヤ語(スラヴ字母)	ブルガリヤ國の主要民族
—	レツト語(ラテン字母)	ラトヴィヤ國の主要民族
—	ラツトガル語(ラテン字母)	—
—	リトワニヤ語	リトワニヤ國の主要民族
—	ベルシヤ語(アラビヤ字母) ソ聯邦ではラテン字母	イラン(ベルシヤ)國の主要民族 大部分はアフガニスタンに住む
—	—	大部分はアフガニスタン北西部に住む
—	—	大部分はアフガニスタン北部に住む
—	タヂク語(ラテン字母)	—
—	—	—
—	ソ聯邦ではベルージ語(ラテン字母)	大部分はベルジスタンに住む
イェジド人 14,500	クールド語(ラテン字母)	—
—	タルイシ語(ラテン字母)	—
—	アフガン語(アラビヤ字母)	アフガニスタン國の主要民族
—	タート語(ラテン字母)	—
シュグナン人、ルシヤン人、バルタンダ人、オロシヨル人	シュグナン語(ラテン字母)	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	—	—
イロン人、チゴール人	オセチン語(二方言)(ラテン字母)	—
—	獨逸語(ラテン字母及獨逸字母)	獨逸國の主要民族

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名稱	言語	人口(註)	
		民族關係	言語關係
20. モルダヴィヤ人	モルダヴィヤ語	約 280,000 (モルダヴィヤ自治共 和國 172,400)	約 264,000
21. アルバニヤ人	アルバニヤ語	3,000 以上	3,000 以上
22. 希臘人	希臘語	213,700	202,500
23. ジブシイ人	ジブシイ語(一部は ロシア語、ウクライ ナ語、ウズベク語)	61,300	42,000
24. アルメニヤ人	アルメニヤ語	1,568,000 (アルメニヤ共和國 743,570)	1,475,000
25. グルジャヤ人	グルジャヤ語	1,749,741 (グルジャヤ共和國 1,716,157)	1,610,474
(その中)			
25. a メグレル人	メグレル語	242,996	284,746
25. b スワソ人	スワソ語	13,219	13,140
25. c ラーズ人	ラーズ語	645	734
26. アツジャール人	グルジャヤ語	71,428	—
27. アブハズ人	アブハズ語	56,957 (アブハズ自治共和國 55,918)	48,131
28. アバジン人	アバジン語	13,825	—
29. アドイゲイ人 (チエルケス人)	アドイゲイ語	62,250 (アドイゲイ自治州 50,826)	—
30. カバルチン人	カバルチン語	139,920 (カバルチン・バルカ ル自治州 122,400)	—
31. チェチエン・イング ーシ人	チェチエン・イング ーシ語(チェチエン 及イングーシ方言)	392,615 (チェチエン・イング ーシ自治州 363,761)	393,708
32. バツビイ人	バツビイ語	7	2,564
33. ダルギン人	ダルギン語	(1933年) 125,530	—
34. ラーク人	ラーク語	54,090	40,336
35. アワル人	アワル語	(1933年) 163,020	159,000
36. アンヂイ人	アンヂイ語	(同上) 8,986	—
36. a ボトリフ人	ボトリフ語	(同上) 1,684	—

九一

民 族 表 (グランデ教授編)

(共ノ2)

細 別	文 字	摘 要
—	モルダヴィヤ語(ラテン字母)	約1,700,000ベッサラビヤ に居住
—	アルバニヤ語(ラテン字母)	アルバニヤ國の主要民族
—	希臘語(希臘字母)	希臘國の主要民族
中央アジア・ジブシイ人(500人)	ジブシイ語(ロジャ字母)	—
ヘムシン人 (629人)	アルメニヤ語(アルメニヤ字 母)	—
カルトウエル人、カーフ人、トウ ーシ人、ブシヤウ人、ヘウス ル人、グリイ人、メール人	グルジャヤ語(グルジャヤ字母)	—
—	グルジャヤ語、一部はメグレ ー語(グルジャヤ字母)	—
—	グルジャヤ語(グルジャヤ字母)	—
—	ラーズ語(ラテン字母)	大部分はトルコに住む
—	グルジャヤ語	—
—	アブハズ語(ラテン字母)	—
—	アバジン語(ラテン字母)	—
アドイゲイ人、アバゼフ人、ブジ エドウフ人、ベスレネーフ人、シ ヤブスーグ人、等々	アドイゲイ語(ラテン字母)	—
—	カバルチン語(ラテン字母)	—
チェチエン人 31,852人 イングーシ人 74,024人	チェチエン・イングーシ語 (ラテン字母)・兩方言に分る	—
—	—	—
クバチン人 (1,954人)	ダルギン語(ラテン字母)	—
—	ラーク語(ラテン字母)	—
—	アワル語(ラテン字母)	—
—	—	—
—	—	—

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

九〇

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名称	言語	人口(註)	
		民族関係	言語関係
36. b ゴドベリン人	ゴドベリン語	(1933年)	1,689
36. c カラタイ人	カラタイ語	(同上)	6,235
36. d アフバフ人	アフバフ語	(同上)	4,610
36. e バグラル人	バグラル語	(同上)	3,637
36. f チヤマラル人	チヤマラル語	(同上)	5,101
36. g テインヂイ人	テインヂイ語	(同上)	4,777
37. デイドイ人 (ツエズ人)	デイドイ語(ツエズ語)	(同上)	7,197
37. a フワルシン人	フワルシン語	(同上)	1,614
37. b カプチュイン人	カプチュイン語	(同上)	2,580
37. e フンザール人	フンザール語		616
38. レズギン人	レズギン語		134,536
38. a アルチン人	アルチン語	(1933年)	1,930
38. b ヒナルグ人	ヒナルグ語		105
38. c ハブーツ人(ハブートル人)	ハブートルン語	(1933年) 約	3,000
38. d ブドウフ人	ブドウフ語		1
39. アグール人	アグール語	(1933年)	9,301
40. ルトウール人	ルトウール語	(同上)	12,969
41. ツアフル人	ツアフル語		19,085
42. ウデイン人	ウデイン語	(1933年)	8,849
43. タバサラン人	タバサラン語		31,915
44. カイターク人	カイターク語		14,430
45. 西部猶太人	猶太語(イディシ語) 一部はロシア語		2,601,000
46. 東部猶太人			
(a) クリミヤ・猶太人(クルイムチヤク)	クリミヤ・タタル語		6,383
(b) グルジャ猶太人	グルジャ語		21,263
(c) 山地猶太人(猶太タート人)	タート語		25,866
(d) 中亞猶太人	ユダヤ・タヂク語		18,700

九三

民 族 表 (グランデ教授編)

(其ノ3)

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

細 別	文 字	摘 要
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	レズギン語(ラテン字母)	—
	—	—
ジェーク人(クルイズ人)	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	ツアフル語(ラテン字母)	—
	—	—
	ウデイン語(ラテン字母)	—
	—	—
	タバサラン語(ラテン字母)	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	—	—
	猶太語(ユダヤ字母)	—
	—	—
	—	—
	—	—
	クリミヤ・タタル語(ラテン字母)	—
	—	—
	—	—
	—	—
	グルジャ語(グルジャ字母)	—
	—	—
	タート語(ラテン字母)	—
	—	—
	ユダヤ・タヂク語(ラテン字母)	—

九二

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名稱	言語	人口(註)	
		民族關係	言語關係
47. アツシリヤ人 (「アイソル人」)	アツシリヤ語(新シ リヤ語)	9,808	15,510
48. アラビヤ人	アラビヤ語、ウズベ ク語、タヂク語	28,963	5,737
49. カレリヤ人	カレリヤ語	248,120 (カレリヤ自治共和國 100,781)	239,600
50. イジヨール人	イジヨール語	16,000	—
51. ウエプス人	ウエプス語	32,785	31,123
52. エヴレメイセト人及 サワヨツト人(レニ ングラード・フィン 人)	スオミ語	115,334	—
53. ウオード人	ウオード語	705	—
54. フイン人	フィン語(スオミ語)	19,463	—
55. エストニヤ人	エストニヤ語	154,650	139,500
56. サアミ人(ロバーリ 人)	サアミ語	(1933年) 1,806	—
57. モルドワ人(エルジ ヤ及モクシヤ人)	モルドワ語 (エルジヤ語 モクシヤ語)	1,340,394 (モルドワ自治共和國 500,000)	1,267,000
58. マリイ人	マリイ語(牧草地及 び山地方言に分る)	428,200 (マリイ自治州 248,000)	425,700
59. コーミ・ズイリヤ 人	コーミ語(ズイリヤ ン方言)	221,300 (コーミ自治州 191,250) 232,000	214,750
60. コーミ・ベルミヤ ク人	コーミ語(ベルミヤ ク方言)	149,500	143,780
61. ウドムルト人	ウドムルト語	514,200 (ウドムルト自治共和 國 395,600)	508,760
62. ハント人(オスチ ヤク人)	ハント語(オスチヤ ク語)	22,306	約 19,000
63. マンス人(ウオグ ール人)	マンス語(ウオグ ール語)	5,754	約 5,200
64. ネンツ人(サモエ ード人)	ネンツ語	17,560	14,800

九五

民 族 表 (グラレデ教授編)

(其ノ4)

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

細 別	文 字	摘 要
—	アツシリヤ語(ラテン字母)	—
—	ウズベク語、タヂク語	アラビヤ諸國においては アラビヤ字母を使用
トウエルスキイ、ケムスキイ、ウ フティンスキイ	カレリヤ語(トウエルスキイ カレリヤ人はラテン字母、カ レリヤ共和國ではフィン語)	—
—	イジヨール語(ラテン字母)	—
—	ウエプス語(ラテン字母)	—
—	フィン語	—
—	フィン語(ラテン字母)	フィンランド國の主要民 族
—	エストニヤ語(ラテン字母)	エストニヤ國の主要民族
—	サアミ語(ラテン字母)	大部分はフィンランド及 び瑞典に住む
エルジヤ人、モクシヤ人	モルドワ・エルジヤ語及び モクシヤ語(ロシア字母)	—
牧草地マリイ人、山地マリイ人	マリイ語(牧草地及び山地方 言) ロシヤ字母	—
—	コーミ語(ロシア字母)	—
—	コーミ語(ラテン字母)	—
ベセルミヤン人 (10,000人)	ウドムルト語(ロシア字母)	—
—	ハント語(ラテン字母)	—
—	マンス語(ラテン字母)	—
サモエード・ユラーク人、エンツ 人(エニセイ、サモエード人)、イ ガナサン人(タウギイ人) 森林サ モエード人	ネンツ語(ラテン字母)	—

九四

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名稱	言語	人口(註)	
		民族關係	言語關係
65. セリクープ人(オスチヤク・サモエド人)	セリクープ語	1,630	—
66. チュワシ人	チュワシ語	1,117,400 (チュワシ自治共和國667,700)	1,104,440
67. バシキール人	バシキール語	713,693 (バシキール自治共和國637,476)	393,214
68. タタール人	タタール語	約 3,200,000 (タタール自治共和國1,164,340)	3,550,000
69. クリミヤ・タタール人	クリミヤ・タタール語	179,094	186,000
70. カライム人	クリミヤ・タタール語、一部はロシア語	8,324	—
71. ノガイ人	ノガイ語	36,274	23,126
72. クムイク人	クムイク語	95,542	95,910
73. カラチャイ・バルカル人	カラチャイ・バルカル語	88,431	88,630
74. オイロート人	オイロート語	44,510 (1931年) 54,744 (オイロート自治州40,500)	36,825
74. a クマンチン人	クマンチン語	6,335	2,906

民 族 表 (グランデ教授編)

(共ノ5)

細 別	文 字	摘 要
—	セリクープ語(ラテン字母)	—
—	チュワシ語(ロシア字母)	—
—	バシキール語(ラテン字母)	—
ミシヤール人…………… 242,640	タタール語(ラテン字母)	—
オレンブルグ地方 メシチエリヤク人…………… 16,238 (1917年)		
クリヤシエン人…………… 101,450		
テプテヤリ人…………… 27,414		
シベリヤ・ブハラ人…………… 12,000		
ナガイバク人…………… 11,220		
ヌクラト・タタール人…………… 14,318		
トボリスク・タタール人 約10,000		
その他バラビン人トムスク・クズ ネツク・タタール人等		
南岸タタール及びステップ地方タ タール	クリミヤ・タタール語(ラテン 字母)	—
—	クリミヤ・タタール語	—
—	ノガイ語(ラテン字母)	—
—	クムイク語(ラテン字母)	—
カラチャイ人…………… 55,124	カラチャイ・バルカル語(ラ テン字母)	—
(中、カラチャイ自治州 52,500)		
バルカル人…………… 33,307		
(中、カバルヂンバルカル自治州… …………… 33,200)		
アルタイ人…………… 37,647	オイロート語(ラテン字母)	—
テレウート人…………… 1,898		
テレンゲート人…………… 3,415		
その他トウバラール人(チエルネ ヴオイ・タタール人)シヤルガン人	—	—
—	クマンチン語(ラテン字母)	—

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名称	言語	人口(註)	
		民族関係	言語関係
75. ハカース人	ハカース語	45,870 (ハカース自治州 44,200)	—
76. ショール人	ショール語	12,601	11,814
77. トウワ人	トウワ語、一部は ロシア語	約 3,000	—
78. カザーク人	カザーク語	3,960,000 (カザーク自治共和国 3,700,000以上)	3,959,095
79. キルギーズ人	キルギーズ語	768,763 (キルギーズ自治共和 國 661,170)	763,763
80. カラカルバク人	カラカルバク語	146,327	130,139
81. ガガウス人	ガガウス語	848	833
82. ウズベク人	ウズベク語	3,988,740 (ウズベク共和国 3,382,713)	4,069,500
83. ウイグル人	ウイグル語 カシュガル及クリジ ヤ(タランチン)の 二方言	108,675	66,683
84. アゼルバイジャン トルコ人	トルコ語(アゼルバ イジャン語)	1,713,000 (アゼルバイジャン共 和國 1,438,000)	1,752,200
85. トルコ人	トルコ語	8,563	18,520
86. トウルクメン人	トウルクメン語	676,068 (トウルクメン共和 國 631,920)	657,716
87. ヤクート人	ヤクート語	240,862	—
87. アドルガン人	ヤクート語	699	—
88. ブリヤート蒙古人	ブリヤート蒙古語	297,500 (ブリヤート蒙古自治 共和国 215,000)	235,713

九九

民 族 表 (グランデ教授編)

(其ノ6)

細 別	文 字	摘 要
サガイ人、コムバル人、ベリチル 人、カチン人、クイズイル人、チ ユルイム人	ハカース語(ラテン字母)	—
—	ショール語(ラテン字母)	—
カラガス人(トフアラール人)432 人(1933年)	トウワ語(ラテン字母)	トウワ人民共和国の主要 民族
—	カザーク語(ラテン字母)	—
—	キルギーズ語(ラテン字母)	—
—	カラカルバク語(ラテン字 母)	—
—	—	カザーク自治共和国
クラミン人……………50,218 (言語関係では 8,353)	ウズベク語(ラテン字母)	—
キプチャク人……………33,502	—	—
フェルガン及サマルカンド・トル コ人……………537	—	—
その他ロカイ人スフラト・トウル クメン人	—	—
カシュガル人……………13,010	ウイグル(ラテン字母)	—
タランチ人(クリジヤ・ウイグ ール人)……………53,010	—	—
カラカルバフ人(6,317)	トルコ語(ラテン字母)	—
—	トルコ語(ラテン字母)	—
テキン人、ヨムード人、ゴクラン 人等	トウルクメン語(ラテン字 母)	—
—	ヤクート語(ラテン字母)	—
—	—	—
ウンドラ農民(ロシア人移民子孫 のヤクート化せるもの)	ヤクート語	—
—	ブリヤート蒙古語(ラテン字 母)	—

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

九八

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名稱	言語	人口(註)		
		民族關係	言語關係	
89. カルムイク人	カルムイク語	(1931年) (カルムイク自治共和 國)	133,530 146,000 107,000	128,600
90. エウエンク人 (ツングース人)	エウエンク語、一部 はヤクート語	約	40,000	—
91. エウエン人 (ラムート人)	エウエン語	(1932年) 約	12,000	—
92. ナナイ人(ゴリド 人)	ナナイ語	(1928年)	5,754	—
93. ウデ人	ウデ語		2,004	—
94. チュクチ人(ルオラ ウエトラン人)	チュクチ語(ルオラ ウエトラン語)		12,332	—
95. コリヤーク人(ヌイ ムイラン人)	コリヤーク語(ヌイ ムイラン語)	(1933年)	7,856	—
96. イテリメン人(カム チャダル人)	イテリメン語(カム チャダル語)及びロ シヤ語		4,217	約 900
97. ユカギール人(オド ウル人)	ユカギール語 ヤクート語		443	約 350
97. a チュワン人(エテ リ人)	ロシヤ語 チュクチ語		705	—
98. エスキモー人(ユイ ト人)	エスキモー語(ユイ ト語)	(1929年)	1,222	—
99. アレウト人	アレウト語		353	—
100. 支那人	支那語	(1934年)	92,000	—
101. ドウンガン人	支那語		14,600	—
102. 朝鮮人	朝鮮語	約	87,000	170,000 以上

一〇一

民 族 表 (グランデ教授編)

(其ノ7)

細 別	文 字	摘 要
サルト・カルムイク人 約 3,200 (キルギーズ在住)	カルムイク語(ラテン字母)	—
ネギダール人 (683)、マネーグル 人 (59)	エウエンク語(ラテン字母)	—
—	エウエン語(ラテン字母)	—
サマギール人、ウリチ人(756)オロ ーク人(154)—1928年	ナナイ語(ラテン字母)	—
オロチ人(647)	ウデ語(ラテン字母)	—
養鹿チュクチ人(8,820)、沿海チュ クチ人(3,512)	チュクチ語(ラテン字母)	—
養鹿コリヤーク及び定住コリヤ ーク人	コリヤーク語(ラテン字母)	—
—	—	大部分はロシヤ化して る
—	—	—
—	—	—
—	エスキモー語(ラテン字母)	大部分はアラスカ及びグ リーンランドに住む
—	—	大部分はアリューシヤン 諸島に住む
—	支那語(ラテン字母) 本國では漢字	中華民國の主要民族
—	ドウンガン語(ラテン字母)	大部分は支那西域に住む
—	朝鮮語(朝鮮字母)	朝鮮の主要民族

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

一〇〇

ソ 聯 邦

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

民族の名稱	言 語	人 口 (註)	
		民 族 關 係	言語關係
(外國よりの轉住者にし)			
1. セルビヤ人	セルビヤ語	2,661	1,309
2. 瑞 典 人	瑞 典 語	2,488	1,874
3. ルーマニヤ人	ルーマニヤ語	4,636	4,023
4. フランス人	フランス語	2,461	2,402
5. インド人	ヒンドスタニ語	61	78
6. イギリス人	英 語	732	1,178
7. 日 本 人	日 本 語 (1929年)	1,966	1,091
8. マヂヤル人	マヂヤル語	3,469	6,251
9. イタリア人	イタリア語	2,328	1,582
10. ノールウェー人	ノールウェー語 (1933年—150)	259	—

(註) 人口は1926年國勢調査資料による。但し、最近の資料によるものは括弧内にその年々自治共和國又は自治州の人口をも示した

民 族 表 (グランデ教授編)

(共ノ8)

第二章 ソ聯邦全土にわたる諸民族分布状態の概観

細 別	文 字	摘 要
てソ聯邦に常住するもの)		
—	セルビヤ語	—
—	瑞 典 語	—
—	ルーマニヤ語	—
—	フランス語	—
—	ヒントズタニ語	—
—	英 語	—
—	日 本 語	—
—	マヂヤル語	—
—	イタリア語	—
—	ノールウェー語	—

度を示し、尙またその地域が自治共和國又は自治州に分割されてゐる民族に関しては、夫



## 第四節 ソ聯邦主要諸民族の沿革及び特性に關する若干の資料

諸民族の分布について述べたついでに、その中の主なるものゝ沿革及び特性を概略的に記しておく。ソヴェート時代以後の歴史については、別の機会にゆずることにして、この一節では大體帝政時代末までを基準にする。

## 一、ロシヤ人

ロシヤ人については前章及び本章にかなり詳しく述べておいたから、こゝでは省略する。

## 二、ウクライナ人(小ロシヤ人)

六——七世紀のころ既にウクライナ地方に現れた東スラヴの南部諸種族の後裔。

ウクライナ地方は河川交通の便に富み、東西をつなぐ通商路として早くから商業の發達をみた。ウクライナの地理的位置に着目し、その商權を得んと覗つた最初の種族はトルコ系のハザール族であり、その後スカンヂナヴィヤから來たノルマン族(ワリヤグ)がスラヴ征服に成功し、幾多の都市を建設したことは第一章に述べた通りである。ウクライナの民族主義者は十一——十三世紀の所謂キエフ公國時代がウクライナ民族の國家的獨立の時代であると稱してゐるが、それは誤りであつて、當時は商業關係の發達、農民收買の強化に伴ふ、氏族制崩壞の時代であると觀られてゐる。キエフ公國の没落後、その領土は細かく分裂して色々な封建的公國が發生した。十三世紀における「タタール」の襲撃と共に、ウクライナ地方一帯は農民叛亂の焔に包まれ、封建領主は西部のガリチャ・ヴォルィン公國を除いてほとんど全滅した。十四世紀に入つてガリチャはポーランド領となり、ヴォルィン公國はじめ現在のウクライナ地方全體はリトワ國の領土となつて「タタール」をやうやく驅逐するに至つた。十六世紀に入つてポーランドとリトワ國とは合併した。そしてこの世紀の六十年代には「農業改革」があつて土地を奪はれた農民の西部から東部(ウクライナ、主としてドネブル沿岸地方、ザポロジエ地方)へ逃亡するも

のが多かつたが、それらの土地もやがてはポーランド貴族に奪はれていつた。ポーランド貴族はこの目的のために農民の分化を策し、逃亡農民の中、一部の富裕なコサツクに「特權」を與へたが、經濟的壓迫は停止するところなく、つひには特權あるコサツク上層部すらポーランド貴族に反抗するに至つた。第一章で述べたやうに十七世紀中葉のウクライナは激烈な農民戰爭の舞臺であつた。貴族の軍隊を屢々撃破して農民戰爭はある程度の成果を收めたが、自己の支配を回復せんとするコサツク上層部の利益と農奴制よりの解放を終局の目的とする農民大衆の利益とは次第に喰ひちがひを生じ、前者は後者を裏切つて、新たな支配者(モスクワ國)に迎合し、有名な「ウクライナ併合」が行はれることゝなつた。

農民戰爭によつて打破された農奴制的關係はモスクワ國の援助によつて復活した。モスクワはコサツク上層部を懐柔して一種の自治制を許すと共に對ポーランド戰の前線としてこれを利用した。それ以後モスクワとポーランドとの長期戰の結果ドネブル左岸とキエフ地方とがロシヤの領有に移り、右岸地方は十八世紀末に至つて漸くポーランドから奪ひ取られた。ウクライナの南部ステツプ地方は十八世紀末までロシヤとトルコとの間に數回の奪合ひがあつたが、その頃までは事實上ザポロジエ・コサツクの領地であつた。「ウクライナ併合」以來この地方における農奴制はますます強化され、コサツク上層部は次第に大土地所有者となり、多くの下層農民を隷屬せしめるに至つた。下層農民は屢々一揆を起してコサツク上層部に反抗したが、モスクワ國はこの對立を利用して、後者に對する「特權」を剝奪し、「自治」を縮小することに努めた。そして十八世紀末のポーランド分割によつてコサツク・ウクライナは命脈盡き、自治は縣政にかはり、コサツク上層部はロシヤ貴族に變り、ロシヤ的農奴制はウクライナを支配することゝなつた。十九世紀に入つてウクライナは終局的にロシヤの植民地と化し、民族的抑壓の對象となつた。

十九世紀以後の資本主義の發達は、ウクライナ民族の覺醒を促し、民族運動は相次いで澎湃とわき起つた。しかし十九世紀中葉まではウクライナ・ブルジョア階級は無力であつて農民大衆の反ロシヤ運動をリードすることは出来なかつた。一八六

一年の農奴解放はウクライナ農民に土地も自由をも齎さなかつたが資本主義の發達、農民の分化を促進し、農業恐慌によつて土地を賣渡した多くの貴族に代つて新しく富農が勃興し、ウクライナ・ブルジョア階級の勢力は侮りがたいものとなつた。しかし一方において極度に零落し、窮乏化した農民大衆を吸収するに足る工業の發達が無かつたために、シベリヤ、アメリカへ移住するもの續出し、土地不足と農村の過剰人口は土地問題を尖鋭化し、農民は地主のみならず富農に對してもその鋒先を向けるに至つた（一九〇五年の革命）。十九世紀末の鐵道建設によつてウクライナの工業は急速に發達し、労働運動は早くも勃興し、ブルジョアの民族運動などと相並んで、ウクライナ民族解放運動の相貌を複雑化した。農民運動はどちらかといへば労働者運動に追隨してゐたが、一九〇五年の革命後ストルイピンの農業改革によつて農民分化はますます激しくなり、その革命的勢力はいよゝ増大した。二月革命によつてロシアの専制政治が打倒されて以來ウクライナ民族運動は非常に強力となつたが、十月革命においてウクライナ・ブルジョア階級及び小ブルジョアは完全にプロレタリアートと分離し反革命の陣營に移つた。

ウクライナ人の總數は約四千萬と稱せられ、ソ聯邦以外にはポーランドに約七百五十萬、チェコ・スロヴァキヤに約六十万、ルーマニヤに約百萬、その他米國、カナダ、ブラジル等に移住してゐるもの數十萬に上つてゐる。

ウクライナ民族に對する帝政ロシアの政策を一言に盡せば、民族としてのウクライナ人を「抹殺」し、ウクライナ語による學校の授業、出版物を禁止し、民族運動を徹底的に彈壓する點にあつた。

### 三、白ロシア人

白ロシア人の遠い祖先はクリヴィチ、ドレゴヴィチ、ラヂミチと呼ばれる三つのスラヴ系部族であり、これらは紀元六世紀乃至九世紀のころ既に現在の白ロシアの地域に移住してきたものである。白ロシアなる名稱の起源は明かでないが十四世紀當時の獨逸の史書にはこの名が現れてゐるし、十五世紀以後に出た西歐の最初の地圖類にも明記されてゐる。白ロシアは

その地理的位置が良いために、九世紀のころ既に「ワリヤグより希臘に至る」水路の中心をなし、白ロシア人は早くより西方のリトワ種族と交渉をもち、十三世紀より生成しはじめたリトワ・白ロシア國は十四世紀に至つて目覚ましい成長を示すにいたつた。（史書にはリトワ・ロシア大公國ともいはれてゐる）。十六世紀の六十年代に「農業改革」がおこなはれ、土地所有者（シュリヤフタ）と農奴とが判然と分れ、都市は十四世紀ごろより自治制による獨立的商工中心地となつて發達を つとめた。

十六世紀は白ロシア文化の「黄金時代」であり、白ロシア文語を以てする圖書の印刷が旺んに行はれるに至つた。しかしながら獨立せる民族・政治的オルガニズムとしての白ロシア民族の生成はなほ不可能であつた。當時ポーランドとモスクワとは共に白ロシアを領有せんと相争つてゐたが、白ロシアにおいてポーランドの勢力は次第に強大となり、十六世紀末の「宗教合同」を契機として白ロシアは政治的にも經濟的にも文化的にも凋落の一途をたどつていつた。ポーランド人は白ロシアを植民地化し、白ロシア農民を自己の農奴に化した。強制的なポーランド化、カトリック化は白ロシアの市民（職人、小商人）及び農民の反抗をひき起したが、この闘争は十八世紀においてはギリシヤ正教徒の民族・宗教的闘争の形をとり、ポーランドの植民地的壓迫に對する暴動、蜂起は各地におこり白ロシア及びウクライナのゴザックもこれに参加した。

十八世紀末における三回の「分割」によつて白ロシアはロシア帝國の領土となつた。白ロシアをめぐるロ波兩國資本の争ひはこの地方の經濟的發達を甚だしく阻害したが、ロシア帝國の統治下に入つて白ロシアの植民地化はますます激しくなつた。低廉な勞働力とロシア商品の「市場」——これが白ロシアに求めるものゝすべてであつた。「瘦せた農業地方」としての白ロシア、その文化的後進性は、一つの歴史的「宿命」であつたと見られよう。

「ロシア時代」は白ロシア農民に對する農奴制的收取の強化といふ一語によつて特徴づけることができる。白ロシア貴族階級はロシア人の官吏、軍人などによつて充たされた。十月革命に至るまで、封建的大土地所有が支配的であつたが、これと

平行して資本主義的な農業も発達し、小農はその關係で不振の状態にあつた。十九世紀の前半すでに白ロシア農民の一揆が頻發した。農奴「解放」も白ロシア農民の土地飢饉を緩和しなかつたばかりか、農民の經濟状態をかへつて悪化した。人口の自然増加はこの地方において「人口過剰」の現象を生じ、シベリヤ乃至アメリカ大陸へ移住する者も少くはなかつた。都市の發達はきはめて微々たるもので、資本主義的工業としては皮革、紡績などの工場が若干あるに過ぎなかつた。白ロシア民族解放運動は一八六三年の蜂起となつて現れたが、ツァーの軍隊に鎮壓され、シベリヤに流刑されたもの一萬五千に達した。

ニコライ一世以來ロシア化政策はますます露骨となり、殘忍性を帯びてきた。白ロシア語に對する侮蔑、壓迫は殊に甚だしいものがあつた。二十世紀に入つて白ロシア人の民族解放運動は熾烈となり、次々の革命において少からず重要な役割を果した。

白ロシア農民は手製の白い衣服をまとつてゐる。これは過去何百年の風習で、白ロシアの名稱もこゝに由來すると説く人がある。

#### 四、猶太人

西歐における迫害に堪えかねて猶太人がポーランド、リトワに移住したのは十世紀—十一世紀の時代である。富裕な猶太人はその後商業、金貨業などを營み、その他一般の猶太人は職人などになつて他國暮しをつゞけてゐたが、商賣敵などの關係で民族的嫉視をうけたり、無道の壓迫をうけることが多かつた。ポーランド分割以後ロシアの統治下に入つたが、法律的に無差別主義で猶太人をとり扱ふといふ最初の約束も、猶太人との競争に壓倒されかゝつたロシア商人の要求によつて反古となり、こゝでも猶太人排斥が強くなつた。そしてこの排斥や壓迫は屢々きはめて野蠻な方法で行はれた。十九世紀六〇年代の「改革」によつて猶太人ブルジョアジーの地位は大分良くなつたが、一般の猶太人はますます貧窮化し、階級分化が

激成されるに従つて、猶太人労働者の運動は極端な弾壓にもめげず相當の規模にまで發展した。一九〇五—一九〇六年のころは猶太人に對する「ボグローム」が盛んにおこなはれたが、「反動期」乃至大戰時代までもボグロームは停止しなかつた。そして革命後も白軍政府はウクライナにおいて大量の猶太人虐殺をおこなつた。一言にしていへば、舊ロシアにおいて猶太人はひどい迫害を受けてゐる。ソヴェート政權は猶太人問題の重要性に鑑み、かなり慎重な經濟、文化政策をとつてゐる。ピロ・ビヂャンの猶太人自治州は呼聲だけは高かつたが、移民の實績はあまり振はない模様である。

#### 五、ポーランド人

「スラヴ語群」に屬する民族。「ソヴェート小百科」(舊版)によれば、總數約二千二百萬以上、主としてポーランドに住み(一九二二年現在約千八百萬)、その他米國に約百十五萬(一九二〇年)、プロシヤに約八十五萬(一九二五年)、ソ聯邦に約七十八萬(一九二六年)、チェコ・スロヴァキヤに約七萬六千、フランスに約四萬六千(一九二二年)、リトワニヤに約二萬住んでゐる。その後、米國及びフランスのポーランド人はよほど増加してゐる模様で、一九二九—三〇年度「ポーランド年鑑」によれば全世界におけるポーランド人は二千七百萬、そのうちポーランド二千百萬、近接國三百萬、移民三百萬となつてゐる。

ポーランド民族の沿革を詳しく書けば非常に長くなるから、ごく大まかに述べることにしよう。

六—十世紀—氏族制の時代。十世紀以後—封建制の時代。それより十二世紀に至る間諸の公國が大公國—後には王國によつて統一され、カトリック教が普及した。この統一は獨逸人との鬭争の必要によつて促進されたものであるが、十二世紀より十四世紀に至る間に瓦解がおこり、諸公國に分裂し、大土地所有の貴族が實權を握り、内亂相次ぎ、君主制は没落した。ポーランド、リトワ兩國の合併については前述の通りであり、後ウクライナ及び白ロシアの一部をリトワ國より割譲するに及んでポーランドは著しく強化し、十六—十七世紀の對ロシア戰爭に勝利を占め、その隆盛期においてポーランドの領

土は「海から海へ」即ちバルト海から黒海にひろがった。十八世紀に入つてポーランドは諸外國の蠶食をうけ、第一回の分割（一七七二年）、第二回（一七九三年）、第三回（一七九五年）の分割を経てポーランドは獨立國としての存在を失つた。一八一五年の維納會議によつて、ポーランドは更に露、獨、奥によつて分割され、ワルシャワを中心とする重要な地方がつひにロシアの「自治領」（ポーランド王國）となつた。その後一八三〇年と一八六三年に兩度の叛亂が起つたが成功せず、「ロシア化政策」はますます激しくなつた。しかし資本主義の發展はポーランド民族主義をいよ／＼強化し、世界大戰後つひにポーランドの獨立を見るに至つた。

ソ聯邦に住むポーランド人は、ロシア共和國では労働者が多く、ウクライナ、白ロシアでは大部分農民である。ソヴェト政權はその對外政策上、國內ポーランド人の文化的向上、政治的地位の改善など抜け目のない方法をとつてゐる。

## 六、エストニア人

エストニア人。自稱エスチ、エストラセド。西部（バルト）フィン族の一つであつて總數約百三十萬。ソ聯邦にはその中約十五萬住んでゐる。

エスト人は古くより沿バルト地方の支配者であつたドイツの大土地所有者（バロン）に隸屬し、著しくドイツ化されてゐたが、ロシアがこの地方を併呑して以來（特に十九世紀末より）「ロシア化政策」を強行し、世界戰爭當時は反獨的シヨヅイニズムが旺んであつた。戰後エストニアがロシアから獨立したことは述べるまでもあるまい。ソヴェト政權はその領土に住むエストニア人に對してかなり文化的「優遇」を與へ、ある程度の民族「自決」を許してゐる（エストニア民族・村ソヴェートの數は五十餘）。

## 七、カレリヤ人

自稱カリヤラ、あるひはカリヤライセト。フィン族の「西部（バルト）群」に屬する種族。ノルマン族の史録にあらはれ

たのは九世紀のころで、ロシアの年代記にあらはれたのは一一四三年以後である。十二世紀當時はノヴゴロド人の同盟者であり、正教の洗禮も受けてゐる。十四世紀の末からカレリヤ人の大部分は瑞典の統治下に入り、その後、瑞典人とロシア人とによつて何回となく交互に支配されることになつた。瑞典の統治に嫌はず、宗教的、經濟的壓迫に堪えかねてカレリヤ人は十六世紀、十七世紀のころ大量的に東方及び南方に移住してロシアの領内で生活するやうになつた。そして東フィンランドに残つたものは多くルーテル教（新教）信者となり、フィンランド人に同化されていつた。

主なる職業は農耕であり、その他、地方によつては養鹿業、漁業、狩獵、眞珠採取、林業などを營むものもある。地域的にロシア人に隣接して生活し、且つギリシヤ正教徒であるにもかかわらず、風俗、習慣、言語においてロシア人と甚だしく異つてゐる。

カレリヤ人の言語は、さまざまの方言に分れてゐるので、文語の發達が行はれず、フィン語（スオミ語）を用ひざるを得ない事情になつてゐる。

## 八、モルドワ人

主としてヴォルガ中流地方に住み、マリイ人と共に、言語上フィン族のヴォルガ支系をなしてゐる。

モルドワ人がザヴォルジエ地方に分散したのは十七世紀、十八世紀の頃であつて、それは帝政ロシアの植民地的壓迫を逃れるためであつた。その後ロシア人の同化する所となり、正教に轉宗し、ロシア語を用ひるに至つたものも少なくない。

モルドワ人は古い時代からエルジャヤ人、モクシヤ人、カラタイ人、及びゲリユハン人といふ四つのグループに別れてゐる。最後の二つは十九世紀初頭より民族性を失ひはじめ、カラタイ人はタタール化し、ゲリユハン人はロシア化した。そしてエルジャヤ人及びモクシヤ人のみが民族の言語及び特性を保つてゐる。服装（殊に婦人の）に一種の特徴がある。主として農業を營み、かたはら林業、製革業、皮革業などに従事するものが多い。

## 九、マリイ人

チエレミス人ともいふ。言語系統からいへば、モルドワ人と共に、フィン族の沿ヴォルガ支系を成してゐる。體質的にみればある程度トルコ・タタールと混血してゐることが分る。尙また近隣のチュワシ族とも混血し、少からずその風俗的影響を受け、宗教では大多数が回教に轉宗した。マリイ人の原始的生業は狩獵であり、現在は農業、林業、養蜂業などを營んでゐるが、狩獵はいまも尙相當行はれてゐる。ロシアによつて東ヴォルガ地方が征服されてより、回教徒はその跡を絶ち、マリイ人の大部分は正教に改宗せしめられた。しかし實際には「異教徒」が大分ゐる。

- 一、山地マリイ人(クルク・マリ)
- 二、牧草地マリイ人(オンジェル・マリ)
- 三、東マリイ人(ウボ・マリ)

右の中(二)はバシキール自治共和國、ウラル州等に住んでゐる。それ〴〵言語、風俗を異にし、東マリイ人は文化的にバシキール、タタール人に接近してゐるが、山地マリイ人はチュワシ人に近い。

## 一〇、コーミ人

ズイリヤン人ともいふ。フィン族の北東群に屬する。

歐露の北端、バレンツォヴォ海に注ぐベチョラ河を中心とする一帯の地方に住んでゐるが、最初にこれを見出したのはノヴゴロド人で、彼等は十一世紀既にズイリヤンから貢物をとつてゐる。十四世紀に至つてこの地方はモスクワ大公の領有に歸し、その世紀の末には正教への改宗がおこなはれた。帝政ロシアの色々な學者が觀察したところによれば「ズイリヤン人は伶俐、明敏であり、狡猾なところがあり、よく氣の利く賢である」。そして非常に信仰心が深く、色々な迷信、邪教が生活

に根を張つてゐる。

狩獵は今日でも一部の地方では主要な生業となつてゐる。一部の地方では古くより農業が發達し、又諸種の手工業も營まれてゐる。

ズイリヤン語(コーミ語)は日常語として最近大いに普及してゐる。

## 一一、ミシャーリ人

フィン・ウグリヤ系の種族、ミシエル、メシチエル、メシチエリヤクなども呼ばれる。

過去においてトルコ化され、部分的にはロシア化した種族でその言語は、タタール語、ミシエル語、バシキール語、ロシア語など區々である。農業、養蜂業などが主要な職業である。

ミシャーリ人は古いロシア原住民の後裔であつて、オカ河沿岸の低地に住んでゐたが後更に東へうつり、カザン汗國が崩壊してロシア人の支配下に立つに至つてその一部は次第にロシア化し、他の一部はヴォルガを越えて去り、この地方において「タタール化」し、回教を奉じ、バシキール語を用ひるやうになつた。顔貌はバシキール人と著しく異つてゐる。

## 一二、ウドムルト人

ウドムルトは自稱で、従來ヴォチャーク人と呼ばれてゐた。沿カマ・フィン族。主として農耕、林業、狩獵に従事し、養蜂業も營んでゐる。大家族をなして生活し、氏族制の特徴が今なほ残つてゐる。ギリシャ正教に改宗せしめられたが、古い獨特の宗教を信じてゐるといふ。十二世紀の末ノヴゴロド人によつて征服され、十三世紀には「タタール」の侵すところとなり、その後三世紀の久しきにわたつて強制的に同化された。

## 一三、獨逸人

帝政時代のロシアには約百八十萬人(一八九七年)の獨逸人がゐた。ソヴェート時代に入つてその数は約百二十四萬人

(一九二六年)に減少した。これは主としてポーランドその他沿バルト諸國が獨立したためである。その中の約九四%は農業に従事してゐる。

これら獨逸人はビョートル大帝の時代に本國からロシヤのニエフスキイ地方へ移住し、エカテリナ二世の時代及びそれ以後ヴォルガ河兩岸の地方、ドネプル河地方、黒海沿岸地方などに移住してきた獨逸人の後裔である。これらの移住民は大部分うち續く戦争や封建的收取によつて零落した職人、農民などであつたが、ツァーの政府はかれらを主として東方諸族から奪ひとつたステップ地方に定住せしめた。そしてエカテリナ二世は一七六三年に獨逸移民の信教の自由、その他幾多の特典を制定した。農家一戸六五デシヤチンの土地分與、數年間の課税及び兵役の免除などがそれである。その結果、獨逸移民は經濟的にかなり成功し、資本主義の發展と共に、その内部に階級分化もおこなはれ、富農、地主、中農、貧農の區別ができあがつた。一八七〇年に特典は廢止され、自治制は消滅し、ロシヤ語の使用が強制的におこなはれることゝなつた。そして階級的分化と民族的壓迫とは、十九世紀後半に至つて獨逸農民の移住をひき起した。かくてヴォルガ沿岸の地方及びウクライナから、北カウカサス、シベリヤ、中央アジア方面へ多數の貧農が移住していつた。アメリカに渡つたものも少數ではない。

バルト海沿岸地方の獨逸人の間には貴族階級やブルジョアジーが生まれ、ロシヤの貴族及びブルジョアジーとその成長を共にした。

十月革命の際には獨逸人は各地において反革命に利用され、ソヴェート政權に楯ついた。内亂が終熄して後は、獨逸農民の經濟も徐々に復興した。コルホーズ建設の時代に一部獨逸人の間には本國歸還運動もおこつたが、その結果はあまり面白くなかつた。現在ソヴェート政權の下において、産業、文化の著しい發達が認められる。

## 一四、モルダヴィヤ人

ソ聯邦以外には、ルーマニア領のベッサラビヤ地方に住み、その人口の約四七・六%を占めてゐた(一九一七年現在約百十三萬)。ルーマニア人と大體同族であるといへる。即ち古代の羅馬がダーキヤを支配してゐた時代にルーマニアの先住民たるダーキヤ人その他の諸族と、雜多な種族より成る羅馬兵及び移民との混血によつて發生したものである。

しかし民族としてのモルダヴィヤ人は、ルーマニア人とは全然異なる歴史的、文化的、經濟的條件において形成され、發達したものであるから、ルーマニア民族とは區別されねばならぬ。

モルダヴィヤ人は數世紀の久しきにわたつて幾多の他民族(ゴート族、匈奴、スラヴ族、ブルガリヤ人、アワール人、タール人、トルコ人、ウクライナ人、ロシヤ人など)の文化的影響を蒙り、又ベッサラビヤに逃亡したルーマニア農民とも混住するに至つた。ルーマニア貴族に對するベッサラビヤ住民一般の反感は一つの「傳統」となり、モルダヴィヤ人は自らをルーマニア人と呼ぶことを好まない。モルダヴィヤ人にしてウクライナ人によつて同化され、あるひは後者を同化した數は相當多い。

言語はローマンス語であるが、ロシヤ語、トルコ語なども混入し、ハンガリヤ語、フランス文語の影響も著しく強い。ベッサラビヤに住むモルダヴィヤ人は現在なほルーマニア化政策に慊らず、民族的少數派としての苦しみをなめてゐる。

## 一五、チュワシ人

ヴォルガ沿岸地方諸民族の一つ。チュワシ族は封建時代において、既にそれ以前からヴォルガ沿岸地方に居住してゐた多數の氏族群から形成されたものである。これらの氏族群は「原始共產主義」の時代には狩獵、ついで原始的農業を営み、ヴォルガ沿岸に住むその他の氏族群と經濟的共通性をもつてゐた。この種の氏族群の中からチュワシ族をはじめ、マリ族、タール族などが形成されたのであつて、それら諸族の言語及び土俗學的特性の類似はかかる歴史的過程によつて説明される(マール博士の創見)。九一〇世紀における農業技術の進歩は農民の階級的分化を促進し、チュワシ人はその頃からヴォル

ガ中流地方に形成された封建國家と地方的領主とによつて二重の收取を受けるに至つた。中ヴォルガ封建制度の中心地は一〇一四世紀のブルガル市、一五一一六世紀のカザン市であり、チュウシ人はこれらの「汗」に毛皮、家畜等を貢納し、ヤサーク税を取上げられてゐた。カザン汗國の没落後チュウシ人はロシヤ（モスクワ國）に隸屬するに至り、土地の收奪、農奴化等々手ひどい植民地的壓迫を蒙つた。「農民戦争」への積極的参加（第一章参照）はかかる壓制に對するチュウシ人の反抗に外ならぬ。

十八世紀に至りチュウシ人の大部分は強制的に正教の洗禮をうけ、「ロシヤ化」政策は次第にその成果を現した。資本主義の時代に入つてチュウシ人の階級的分化は著しく進行し、十九世紀末には工業資本の發達をみ、民族運動も勃興した。（民族ブルジョアジーはタタール民族主義及び回教の影響を防ぐためにミツシヨン・スクールを利用し、民族デモクラシーの旗幟の下に闘つた）。一九〇五年及び一九一七年の革命においてはチュウシ人農民は土地と自由のためにかなり積極的に闘争した。

チュウシ人の生活には古い時代からの傳統や獨特の宗教的習慣が残つてゐる。

## 一六、トルコ族（廣義における）

トルコ族を廣義に解すれば、アジア及びヨーロッパの廣大な地域にわたつて、諸種のトルコ語及びトルコ方言を用ひるさまゝな種族を包括し、その數三千五百萬乃至四千萬といふことになる。ペトルコ族の故郷はエニセイ河、イルティシ河に挟まれる一帯の地方であり、五世紀のころ既にこの地方に遊牧民の國家が形成された。民族大移動の時代からトルコ族はヨーロッパの東半及びアジアの大部分にわたつて廣汎に移動し、支那、ベルシヤ、インド、シリヤ、エジプトなどの諸國を席捲したことは周知の如くである（その中には第一章で述べたハザール族の如く消滅してしまつた種族もある）。歐亞にまたがる大移動はトルコ族とその他の種族（蒙古種族、イラン種族）との間に混血、同化をもたらし、言語を非常に複雑化した。ト

ルコ族の分類がきはめて困難であるといふ事情もかかる歴史的原因にもとづくものである。

トルコ族は古くより主として言語系統によつてさまざまに分類されてゐるが、地域的に大別すれば、

- 一、東部トルコ族（ヤキート人、シベリヤ及びアルタイ・タタール人、ソイオト人、タランチ人、その他支那、インドのトルコ族）。
- 二、中央トルコ族（タタール人、キルギーズ人、カザーク人、カラカルバク人、ウズベク人、キプチャク人、サルトル人等）。
- 三、西部トルコ族（トゥルクメン人、カウカサス・タタール人、アゼルバイジャン人、オスマン人、クリミヤ・タタール人等）。

となる。その中キルギーズ人、ウズベク人などが「人類學的」にみてもつとも純粹なトルコ族の型を保つてゐると稱せられてゐる。丸い頭、隋圓形の顔、細長い眼、黒い直毛、廣い頬骨、厚い唇、蒙古人よりやや毛深い點などが體質の特徴とされてゐる。

ヤキート人を除くすべてのトルコ族は回教徒であり、クリスト教あるひは佛教の信者は少數である。

過去の歴史においてトルコ族は歐亞の到る處に征服者として登場し、いろいろの國家を形成したが、その中で今日まで残存してゐるのはオスマン國家（土耳其）のみである。

トルコ族の中には次第に遊牧生活から土着生活に移つたものも大分あるが、主要な職業は依然として牧畜であり、概して「民度」が低い。

ソ聯邦に住むトルコ族の中、多少とも顯著なものを挙げれば次の通りである。

## 一七、タタール人

トルコ・タタールとも呼ぶ。時代によつて、種族によつて、タタールなる名稱の意義は色々異つてゐる。支那人は韃靼と呼び黄河中流（現在の山西省及びオルドス地方）に住んでゐた特殊の蒙古種族にこの名を冠してゐたやうである。この種族は他の近隣諸族に壓迫されて西のかた天山地方に移住した。のち蒙古の成吉思汗によつて征服、統一された諸多の蒙古種族も亦「タタール」といふ共通の名稱を以て呼ばれるやうになつた。成吉思汗の後裔によつて北部、西部及び中央アジアが征服された當時この地方には系統を異にし、言語を異にするトルコ諸族が住んでゐたが、これらトルコ族は文化も比較的高く、イランの影響を少からず受けてゐた關係上、言語、文化、宗教のあらゆる領域において新來の征服者たる蒙古種族を同化し、尙その外に、ある種のイラン系及びフィン系の諸族もこのトルコ族によつて同化され、トルコ語を用ひ、回教を信するに至つた。そこでタタールといふ名稱は、これら蒙古族、トルコ族その他種族の「集合名詞」として用ひられるやうになつた。

十二世紀及び十三世紀にわたつて歐亞の大陸を蹂躪した所謂「タタール」はこの種の「集合名詞」に過ぎない。

要するに「タタール」といふ名稱はすこぶる曖昧で、蒙古人も西歐では十九世紀まで「タタール」と誤稱されてゐた。ロシアにおいてアジア諸種族の研究が深まると共に、タタールの名稱もやゝ正確な内容を持ち、小さい範囲に限定されることゝなつたが、まだ曖昧な點が多い。今日用ひられてゐるタタールなる名稱を大づかみに定義すれば、(一)大部分がトルコ系統（一部はイラン及びフィン系）で、(二)西部シベリヤ、カウカサス、歐露の東部及びクリミヤに住み、(三)トルコ語の雑多な方言を用ひ、(四)一定の独自の名稱（例へばキルギーズ、サルト等）を有しない、數多くの小種族が即ちタタール人なのである。以下の説明もこの定義に従つておこなはれる。

(一)シベリヤ・タタール人。雑多な混血によつて生じたもので、方言によつてバラピン、タルルイク、イルトイシ・タタール等々に分れ、土着の回教徒で、農牧以外に商賣に長じ、もつともロシア化してゐる。

(二)アルタイ・タタール人。テレウト、白カルムイク、シヨール、森林タタール、クマンヂン、アバカン・タタール等

細かく分れ、その發生から云へばサモエド族やウグリヤ・フィン族とトルコ及び蒙古族との混血である。後れた遊牧民が多く、一部は死滅し、一部はロシア化し、宗教的には回教徒が少く、シヤマンを信する者、表面だけの正教徒などが多い。

(三)カウカサス・タタール（アゼルバイジャン・トルコ人の項を見よ）。アゼルバイジャン人以外には、ダゲスタンのクムイク人、カバルヂン・トルコ、カラチャイ人などがこれに屬する。

(四)ナガイ人。ナガイ人とも呼ぶ。かつて南ロシアのステツプ地方を遊牧してゐたが、ロシア人の南下に壓迫されて、タマ河テレク河の下流地方、クリミヤなどに住み、トルコに移住したものである。

(五)クリミヤ・タタール人。かつてクリミヤに住んでゐたもつとも雑多な種族の混血によつてできたものである。つまり希臘人、ハザール人からアルメニヤ人、猶太人、ジブシイ人に至る色々な種族が征服者たるトルコ・タタール及び蒙古種族と混血して生じたもので、南岸タタール人はヨーロッパ型が顯著に現れてゐる。

(六)アストラハン・タタール人。

(七)カザン・タタール人（狭義における本來のタタール人）。欽察汗「タタール」の末裔でファン族、ロシア人、ブルガリヤ人、バシキール人等と混血してゐる。その分布は別に述べた通り。ヨーロッパ型の著しいものもあれば蒙古色濃厚なものもあり、殆ど全部が回教スンニイ派の狂信者で、農業を主としてゐるが、企業欲旺盛で取引に長じてゐる。勞働者としては眞面目であり、良心的であり、帝政ロシアにおいては非常に「評判」が良かったさうである。

一八、アゼルバイジャン・トルコ人

アゼルバイジャン・タタールあるひはアゼルバイジャン人とも呼ばれる。主として後カウカサスの南東隅及びベルシヤの北西部（ベルシヤ・アゼルバイジャン）に住み、東部後カウカサス及びベルシヤ北西部土人とこの地を征略したトルコ族イラン系諸族との混血、合流によつて生じたものであり、その發生は比較的新しい（十一世紀）。



東部後カウカサスは、西紀前七世紀のころスキタイ族によつて占められてきたが、十一世紀のころトルコ人の移住が旺になり、蒙古族の襲来（十三、十四世紀）以後この地方の「トルコ化」が顯著になつた。蒙古帝國及びタメルラン帝國の瓦解後、東部後カウカサスは諸多の汗國に分裂し、ペルシヤに從屬するに至つたが、これらの汗國は十九世紀初頭ロシアに征服されるまで存続した。バクトの石油に着目したロシアがこの地方に鐵道を建設して以來、自然經濟の國に資本主義工業の急激な發達をみるに至つた。この情勢はロシア化政策に對する民族的反感と相俟つてアゼルバイジャンの民族運動に油を注ぎ、汎トルコ主義のイデオロギーを瀾漫せしめるに至つた。一九〇五—〇六年のアルメニヤ・タタール人饑殺は地方的シヨヴィニズムをますます強化し、アゼルバイジャン人、及びアルメニヤ人の間にさまざまの民族運動の潮流が渦巻いた。二月革命後、日見の政權が生れたが、北方よりはソヴェート革命の波が押しよせ、南方からは汎トルコ主義の流れが浸入し、形勢混沌たるものがあつた。その後ひとり革命の旗を固守してゐたバクトも一九一八年九月トルコ人の掌中に歸し、トルコが優勢を占めたが見えたが、アルメニヤとの民族闘争に熱中してゐる隙に乗じて労働者、農民のソヴェートが政權を奪ひバクトに次いでアルメニヤも平定した。

アゼルバイジャン・トルコ人の總數は約二百五十萬、その中約百七十萬はソ聯邦に住み（一九二六年現在）、文化的にはイラン色濃厚であり、南トルコ語（アゼリ語）を用ひてはるが、ペルシヤ語の影響がかなり強く残つてゐる。主要な職業は農牧であるが、ソヴェート時代に入つて工業建設が大規模に進んでゐる。

## 一九、カザーク人

キルギーズ・カザーク人、キルギーズ・カイサク人とも稱せられる。トルコ族（北西支系）の聯邦に住むトルコ族のうちで最多數を占めてゐる。

キルギーズは蒙古に雄飛した匈奴、柔然、突厥などの北方にゐる部族として早くから支那人に知られ、漢代の史書に堅

昆の二字で見えるのを始めとして、以後は結骨、契骨などとも書かれ、また唐代には黠戛斯、紇挖斯、蒙古時代には乞力吉思、乞兒吉思と寫されてゐるたさうである。エニセイ河上流、ウル・テム河の流域を本據とし、八世紀のころまでは突厥の隸屬國となつてゐたが、後ウイグルの支配下に入り、ウイグル帝國の滅亡後、十三世紀のころから蒙古帝國の版圖となりキルギーズ人の分布は漸次西方に蔓延して中央アジアの曠野に及び、その最西部にあつたものは哈薩克の支配を受けるに至つた。これが即ちキルギーズ・カザーク（つまり現在カザーク共和國の主要民族をなすもの）であつて、バルハシ湖からカスピ海に至る所謂キルギーズ曠野はかれら遊牧民の天地であつた。別に天山山脈やパミール等の高地に住んでゐるものがあり、これをカラ・キルギーズと呼んでゐた（現在キルギーズ共和國の主要民族をなすものが即ちそれである）。

ロシアに征服された事情については、第一章に述べておいた通りである。ソ聯邦以外では蒙古、支那の西部などにも住んでゐる。

カザーク人は部族、氏族別に細かく別れてゐる。家長的氏族制の遺風は今なほ残つてをり、遊牧してゐるものもまだ相當多い。

舊オルダ（大オルダ）はカザーク人の二五%、中オルダ（オルタ・ヂユズ）は四五%、小オルダ（クシ・ヂユズ）は三〇%を占め、それぞれ諸種の部族より成つてゐる。

主なる職業は牧畜及び農業で、漁業を営んでゐるものもゐる。家畜を失つた貧民（チャターク）は農業に移り、あるひはカザクスタン、ウズベク共和國、トゥルクメン共和國の隣接地帯において工業、運輸労働者（未熟練）として働いてゐる。

宗教は回教スンニイ派。

## 二〇、キルギーズ人

キルギーズ人とも呼ばれ以前はカラ・キルギーズ人と呼ばれてゐた。トルコ族の「北西群」をなし、中央アジアの山地

に古くから住んでゐる。ソ聯邦以外では支那の西部、アフガニスタン領バダフシャンなどに住み、總數約百萬（一九二六年當時）。

キルギーズ人の沿革については前項（カザーク人）の通りである。政治・軍事的に、あるひは部族的に、血縁的に、三通りの類別があつてなかく複雑である。

遊牧經濟から土着農業への過渡においてさまざまの段階があり、もつとも低い、純粹の遊牧民たるバミール・キルギーズ人、人工灌漑によつて集約的な棉花栽培をおこなふフェルガル河谷のキルギーズ人から、純粹の土着農民に至るまで經濟的にも細かく分類できる。遊牧民にあつては家長的・氏族制と慣習法が不可侵視されてゐるし、土着と商品經濟の發達に伴つて「マナブ」(富者)の權力が大分強まつてきたといはれる。

宗教は回教スンニイ派。

#### 二一、ウズベク人

トルコ族ではあるが、イラン族、蒙古族など、かなり混血してゐる。ウズベク人はトルクケスタンに移住した遠い昔のウイグル族の末裔であるといはれてゐる。十世紀のころ南隣の諸族と分離してヒワ、ブハラ、フェルガン、バルク等の地方に據つて一部をなし、十四世紀のころはウズベク部の全盛時代を現出した。その後ウズベク人は帖木兒朝に隸屬するに至つたが、その衰滅に乗じて十六世紀の初頭ブハラ及びヒワ汗國を建て、イラン系タヂク人をも支配した。後者との混血はその當時から著しくなつたのである。

しかし風俗、習慣は大體トルコ的特徴を保ち、回教を奉じて後は次第に土着して農業を營むに至つたが商業、手工業などは殆どタヂク人まかせであつた。牧畜はどちらかといへば二義的である。

宗教は回教スンニイ派。言語はウズベク語であるが、地方的に方言が多い。

#### 二二、トルクメン人

ウズベク人は色々細かい諸族に分れ、その名を一々あげれば總數百五十に及ぶ由である。

ソ聯邦以外では、アフガニスタン及び支那西部(新疆)に住み、その數合計約六百五十萬といはれてゐる。

ソ聯以外ではアフガニスタンの北部及びベルシヤに住んでゐる。これらを合すれば總數約百三十萬。ソ聯邦には約七十六萬（一九二六年）。分布は第二節に述べた通り。

都市に住するものは甚だ稀で、大部分は農業及び牧畜を營み、ソ聯邦の領内では一定の土地に定住してゐるものが多く、ベルシヤ及びアフガニスタンでは遊牧が多い。土着が多くなつた原因の一つはこの地方に棉花の栽培が旺んになつたためである。手工業としては毛氈、綿市、絹布などが知られてゐる。

概して文盲であり、ソ聯邦以外のトルクメン人は殆ど文字が讀めない。宗教は回教スンニイ派。さまざまの種族や氏族に分れてゐる（主なる種族はヨムード人、テキン人、エルサリ人など）。

トルクメンはその昔渾然と一體をなしてゐた同じトルコ族のキルギーズ人やウズベク人に一番近い。しかし南部においては大分「アーリヤ化」されてゐる。ロシアに征服される以前は勇猛恐るべき遊牧民として知られ、ベルシヤ、その他近隣の諸族に對して屢々襲撃、掠奪をおこなひ、奴隸を驅使してオアシスをつくらせるなどかなり「武名」を轟かしてゐたがロシアに從屬して以來よほど柔順になり、次第に土着するに至つたといはれてゐる。

#### 二三、パシキール人

トルコ族と蒙古及びフィン諸族との混血。

沿ウラル地方には九世紀以前から住んでゐる。この地方にロシア植民政策が組織的におこなはれ始めたのは十六世紀後半

のことであり、その當時からバシキール人は「ヤサーク税」を課せられてきた。目ぼしい農地は次々とロシアの領主等に奪ひ去られロシア商人は半ば掠奪的な「取引」によつてバシキール人を苦しめた。植民政策上、バシキール人の「上層」に特色な特権を與へてこれを懐柔、利用する方法がとられ、それは多分に成功した。経済的、政治的抑壓に加へて教會の宗教的壓迫―バシキール人の強制的改宗がおこなはれた。農民叛亂の波は十七世紀のころから、あるひは高く、あるひは低く、ほとんど慢性的に繼續した。農奴解放の後、ロシア農村の過剰人口を植民地に移住せしめる方策が採られ、この地方における植民地的制度が強化された。めにバシキール人は手も足も出なかつた。民族運動が大衆化したのは十月革命以後のことである。

主として土着の牧畜及び農業を營んでゐるが、南部バシキールには未だ夏場にステップ地方へ移住するものがある。

## 二四、ヤクート人

トルコ族。南エニセイ・トルコ族の末裔であらうと見られてゐる。十三―十四世紀のころ南部より蒙古族に壓迫されてレナ河流域に移動し、北、東に擴がつてツングース族その他「舊アジア」諸族の一部を同化し、つひには一部ロシア人も同化するに至つた。現在の地域に移動した當時は家長的・氏族制の段階にあつたが、その後氏族關係が崩れて半封建制の發生をみた。そして族長（トイオン）は半封建領主に轉化した。ロシアのコザツクがヤクートに到達したのは十七世紀初頭のこと、毛皮目當の植民政策が次第に強まり、ヤクート人は甚しい壓迫や迫害を蒙つた。殺戮、暴行はもとよりのことヤクート人を奴隸として賣買することさへ旺んとなり、十八世紀末まではヤクーツク市は奴隸取引の中心地をなしてゐた。十七世紀から十八世紀にかけて約百年間ヤクート人の武装蜂起が頻發したのも當然のことである。商業の發達、牧畜（牛）の進歩、それに伴ふ牧草地所有の必要など色々な條件の下にヤクート人の階級的分化が激成され、それはロシアの植民政策の利する所となつた。十九世紀末に至つてヤクート人の經濟は急速に資本主義化し、一九〇五年の革命には民族主義的インテ

リゲンチャを中心とする「ヤクート同盟」の民族運動が勃興したが、反動來と共にロシアとの妥協的態度が勝を占め、ツァー政府の同化政策はある程度成功した。

十月革命以後、一時コルチャク軍の統治下にあつたが、一九一九年十二月再びソヴェート勢力が復活し、白軍や民族主義者等の反抗を鎮定して後、一九二二年ヤクート自治共和國が成立した。

ヤクート人は今日大多數が土着生活をおこなひ、養鹿をいとなむ遊牧民や、狩人、漁師などで放浪するものは甚だ僅少となつた。しかし古い遊牧時代の風習が今でも残つてをり、民族的傳統の殘滓もすっかり消えてゐない。宗教は正教徒となつてゐるが、これは表面的で、シャーマン教の影響が強い。ヤクート人に同化されたツングースはドルガンと自稱してゐるが、ヤクート人と殆ど變らない。

## 二五、タチク人

ヂカン、ヂワールとも呼ばれ、自らは「バルセワン」(つまりベルシヤ人)と稱してゐる。

イラン系種族であつて、アフガニスタン、ベルシヤ及びソ聯邦領中央アジアに土着の生活を營んでゐる。タヂク農民の中には「タタール化」したものが多く、南東カウカサスのタート人などはその一例である。トウルケスタンに住むサルト人もタヂクの一支部であるとする學者が多い。

體質はイラン系の特徴をよくあらはしてゐる。即ち顔形が長く、額が廣く、眼に力があり、黒色あるひは暗栗色の毛髪をもち、髯が濃い。

農業、果樹栽培のみならず、手工業、商業に長じ、大部分回教徒(スンニイ派)であるが、太陽崇拜、火の崇拜など古い宗教的傳統が今なほ残つてゐる。

トルコ族に征服される以前にかなり高い文化をもつてゐたが、それ以後においても文化、職業、風俗などの點において遊

牧民より一步先んじてゐた。タヂク語はイラン系のいろ／＼な言語のうちで最も文化的であるとされてゐる。

アフガニスタンに住むタヂク人の数は百萬乃至二百萬程度である。

## 二六、ブリヤート人

蒙古族。ブリヤート語（北蒙古方言）を用ひる。

バイカル湖の兩岸に住み、北部ブリヤートとザバイカル・ブリヤートの二つに分つことができる。

前者は土着農民であり、後者は主として牧畜を業とし、一部は農業に移行しつゝある。氏族制の遺風が非常に濃厚で、北部ブリヤート人はシャーマン教信者、ザバイカル・ブリヤートは佛教（喇嘛教）信者である。そして喇嘛僧は數多く廟に住み、従来は醫療、教育までも司り、大きい勢力を占めてゐた。西藏語から翻譯した色々な古い經文とツヴェート新聞——この二つのはけしい對照が、ブリヤート人の今日の文化生活を特徴づけてゐる。

## 二七、アルメニヤ人

自稱ハイ人。後カウカサスに住む。マール博士によれば、ヤベテ族土人とその土地を征服したインド・ヨーロッパ系諸族との混血によつて生じた種族である。獨特のアルメニヤ語をもちひてゐる。

現在のアルメニヤの地域にはじめて現れたのはマケドニヤの征服以後（西紀前四世紀）で、アルメニヤ高地へ来たのは西紀前七世紀といはれてゐる。古くから農業文化の發達を見たが政治的獨立を失つて以來、自然的、人為的移住を餘儀なくされ、ベルシヤ、インド、エジプト、ガリチヤ、ロシア等に商業移民、文化移民として流れていつた。トルコ帝國の統治下にあつた時代には、トルコ人と經濟組織及び文化を著しく異にしてゐる關係上、兩民族の對立、反目は十九世紀後半より極度に昂進し、有名なアルメニヤ人擧殺さへおこなはれた。農業經濟の進んだアルメニヤ人は遊牧あるひは半遊牧の回教徒に隸屬することを潔しとせず、他國に移住するもの多く、たえず獨立の機會を覗つてゐた。

アルメニヤ人の總數は約二百三十萬、その中ソ聯邦に住むもの百五十萬（一九二六年）。カウカサス諸民族の中ではもつとも進取的で、企業心に富み、ロシア各地において經濟的に相當進出してゐた。アルメニヤ共和國は一九二〇年後カウカサス聯邦に加はり一九二二年に現在の國境が劃定された。

## 二八、グルジヤ人

カルトヴェル人、あるひはサカルトヴェル人と自稱する。カルトヴェル語族に屬する民族で、マール博士はこれを典型的ヤベテ族と呼んでゐる。後カウカサスの最も古い住民の一つである。

グルジヤ種族が國に統一されたのは西紀前三世紀のころであり、幾世紀の久しきにわたつて近隣の諸族及び侵略者（ローマ人、バルチヤ人、ベルシヤ人、ヴィザンチン人、カウカサス山地土人、アラビヤ人、蒙古人、オスマン・トルコ人など）と相争ひ、その中の幾つかに隸屬した時代もあるし、獨立と統一を全ふした時代もあり、政治的、文化的に黄金時代を現出したこともある（五世紀、十一十二世紀）。十三世紀より十五世紀の間グルジヤは蒙古族の襲撃を受けて數多の小國に分裂しトルコ人、ベルシヤ人はその間隙に乗じて旺んに内政干渉をおこなつた。十八世紀の中葉再び統一したが、一七八三年よりロシアの「保護」下におかれ、一八〇一年「平和的併合」の美名によつてロシア帝國の植民地と化し、その民族的、經濟的壓制を蒙るに至つた。グルジヤ農民と貴族との對立を利用してロシア政府は後者に特權を付與し、植民政策を意のまゝに遂行した。十九世紀初頭よりロシア資本主義はグルジヤの「市場化」につとめ、綿布の輸出が増大すると共にグルジヤの棉花栽培は不振に陥り、農民大衆のロシア植民政策に對する反抗は屢々暴動となつて現れた。そして民族アルジョアジの反ロシア運動も著しく強化した。農奴制は「解放」以後も二月革命まで存続し、革命の恐るべき原動力を醸成した。

グルジヤ人は毛髪も眼も黒い。宗教では、クリスト教がもつとも普及し、就中、正教徒が多い。メスフ人、アッジャル人の中には回教徒も少くない。山間の僻地にはアニミズムが尙のこつてゐる。

グルジャは元來農業國であるが、以前から土地不足に悩んでゐる。工業は最近著しく發達した(特に滿庵)。

## 二九、オセチン人

カウカサス主山脈の兩斜面に住んでゐる。オセチンとはグルジャ人のつけた名前で、自らはイロンと稱してゐる(イランの意)。インド・ヨーロッパ族——イラン系の種族とされてゐるがその發生については諸説異つてゐる。即ち古いロシアの年代記に残つてゐるヤース人の後裔であらうといふ學者もあり、ベルシヤ人に近い種族とみる説もあり古代ゲルマンあるひはスカンデナヴィヤ諸族とする人もゐる。オセチン人間の色々な體質的特徴の差異が混血の事實を示してゐる。

宗教の方面では非常に「融通が利く」らしく、今までオセチン人の大多數は過去においてクリスト教から回教へ、回教からクリスト教へと數回にわたつて轉宗した。帝政時代の統計では約二割が回教徒で、残りは正教といふことになつてゐるが、實際は種々の「邪教」がはびこつてゐるといふ。言語はイラン語の系統。數個の「氏族社會」に分れ、農牧及び伐材を本業となしてゐる。

かつて「タタール」の襲來を受け、尙またチェルクス、カバルチン等の諸族に壓迫されて、柔弱なオセチン人はカウカサス山麓地方から峡谷の地方に追ひこまれたが、ロシア人に對してはさほど抵抗もせず、帝政ロシアの政府によつて近隣の山地諸族から保護されてゐた。

## 三〇、チェチェン人

カウカサス山地民族の一つ。インギーシ人もこれに屬し、バツビー人もその系統からみて(部分的には言語においても)同族である。

ロシアに征服される以前は氏族制が支配的であつた(河谷地方には封建的關係があつた)。その殘滓は今なほ存してゐる。主要な職業は農牧で、ほとんど農村にのみ住んでゐるが、石油採掘を業とするものも若干ゐる。宗教は回教(十八世紀以

後)。チェチェン人についてはソ聯の調査もさほど深くない。今日、教育の振興や産業の開發には相當力を注いでゐる。

## 三一、アワール人

自稱フンズ或ひはマアルラウ(山地民の意)。

ダゲスタン諸民族中最も多數を占めてゐる。中部ダゲスタンに住み、主として牧畜及び手工業に従事してゐる。十九世紀における帝政ロシアの侵略(いはゆるカウカサス戦争)に對してチェチェン人と共に頑強に闘つた民族である。

### 第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

#### 第一節 加盟共和國、自治州の民族別人口構成

我々は前章において、ソ聯邦に住む色々な民族が、大體どれくらゐの人口を擁し、どのやうな地域に分布してゐるかを一通り概観した。

この章においては、もう一步進めて、ソ聯邦を構成する「民族的」諸共和國の内部にそれ／＼どのやうな民族が住み、各共和國の人口に對して各々どれくらゐのパーセンテージを占めてゐるかを調べていきたいと思ふ。

唯一つ遺憾に堪えないのは、前章で告白した資料不足の悩みをこゝでも繰返さねばならないことである。つまり各共和國人口の民族別構成に關する數字は今のところ一九二六年末國勢調査の資料に基くもの以外には見當らないのである。しかもそれ以來ソ聯邦の共和國構成及び區劃は度々變つてゐるので、一九二六年の數字をそのまま同じ民族名を冠する現在の十一加盟共和國にあてはめるわけにはゆかぬ。このやうな事情であるから、今から提供しようとする資料も、今日の狀態を推知せしめる點から云へば、きはめて大まかな、近似的なものに過ぎないであらう。しかしながら「有るは無きにまさる」といふ言葉もあるし、ソ聯邦の色々な政治問題、殊に民族問題を究める上にも各共和國人口の民族別構成を知ることがきはめて必要であると思ふから、資料の不充分さを敢て意とせず、こゝに一應の敘述を試みる次第である。

(註) ソ聯邦國家組織の變化

民族的・地域的單位	ソヴェエト聯邦成立當初(一九二三年)	一九二五年	一九二九年	一九三六年	新憲法公布以後
聯邦加盟共和國	四	六	六	七	一一

後カウカサス聯邦共和國の諸共和國	自治共和國	自治州	民族管區	合計
三	一〇	一六	一	三三
三	一三	一七	一	三九
三	一六	一六	一	四二
三	一九	一四	九	五二
一	二二	二二	九	五一

「社會主義の國・ソ聯邦」一九三六年モスクワ發行一〇七頁より譯載。

先づ順序として一九二六年末國勢調査資料に基く「ソ聯邦各加盟共和國及び自治州の民族別人口構成表」(別表第三)を次頁以下に掲げることしよう。(註) 一見してわかるやうに、この表には相當詳しい數字がのつてゐるが、これを簡單に要約すれば次の如くなる。

(註) 「數字から見た全聯邦共產黨の民族政策」一九三〇年モスクワ發行。四四―四七頁。  
一、ロシア共和國 (人口一〇〇、八九一、二四四)

ロシア人	七三・四二%	非ロシア民族	二六・五八%
ウクライナ人	七・八〇%		
カザーク人	三・八二%		
タタール人	二・八二%		
モルドワ人	一・三二%		
チュウワシ人	一・一一%		
その他三十一民族約	九・七〇%		

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

(別表第三)

ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國  
の民族別人口構成表〔其2〕

共和國、州及ビ民族ノ名稱	總人口	各共和國又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
ブリヤート人	237,494	0.24	0.01	0.28
アルタイ人	39,062	0.04	0.001	0.05
ヤクート人	240,687	0.24	0.03	0.28
カバルジン人	139,871	0.14	0.01	0.17
チエチエン人	318,373	0.32	0.02	0.38
アワル人	139,664	0.14	0.01	0.17
アルメニヤ人	195,410	0.19	0.67	0.10
オセチン人	157,348	0.16	0.09	0.17
キルギーズ人	671,946	0.67	0.05	0.80
カラカルバク人	118,217	0.12	0.02	0.14
カザーク人	3,851,661	3.82	0.48	4.52
ウズベク人	324,216	0.32	0.64	0.26
(イ) バシキール自治共和國	2,665,836	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	1,064,707	39.94	78.38	36.24
バシキール人	625,845	23.48	4.96	25.26
タタール人	461,871	17.33	12.04	17.83
ミシヤリ人	135,960	5.10	0.22	5.57
チユワシ人	84,886	3.18	0.39	3.45
マリイ人	79,298	2.97	0.10	3.25
ウクライナ人	76,710	2.88	0.89	3.07
モルドワ人	49,813	1.87	0.50	2.00
(ロ) ブリヤート蒙古自治共和國	491,236	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	258,796	52.68	83.81	49.50
ブリヤート人	214,957	43.76	3.07	47.92
(ハ) ダゲスタン自治共和國	788,098	100.00	100.00	100.00

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

一三三

(別表第三)

ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國  
の民族別人口構成表〔其1〕

共和國、州及ビ民族ノ名稱	總人口	各共和國又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
1 ロシヤ共和國	100,891,244	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	74,072,096	73.42	83.61	71.29
ウクライナ人	7,873,331	7.80	4.01	8.60
白ロシヤ人	637,634	0.63	0.65	0.63
ポーランド人	197,827	0.20	0.73	0.08
レツト人	116,601	0.12	0.28	0.08
リトワニヤ人	26,856	0.03	0.11	0.01
獨逸人	806,301	0.80	0.73	0.82
希臘人	50,649	0.05	0.13	0.03
猶太人	566,917	0.56	3.06	0.04
フィンランド人	115,220	0.11	0.04	0.13
カレリヤ人	248,030	0.25	0.04	0.29
エストニヤ人	150,378	0.15	0.19	0.14
ヴェブス人	32,784	0.03	0.002	0.04
ズイリヤン人	226,292	0.22	0.05	0.26
ベルミヤク人	149,448	0.15	0.01	0.17
ウオチヤーク人	504,018	0.50	0.03	0.60
マリイ人	428,001	0.42	0.02	0.51
モルドワ人	1,334,659	1.32	0.14	1.57
チユワシ人	1,114,813	1.11	0.09	1.32
タタール人	2,846,734	2.82	2.26	2.94
ミシヤリ人	242,570	0.24	0.02	0.29
バシキール人	712,366	0.71	0.08	0.84
ノガイイ人	36,256	0.04	0.001	0.04
ジブシイ人	40,948	0.04	0.05	0.04
カルムイク人	129,200	0.13	0.01	0.15

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

一三三

(別表第三) ソ連邦各加盟共和国及自治共和国  
の民族別人口構成表〔其4〕

共和国州及ビ民族ノ名稱	總人口	各共和国又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
内譯 キルギーズ人	661,238	66.58	4.59	75.19
ロシヤ人	116,436	11.73	37.22	8.18
ウズベク人	109,776	11.05	42.72	6.66
ウクライナ人	64,128	6.46	3.18	6.91
(ト) クリミヤ自治共和国	713,823	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	301,398	42.22	54.60	31.56
タタール人	179,094	25.09	11.73	36.59
ウクライナ人	77,405	10.85	8.64	12.74
獨逸人	43,631	6.11	1.30	10.25
猶太人	39,921	5.59	10.85	1.06
(チ) 沿ヴォルガ獨逸人自治共和国	571,754	100.00	100.00	100.00
内譯 獨逸人	379,630	66.40	45.69	69.44
ロシヤ人	116,561	20.39	34.29	18.35
ウクライナ人	68,561	11.29	18.47	11.04
(リ) タタール自治共和国	2,594,032	100.00	100.00	100.00
内譯 タタール人	1,164,342	44.88	22.75	47.52
ロシヤ人	1,118,834	43.13	71.64	39.53
チュワシ人	127,330	4.91	0.53	5.44
タリヤシエン人	99,041	3.82	0.47	4.22
モルドワ人	35,084	1.35	0.18	1.49
(ヌ) チュワシ自治共和国	894,479	100.00	100.00	100.00
内譯 チュワシ人	667,695	74.65	1.10	78.03
ロシヤ人	178,890	20.00	8.57	16.50

(別表第三) ソ連邦各加盟共和国及自治共和国  
の民族別人口構成表〔其3〕

共和国、州及ビ民族ノ名稱	總人口	各共和国又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
内譯 ゴーレツ(山地)人	508,578	64.53	8.28	71.33
アワール人	138,749	17.61	2.37	19.45
ダルギン人	108,926	13.82	1.05	15.37
レズギン人	90,509	11.48	2.48	12.57
ラク人	39,878	5.06	1.38	5.51
タバサラン人	31,915	4.05	0.04	4.53
ロシヤ人	98,197	12.46	38.90	9.26
クムイク人	87,960	11.16	7.70	11.58
ノガイ人	26,086	3.31	0.04	3.71
(ニ) カザーク自治共和国	6,503,006	100.00	100.00	100.00
内譯 カザーク人	3,713,394	57.10	14.38	60.96
ロシヤ人	1,279,979	19.68	52.62	16.70
ウクライナ人	860,822	13.24	5.89	13.90
ウズベク人	213,498	3.28	10.81	2.60
カラカルバク人	118,184	1.82	0.75	1.91
タタール人	80,642	1.24	8.90	0.55
タランチ人	51,803	0.80	1.94	0.69
獨逸人	51,102	0.79	0.51	0.81
モルドワ人	27,244	0.42	0.24	0.44
白ロシヤ人	25,614	0.39	0.94	0.34
(ホ) カルリヤ自治共和国	269,734	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	153,967	57.08	86.66	48.43
カレリヤ人	100,781	37.37	7.79	46.01
(ヘ) キルギーズ自治共和国	993,004	100.00	100.00	100.00



(別表第三) ソ連邦各加盟共和国及自治共和国  
の民族別人口構成表 [其6]

共和国州及び民族ノ名稱	總人口	各共和国又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
内譯 チェルケス人	50,821	44.78	—	44.78
ロシヤ人	29,102	25.64	—	25.64
ウクライナ人	26,405	23.27	—	23.27
(B) イングーシ自治州	75,133	100.00	100.00	100.00
内 イングーシ人	69,930	93.07	62.84	93.60
(C) カバルヂン・バルカル自治州	204,006	100.00	100.00	100.00
内譯 カバルヂン人	122,402	60.00	6.72	65.59
バルカル人	33,197	16.27	0.27	17.19
(D) カラチヤイ自治州	64,613	100.00	—	100.00
内 カラチヤイ人	52,503	81.26	—	81.26
(E) 北オセチヤ自治州	152,435	100.00	100.00	100.00
内 オセチン人	128,321	84.18	23.92	84.83
(F) チェルケス自治州	36,996	100.00	—	100.00
内譯 カバルヂン人	12,314	33.29	—	33.29
ベスケセク・アバズ人	10,993	29.71	—	29.71
(G) チェチエン自治州	309,860	100.00	100.00	100.00
内 チェチエン人	291,259	94.00	2.35	94.89
<b>2 ウクライナ共和国</b>	<b>29,018,187</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>
内譯 ロシヤ人	2,677,166	9.23	25.01	5.64
ウクライナ人	23,218,860	80.02	47.20	87.47
白ロシヤ人	75,842	0.26	0.69	0.17
ポーランド人	476,435	1.64	1.84	1.60
ブルガリヤ人	92,078	0.32	0.07	0.37
獨逸人	393,924	1.36	0.64	1.52
モルダヴィヤ人	257,794	0.89	0.21	1.04
希臘人	104,666	0.36	0.20	0.40
猶太人	1,574,391	5.43	22.68	1.51

第三章 ソ連邦加盟各共和国別民族分布の概観

(別表第三) ソ連邦各加盟共和国及自治共和国  
の民族別人口構成表 [其5]

共和国、州及び民族ノ名稱	總人口	各共和国又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
(ル) ヤタート自治共和国	289,085	100.00	100.00	100.00
内譯 ヤタート人	235,926	81.61	32.55	84.35
ロシヤ人	30,156	10.43	53.70	8.02
(ヲ) ヂオチヤーク自治州	756,264	100.00	100.00	100.00
内譯 ヂオチヤーク人	395,607	52.31	0.39	57.80
ロシヤ人	327,493	43.30	89.75	38.03
(ワ) カルムイク自治州	141,594	100.00	—	100.00
内、カルムイク人	107,026	75.59	—	75.59
(カ) カラカルバク自治州	304,541	100.00	100.00	100.00
内譯 カラカルバク人	116,125	38.13	23.39	39.32
カザーク人	85,782	28.17	21.22	28.59
ウズベク人	84,099	27.61	28.99	27.53
(ヨ) コミ自治州	207,314	100.00	100.00	100.00
内 ズイリヤン人	191,245	92.25	52.86	93.58
(タ) マリイ自治州	482,101	100.00	100.00	100.00
内譯 マリイ人	247,979	51.44	0.65	53.38
ロシヤ人	210,016	43.57	89.85	41.56
(レ) オイラート自治州	99,667	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	51,812	51.99	80.21	50.28
アルタイ人	35,601	35.72	0.39	37.86
(ソ) 北カフカズ地方ノ自治州 (A) アドウイゲイ・チェルケス自治州	113,481	100.00	—	100.00

第三章 ソ連邦加盟各共和国別民族分布の概観

(別表第三) ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國  
の民族別人口構成表〔其8〕

共和國州及び民族ノ名稱	總人口	各共和國又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
アルメニヤ人	282,004	12.18	15.90	10.73
ロシヤ人	220,545	9.53	27.12	2.06
タルイシ人	77,323	3.34	0.04	4.63
クルド人	41,193	1.78	0.04	2.46
レズキン人	37,263	1.61	0.78	1.93
タート人	28,443	1.23	1.10	1.28
(A) ナヒチェワン自治共和國	104,909	100.00	100.00	100.00
内 トルコ人	88,433	84.57	77.49	85.64
(B) ナゴルヌイ・カラバフ自治州	125,300	100.00	100.00	100.00
内 アルメニヤ人	111,634	89.24	34.37	93.09
(ロ) アルメニヤ共和國	880,464	100.00	100.00	100.00
内譯 アルメニヤ人	743,571	84.05	89.28	83.32
トルコ人	76,870	8.69	3.44	9.97
(ハ) グルジヤ共和國	2,666,494	100.00	100.00	100.00
内譯 グルジヤ人	1,788,186	67.06	48.26	72.45
内 { アツジャル人	71,390	2.68	0.48	3.31
{ メグレール人	242,289	9.06	1.82	11.17
アルメニヤ人	307,018	11.51	25.17	7.60
トルコ人	197,921	7.42	1.11	6.34
オセチン人	113,298	4.25	0.85	5.22
ロシヤ人	96,085	3.60	11.85	1.24
アブハズ人	56,847	2.13	0.43	2.62
希臘人	54,051	2.03	1.49	2.18
(A) アブハズ自治共和國	201,016	100.00	100.00	100.00
内譯 グルジヤ人	67,494	33.58	26.20	31.99

(別表第三) ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國  
の民族別人口構成表〔其7〕

共和國州及び民族ノ名稱	總人口	各共和國又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
モルダヴィヤ自治共和國	572,339	100.00	100.00	100.00
内譯 ウクライナ人	277,515	48.51	35.75	50.63
モルダヴィヤ人	172,419	30.14	7.56	33.92
ロシヤ人	48,868	8.54	23.33	6.05
猶太人	48,564	8.49	30.47	4.79
3 白ロシヤ共和國	4,983,240	100.00	100.00	100.00
内譯 ロシヤ人	383,806	7.70	15.59	6.08
白ロシヤ人	4,017,301	80.62	39.26	89.09
ポーランド人	97,498	1.93	2.32	1.88
猶太人	407,059	8.17	40.12	1.62
4 後カフカズ共和國	5,861,529	100.00	100.00	100.00
内譯 グルジヤ人	1,797,960	30.67	20.60	33.87
内 { アツジャル人	71,399	1.22	0.20	1.54
{ メグレール人	242,329	4.13	0.77	5.20
トルコ人	1,652,768	28.20	18.18	31.37
アルメニヤ人	1,332,593	22.73	28.49	20.91
ロシヤ人	336,178	5.74	17.75	1.93
オセチン人	114,450	1.95	0.44	2.43
アブハズ人	56,851	0.97	0.18	1.22
タルイシ人	77,323	1.32	0.02	1.73
希臘人	57,935	0.99	0.81	1.04
クルド人	52,173	0.89	0.10	1.14
レズギン人	40,709	0.69	0.39	0.79
(イ) アゼルバイジャン共和國	2,314,571	100.00	100.00	100.00
内譯 トルコ人	1,437,977	62.13	37.59	71.70

(別表第三) ソ聯邦各加盟共和國及自治共和國の民族別人口構成表〔其9〕

共和國州及び民族ノ名稱	總人口	各共和國又ハ州ノ總人口ニ對スル百分比		
		全體ノ人口	都市人口	農村人口
内メグレル人	40,989	20.39	14.12	21.59
アブハズ人	55,918	27.82	6.40	31.91
アルメニヤ人	25,677	12.77	8.29	13.61
(B) アツジャル自治共和國	131,957	100.00	100.00	100.00
グルジャ人	90,314	68.44	38.08	87.19
内アツジャル人	70,828	53.67	5.54	83.40
(C) 南オセチヤ自治州	87,375	100.00	100.00	100.00
オセチン人	60,351	69.06	19.80	72.59
<b>5 ウズベク共和國</b>	<b>5,272,808</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>
内譯ウズベク人	3,475,340	65.91	55.26	68.72
タヂク人	967,728	18.35	13.60	19.63
ロシヤ人	246,521	4.68	18.93	0.91
カザーク人	106,980	2.03	0.24	2.50
キルギーズ人	90,743	1.72	0.18	2.13
クラマ人	50,078	0.95	0.01	1.20
(イ) タチク共和國	827,167	100.00	100.00	100.00
内譯タヂク人	617,125	74.60	73.40	74.66
ウズベク人	175,627	21.23	10.04	21.80
<b>6 トウルクメン共和國</b>	<b>1,000,914</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>	<b>100.00</b>
内譯トウルクメン人	719,792	71.91	7.15	82.18
ウズベク人	104,971	10.49	6.19	11.17
ロシヤ人	75,353	7.53	46.70	1.32
波斯人	—	—	—	—

二、ウクライナ共和國 (人口二九、〇一八、一八七)

ウクライナ人……………八〇・〇二%

ロシヤ人……………九・二三%

猶太人……………五・四三%

ポーランド人……………一・六四%

獨逸人……………一・三六%

その他諸民族合計……………二・三二%

非ウクライナ民族 合計 一九・九八%

三、白ロシヤ共和國 (人口四、九八三、二四〇)

白ロシヤ人……………八〇・六二%

猶太人……………八・一七%

ロシヤ人……………七・七〇%

ポーランド人……………一・〇三%

その他諸民族合計……………二・四八%

非白ロシヤ民族 合計 一九・三八%

四、後カウカサス聯邦共和國 (三共和國より成る)

A アゼルバイジャン共和國 (人口二、三二四、五七二)

トルコ人……………六二・一三%

アルメニヤ人……………一二・一八%

ロシヤ人……………九・五三%

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

タルイシ人	三・三四%	非トルコ民族 合計	三七・八七%
クルド人	一・七八%		
レズギン人	一・六一%		
タート人	一・二三%		
その他諸民族合計	八・二〇%		
B アルメニヤ共和国 (人口八八〇、四六四)			
アルメニヤ人	八四・〇五%	非アルメニヤ民族 合計	一五・九五%
トルコ人	八・六九%		
その他諸民族合計	七・二六%		
C グルジャ共和国 (人口二、六六六、四九四)			
グルジャ人	六七・〇六%	非グルジャ民族 合計	三二・九四%
アルメニヤ人	一一・五一%		
トルコ人	五・一七%		
オセチン人	四・二五%		
ロシヤ人	三・六〇%		
アブハズ人	二・一三%		
希臘人	二・〇三%		
その他諸民族合計	四・二五%		

五、ウズベク共和国 (人口五、二七二、八〇一)

ウズベク人	六五・九一%	非ウズベク民族 合計	三四・〇九%	
タヂク人	一八・三五%			
ロシヤ人	四・六八%			
カザーク人	二・〇三%			
キルギズ人	一・七二%			
その他諸民族合計	七・三二%			
六、トウルクメン共和国 (人口一、〇〇〇、九一四)				
トウルクメン人	七一・九一%		非トウルクメン民族 合計	二八・〇九%
ウズベク人	一〇・四九%			
ロシヤ人	七・五三%			
その他諸民族合計	一〇・〇七%			

一九二六年當時ソ聯邦を形づくつてゐた六つの加盟共和国内における民族別人口構成の概要は以上の如くである。これを更に要約して各共和国毎に「基本民族」と「民族的少数派」との比率を示せば次の通りである。

共和国名	基本民族	民族的少数派	共和国名	基本民族	民族的少数派
ロシヤ共和国	七三・四二%	二六・五八%	白ロシヤ共和国 (カウカサス聯邦共和国)	八〇・六二%	一九・三八%
ウクライナ共和国	八〇・〇二%	一九・九八%	アゼルバイジャン共和国	六二・一三%	三七・八七%

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

アルメニア共和国	八四・〇五%	一五・九五%	ウズベク共和国	六五・九一%	三四・〇九%
グルジア共和国	六七・〇六%	三二・九四%	トゥルクメン共和国	七一・九一%	二八・〇九%

この表を見ればわかるやうにソ聯邦を構成する諸共和国において、「基本民族」は最小六二%から最大八四%といふ歴史的多数を占めてゐるのであるが、「民族的少数派」の比率も最小一六%から、最大三八%に及び、絶対数からいつても相当多いのである。即ち、ロシア共和国約二千六百八十萬、ウクライナ共和国約五百八十萬、白ロシア共和国約九十七萬、アゼルバイジャン共和国約八十八萬、アルメニア共和国約十四萬、グルジャ共和国約八十八萬、ウズベク共和国約百八十萬、トゥルクメン共和国約二十八萬といふことになる。尤も、若干の共和国内には色々な「民族的」自治共和国、自治州及び特別の「民族管區」があつて、少數諸民族はある程度の「民族自治」を享有してゐるのであるから、以上の數字を一括して「民族的少数派」の烙印をおしてしまふのはいさゝか妥當でないかも知れぬ。事實、それ以後において、タヂク共和国がウズベク共和国から分離してゐるし、カザーク自治共和国、キルギーズ自治共和国は新憲法によつてそれ、カザーク共和国、キルギーズ共和国に「登格」し、ロシア共和国から分離してゐるし、自治州から自治共和国に上つたものも少くないのである。

そこで我々は「別表第三」を利用して各自治共和国及び自治州の民族別人口構成を一瞥することにしよう。

- 一、ロシア共和国
- (1) バシキール自治共和国 (人口二、六六五、八三六)
- バシキール人……………二三・四八%
- ロシア人……………三九・九四%
- タタール人……………一七・三三%

ミシヤリ人……………五・一〇%	非バシキール民族 合計	七六・五二%
チュウシ人……………三・一八%		
マリイ人……………二・九七%		
ウクライナ人……………二・八八%		
モルドワ人……………一・八七%		

- その他諸民族……………三・二五%
- (2) プリヤート蒙古自治共和国 (人口四九一、一三三六)
- プリヤート人……………四三・七六%
- ロシア人……………五二・六八%

その他諸民族……………三・五六%	非プリヤート民族 合計	五六・二四%
------------------	-------------	--------

- (3) ダゲスタン自治共和国 (人口七八八、〇九八)
- 山地諸族……………六四・五三%

ア、ワ、ル 人……………一七・六一%	
ダ、ル、ギ、ン 人……………一三・八二%	
内 レ、ズ、ギ、ン 人……………一一・四八%	
ラ、ー、ク 人……………五・〇六%	
タ、バ、サ、ラ、ン 人……………四・〇五%	
ロ、シ、ヤ 人……………二・四六%	

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

クムイク人	.....	一一・一六%	非山地民族 合計	三五・四七%
ノガイ人	.....	三・三一%		
その他諸民族合計	.....	八・五四%		
(4) カザーク自治共和国 <sup>(註一)</sup> (人口六、五〇三、〇〇六)				
カザーク人	.....	五七・一〇%	非カザーク民族 合計	四二・九〇%
ロシヤ人	.....	一九・六八%		
ウクライナ人	.....	一三・二四%		
ウズベク人	.....	三・二八%		
カラカルバク人	.....	一・八二%		
タタール人	.....	一・二四%		
その他諸民族合計	.....	三・六四%		
(5) カレリヤ自治共和国 (人口二六九、七三四)				
カレリヤ人	.....	三七・三七%	非カレリヤ民族 合計	六二・六三%
ロシヤ人	.....	五七・〇八%		
その他諸民族合計	.....	五・五五%		
(6) キルギーズ自治共和国 <sup>(註一)</sup> (人口九九三、〇〇四)				
キルギーズ人	.....	六六・五八%	非キルギーズ民族 合計	三三・四二%
ロシヤ人	.....	一一・七三%		

ウズベク人	.....	一一・〇五%	非キルギーズ民族 合計	三三・四二%
ウクライナ人	.....	六・四六%		
その他諸民族合計	.....	四・一八%		
(7) クリミヤ自治共和国 (人口七一三、八二三)				
クリミヤ・タタール人	.....	二五・〇九%	非タタール民族 合計	七四・九一%
ロシヤ人	.....	四二・二二%		
ウクライナ人	.....	一〇・八五%		
獨逸人	.....	六・一一%		
猶太人	.....	五・五九%		
その他諸民族合計	.....	一〇・一四%		
(8) 沿ウオルカ獨逸人自治共和国 (人口五七一、七五四)				
獨逸人	.....	六六・四〇%	非獨逸民族 合計	三三・六〇%
ロシヤ人	.....	二〇・三九%		
ウクライナ人	.....	一一・二九%		
その他諸民族合計	.....	一・九二%		
(9) タタール自治共和国 (人口一、一六四、三四二)				
タタール人	.....	四四・八八%	非タタール民族 合計	三三・六〇%
ロシヤ人	.....	四三・一三%		

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

チユワシ人	四・九一〇%	非タートル民族	合計	五五・二二%
クリヤシニシ人	三・八二%			
モルドワ人	一・三五%			
その他の諸民族	一・九一%			
(10) チユワシ自治共和国 (人口八九四、四七九)	七四・六五%			
チユワシ人	二〇・〇〇%	非チユワシ民族	合計	二五・三五%
その他の諸民族	五・三五%			
(11) ヤクート自治共和国 (人口二八九、〇八五)	八一・六一%			
ヤクート人	一〇・四三%	非ヤクート民族	合計	一八・三九%
ロシヤ人	七・九六%			
その他の諸民族合計	五二・三一%			
(12) ヴオチャーク自治州 (人口七五六、二六四)	四三・三〇%	非ヴオチャーク諸民族	合計	四七・六九%
ヴオチャーク人	四・三九%			
ロシヤ人	六・〇九%			
その他の諸民族合計	二四・四一%			
(13) カルムイク自治州 (人口一四一、五九四)	三・七五%			
カルムイク人	七五・五九%			

その他の諸民族合計	二四・四一%			
(14) カラカルバク自治州 (人口三〇四、五四一)	三八・一三%	非カラカルバク民族	合計	六一・八七%
カラカルバク人	二八・一七%			
カザーク人	二七・六一%			
ウズベク人	六・〇九%			
その他の諸民族合計	九二・二五%			
(15) コーミ自治州 (人口二〇七、三二四)	七・七五%	非マリエイ民族	合計	四八・五六%
コーミ(ズイリヤン)人	四・九九%			
その他の諸民族合計	五・四四%			
(16) マリエイ自治州 (人口四八二、一〇一)	四・九九%			
マリエイ人	三五・七二%			
ロシヤ人	五・九九%			
その他の諸民族合計	一一・二九%	非オイロト民族	合計	六四・二八%
(17) オイロト自治州 (人口九九、六六七)				
オイロト(アルタイ)人				
ロシヤ人				
その他の諸民族合計				
北カウカサス地方の諸自治州 (七つ)				

(18) アドイゲイ・チエルケス自治州 (人口一、一三、四八一)	チエルケス人	四四・七八%	非チエルケス民族	合計	五五・二二%
	ロシヤ人	二五・六四%			
	ウクライナ人	一三・二七%			
	その他諸民族合計	六・三一%			
(19) イングーシ自治州 (注二) (人口七五、一三三)	イングーシ人	九三・〇七%			
	その他諸民族合計	六・九三%			
(20) カバルチン・バルカル自治州 (注二) (人口二〇四、〇〇六)	カバルチン人	六〇・〇〇%	非カバルチン民族	合計	四〇%
	バルカル人	一六・二七%			
	その他諸民族合計	二三・七三%			
(21) カラチャイ自治州 (人口六四、六一三)	カラチャイ人	八一・二六%			
	その他諸民族合計	一八・七四%			
(22) 北オセチヤ自治州 (注二) (人口一五二、四三五)	オセチン人	八四・一八%			
	その他諸民族合計	一五・八二%			

(23) チエルケス自治州 (人口三六、九九六)	チエルケス人	約三七・〇〇%	非チエルケス民族	合計	六三%
	カバルチン人	三三・二九%			
	その他諸民族合計	二九・七一%			
(24) チエチエン自治州 (注二) (人口三〇九、八六〇)	チエチエン人	九四・〇〇%			
	その他諸民族合計	六・〇〇%			

二、ウクライナ共和国

(25) モルダヴィヤ自治共和国 (人口五七二、三三九)	モルダヴィヤ人	三〇・一四%	非モルダヴィヤ民族	合計	六九・八六%
	ウクライナ人	四八・五一%			
	ロシヤ人	八・五四%			
	猶太人	八・四九%			
	その他諸民族合計	四・三二%			

三、後カウカサス聯邦共和国

(26) ナヒチエワン自治共和国 (人口一〇四、九〇九)	トルコ人	八四・五七%
	その他諸民族合計	一五・四三%



(27) 山地カラバフ自治州 (人口一二五、三〇〇)	アルメニヤ人	八九・二四%	
その他諸民族合計		一〇・七六%	
(28) アブハズ自治共和国 (人口二〇一、〇一六)	アブハズ人	二七・八二%	
グルジャ人	三三・五八%		
メグレ人	二〇・三九%		
アルメニヤ人	一二・七七%		
その他諸民族合計		五・四四%	
(29) アツジャル自治共和国 (人口一三一、九五七)	アツジャル人	五三・六七%	
その他諸民族合計		四六・三三%	
(30) 南オセチヤ自治州 (人口八七、三七五)	オセチン人	六九・〇六%	
その他諸民族合計		三〇・九四%	
四、ウズベク共和国			
(31) タチクスタン <sup>(註二)</sup> (人口八二七、一六七)	タチク人	七四・六〇%	
ウズベク人	二一・二三%		
その他諸民族合計		四・一七%	
非タチク民族 合計		二五・四〇%	
非アブハズ民族 合計		七二・一八%	

(註一) 現在は「加盟共和国」となつてゐる。

(註二) 現在は「自治共和国」となつてゐる。その他一九三〇年には中ヴォルガ地方モルドワ管區がモルドワ自治州となり、三四年にはモルドワ自治共和国となつた。人口構成はモルドワ人約三七・四%、ロシヤ人五七・四%、その他約五・二%であるから、これも後述のB群に屬することになる。

以上、一九二六年當時のソ聯邦における「民族的」自治共和国及び自治州の人口構成を一通り表示したことになるが、ここで注意すべきは「基本民族」「民族自治」の最も主要な擔當者としての特定民族の意が如何なる比率を占めてゐるかの問題である。極く大まかに分類すればA群——「基本民族」が絶對多數(五〇%以上)を占めてゐる自治共和国或ひは自治州と、B群——「基本民族」が五〇%に充たない自治共和国及び自治州とに大別することができる。實際問題の見地から、この種の分類は興味少しとしない。

A群 (括弧内の数字は全人口に對する「基本民族」の比率) ダゲスタン自治共和国(六四・五三%)、カザーク自治共和国(五七・一%)、キルギズ自治共和国(六六・五八%)、沿ヴォルガ獨逸人自治共和国(六六・四%)、チュワシ自治共和国(七四・六五%)、ヤクート自治共和国(八一・六一%)、ヴォチヤーク自治州(五二・三一%)、カルムイク自治州(七五・五九%)、コーミ自治州(九二・二五%)、マリイ自治州(五一・四四%)、インダトシ自治州(九三・〇七%)、カバルデン・バルカル自治州(六〇%)、カラチャイ自治州(八一・二六%)、北オセチヤ自治州(八四・一八%)、チュチェン自治州(九四%)、ナヒチェワン自治共和国(八四・五七%)、山地カラバフ自治州(八九・二四%)、アツジャル自治共和国(五三・六七%)、南オセチヤ自治州(六九・〇六%)、タチクスタン(七四・六%)。

B群 (括弧内の数字は全人口に對する「基本民族」の比率)バシキール自治共和國(二三・四八%)、ブリヤート蒙古自治共和國(四三・七六%)、カレリヤ自治共和國(三七・三七%)、クリミア自治共和國(二五・〇九%)、タタール自治共和國(四四・八八%)、カラカルバク自治州(三八・一三%)、オイロート自治州(三五・七二%)、アディゲイ・チェルクス自治州(四四・七八%)、チェルクス自治州(三七・八二%)。それ以後、自治共和國から共和國に、自治州から自治共和國に「登格」したものは傍點を附しておいたが、唯一つの例外(B群のカラカルバク自治州)を除けば、それらは悉くA群に屬してゐることに注目すべきであらう。この場合基本民族の人口及びその比率が大いに物を云つてゐるのである。

B群の中には「基本民族」がその人口比率において、他の民族に壓倒されてゐるものが少くない。即ち、バシキール自治共和國においてはバシキール人(約二三・五%)はロシア人(約四〇%)より遙かに少数であり、ブリヤート蒙古自治共和國のブリヤート人(約四三・八%)もロシア人(約五二・八%)に壓されてゐる。カレリヤ自治共和國ではロシア人の比率がカレリヤ人よりも二〇%多いし、クリミア自治共和國でも、クリミア・タタール人(約二五%)はロシア人(約四二・二%)と比較にならない程少数である。オイロート自治州も全く同様であり、モルダヴィヤ自治共和國においてはウクライナ人(約四八・五%)がモルダヴィヤ人(約三〇%)を押へてゐる。最後に、アブハズ自治共和國では、アブハズ人(約二七・八%)はグルジャ人(約三三・六%)より少数である。このやうな状態が「民族的」自治共和國あるひは自治州の意義を多かれ少なかれ削減することは容易に想像される所である。これらの「基本民族」が實質的に見て「民族的少数派」に過ぎないことは述べるまでもなからう。「民族同化」問題の見地からみてもこれは興味ある現象だと思ふ。

次に、ソ聯邦の諸民族中には、猶太人、ポーランド人、レット(ラトヴィヤ)人、リトワニヤ人、フィンランド人、ウイグル人、ジプシイ等々の如く、特定の民族地域を有せず全国各地に細かく分散してゐるものもあるが、古くから一定の地

域に固着してあまり動かない諸民族が著しく多いことは云ふまでもない。各々の民族人口の中何パーセントが自民族の共和國あるひは自治州に住んでゐるか、つまり各民族の民族地域における「集中率」を調べてみるのも面白いと思ふ。

ソ聯側の資料によれば、上述の猶太人等々の「民族的グループ」を除外した残り四十の主要民族は次表の如き「集中率」を示してゐる。

民族	各民族人口の中、自民族の共和國 或ひは自治州に住むものの百分比	「民族」共和國及び自治州名
ダダルギン人	九九・九七%	ダゲスタン自治共和國
タバサラン人	九九・七九	同右
バルカル人	九九・六七	カバルチン・バルカル自治州
アツジャル人	九九・一六	アツジャル自治共和國
ラトクヤ人	九八・七六	ダゲスタン自治共和國
グルジャ人	九八・一九	グルジャ共和國
アブハズ人	九八・一八	アブハズ自治共和國
ヤクタイ人	九八・〇一	ヤクタイ自治共和國
カラチヤイ人	九五・二五	カラチヤイ自治州
イングーシ人	九四・三八	イングーシ自治州
トゥルクメン人	九四・二二	トゥルクメン共和國
カザク人	九三・五八	カザク自治共和國
クムイク人	九三・〇三	ダゲスタン自治共和國
ブリヤート人	九〇・五〇	ブリヤート蒙古自治共和國

モ	タ	チ	レ	オ	ノ	ウ	ヴ	カ	カ	ズ	ウ	白	ト	キ	ア	カ	オ	バ	ロ
ル	チ	エ	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ダ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
グ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
オ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
チ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
レ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
オ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ノ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ウ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ヴ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
カ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
カ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ズ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ウ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
白	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ト	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
キ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
ア	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
カ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
オ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
バ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
シ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
シ	エ	ル	ズ	セ	ガ	ク	イ	ラ	ル	イ	ズ	ロ	ル	ル	ワ	バ	イ	シ	シ
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
八八・三六	九五・二二	八七・七六	八七・六九	八七・四八	八七・三九	八六・六九	八六・一三	八四・七七	八四・五〇	八四・四八	八二・七六	七九・三七	七八・四六	七四・四三	七一・九一	六九・三〇	六七・二八	六四・二五	六三・〇六
自治共和國を除くロシア共和國	自治共和國を含むロシア共和國	バシキール自治共和國	オイロト自治州	カバルヂン・バルカル自治州	ダゲスタン自治共和國	キルギーズ自治共和國	アゼルバイジャン共和國及びダゲスタン自治共和國	白ロシア共和國	ウズベタ共和國	コーミ自治州	カルムイク自治州	カラカルバク自治州	ゾチヤーク自治州	ウクライナ共和國	ダゲスタン自治共和國	北部及び南部オセチヤ州	ダゲスタン自治共和國	アディゲイ・チェルケス自治州	タヂク共和國(當時のタヂクスタン。ホツジエント管區を除く)
六二・八二																			

チ	マ	ア	タ	カ	獨
ユ	リ	ル	ダ	レ	逸
ワ	メ	メ	レ	リ	人
シ	ニ	ニ	イ	ヤ	人
人	ヤ	ヤ	ル	ヤ	人
五九・七五	五七・九一	五四・五六	四六・〇六	四〇・六二	三〇・六五
チヌワシ自治共和國	マリイ自治州	アルメニヤ共和國及び山地カラバフ自治州	タタール及びクリミア自治共和國	カレリヤ自治共和國	沿ヴォルガ獨逸人自治共和國

(註) 「數字から見た全聯邦共產黨の民族政策」前掲五一頁。數字は一九二六年國勢調査資料によるものと思はれる。

右の表を要約すれば、ソ聯邦四十の主要民族の中各々の民族地域における集中率五割以上を占めるもの三十七、六割以上のもの三十四、七割以上のもの二十九、八割以上のもの二十五、九割以上のもの十四といふことになる。

逆にいへば、前表四十の主要民族の中で、獨逸人の六九・三五%、カレリヤ人の五九・三八%、タタール人の五三・九四%、アルメニヤ人の四五・四四%、マリイ人の四二・〇九%、チュウシ人の四〇・二五%、モルダヴィヤ人の三八・一八%、タヂク人の三六・九四%、チェルケス人の三五・七五%、レズギン人の三二・七二%、オセチン人の三〇・七%、ノガイ人の二八・〇九%、ウクライナ人の二五・五七%、ウオチヤーク人の二一・五四%、カラカルバク人の二〇・六三%……等々がソ聯邦において「民族的少數派」の地位にあることが分る。

### 第二節 「民族的少數派」の問題について

つひでながら、ソ聯邦における「民族的少數派」の問題について二、三述べてみたいと思ふ。

國內に雑多の諸民族を擁してゐた大戦前の埃洪國やロシア帝國にとつては、そこから當然に生じてくる色々な民族問題の

紛糾が政治的統一上の大きい「痛」となつてゐたことは周知の事實である。大戦後、ポーランド、フィンランド、ラトヴィヤ、エストニア、リトワニヤがロシアから獨立し、ハンガリヤ、チエコ・スロヴァキヤ、ユーゴスラヴィヤ等がオーストリアから獨立した結果ヨーロッパにおける「民族問題」は一應解決されたかに見えたが、事實はそれほど簡單ではなかつた。ヴェルサイユ、サンゼルマン等の平和條約に基いて獨立した多くの新國家は、有名な「民族自決」の建前によつて生れ出たものであるにも拘らず、その國內に多數の「民族的少數派」を包括する關係上、大戦後も民族的矛盾は跡を絶たず、「民族的少數派」の問題が、遂にはチエコ互解の有力な一因をなしたことは述べるまでもあるまい。

(註) ユーゴスラヴィヤ(人口約千二百六十五萬)の民族別人口構成。セルビヤ人一五二・二%、ホルワト人一二三・一%、スロヴェニヤ人一九・一%、獨逸人一四・二%、マヂヤル人一三・七%、アルバニヤ人一三・五%、ルーマニヤ人一〇・八%、その他一二・二%。  
 チエコ・スロヴァキヤ(人口約千四百十萬)の民族別人口構成。チェク人一四七・九%、スロヴァキヤ人一五・五%、獨逸人一三・八%、マヂヤル人一五・三%、ウクライナ人一三・五%、猶太人一二・五%、ポーランド人一〇・六%、その他一〇・九%。  
 ルーマニヤ(人口約千七百三十萬)の民族別人口構成。ルーマニヤ人一七三・四%、マヂヤル人一八・七%、猶太人一四・七%、獨逸人一四・三%、ウクライナ人一四・三%、トルコ人一・四%、ジプシー一・二%、ブルガリヤ人一〇・九%、その他一一・二%。  
 ポーランド(人口約二千八百八十八萬)の民族別人口構成。ポーランド人一六三・三%、ウクライナ人一五・五%、猶太人一〇・四%、白ロシア人及びロシア人一五・三%、獨逸人一三・八%、リトワニヤ人一〇・九%、その他一〇・八%。

〔數字から見た全聯邦共産黨の民族政策〕前掲二頁)人口の數字は少々古いやうだ。

ソ聯邦において、この問題はどういふ風に解決されてゐるであらうか。「民族的少數派」問題の重要性においては、ソ聯邦も決して例外ではあり得ない。むしろ、問題の最もやかましい國である。こゝでソヴェート政權の民族政策について詳しく述べるわけにはゆかないが、ヨーロッパ諸國や舊ロシアの苦い經驗をよく知つてゐるソ聯の爲政者が「民族的少數派」の問題に對して異常の注意を拂つてゐることは事實であり、それは、革命後今日に至るまでの間に、「民族的」加盟共和國及び自治共和國、自治州の數が著しく増加したといふ事實のうちにも反映されてゐる。云ふまでもなく共和國、自治共和國などの數が増加すれば、「民族的少數派」の數がそれだけ減少するわけである。加盟共和國十一、自治共和國二十二、自治州九、民族管區九といふソ聯邦の民族・地域的組織の複雑さには誰しも一驚するであらう。しかし、ソ聯邦が百餘の諸民族を包括することを知れば、この複雑さは、むしろ當然のこと、云はねばならぬ。

しかしながら、いくら國家機構を複雑化しても「民族的少數派」を無くすることは到底できるものではない。「多民族國家」としてのソ聯邦の悩みがこゝにあるのだ。それに就ては、巴里發行の『ソヴレメンヌイェ・ザピースキ』誌にラポボルトの面白い論説が載つてゐる。必要と思はれる部分だけの要旨を紹介すれば次の通りである。

(註) К. И. Панопри: Современное государство. "Современное Знание" 1938. LXVII

ロシアは多民族國家であり、民族問題は昔からきほめて重大性をもつてゐたにもかゝらず、帝政時代の政治思想は民族問題に關してはすこぶる幼稚であり、冷淡であつた。多民族國家存在の形態などいふことも餘り問題にならなかつたし、多少とも進歩的といはれる思想家ですら「自決」とか「諸民族の友誼的結合」とかいふ甚だ曖昧な、空漠たる理念を抱いてゐたに過ぎなかつた。二十世紀初頭において顯著となつた諸民族の遠心的傾向も、この状態を變へはしなかつた。ポーランド問題か、精々猶太人問題ぐるが、民族問題の全部であると考へられてゐた。一言にしていへば、帝政ロシアにおいては民族問題に關しては全くの無爲無策であつた。ソヴェート政權の時代になつてもこの「惰性」は容易に消えなかつた。コミニストは民族問題においては最小抵抗線に沿ふて、すこぶる安易な「解決」を試みた。彼等は過去百年間の革命運動の完遂者として、既に出来上つてゐる「處方箋」によつて民族問題の痼疾を一舉に治療しようとしたのである。そこで各民族を獨立的な國家的單位に分割する政策が極端にまで遂行せられ、複雑なることにおいて世界に比類のない、多階的な諸民族國家の聯邦がつけられたわけである。

複雑化は、それ自身缺陷ではなく、むしろ人爲的單純化よりも結構であらう。多階的な聯邦も民族問題を解決するための上乘の策であつたかも知れぬ。しかし、ソ聯邦といふ複雑な、多階的建築には二つの大きな弱點がある。第一に、この「建築」は非常に堂々たる外觀をもつてはゐるが、その莊嚴さも實際においては「空虚な裝飾」に過ぎない。つまり、それは自重の力によつて支へられてゐるのではなく、唯「獨裁」の支柱によつてのみ安固たり得る。支柱が一度崩壊すれば、その結果はどうなるか？各共和國間の紛争が、上からの指圖ではなく、相互の交渉によつて解決されねばならぬとしたら、一體どうなるであらうか？現在の國家機構から云へば、社會的、政治的、經濟的な色々の紛争が、民族的反目、軋轢に絡みあつて不吉な結果を招來するのは明かである。第二の弱點は、「民族的少數派」が非常に多いことである。そしてこの弱點は、ソ聯邦當局がいくら苦心しても除去することは困難であらう。

ラボボルトは右の如く前置して、ソ聯邦における「民族的少數派」に關する數字を引用してゐる。一九二六年國勢調査の資料によれば、ソ聯邦を構成する主要な民族の人口概數は次の如くである（ラボボルトはこの場合、言語別人口構成によつてゐるので、數字に多少の差異がある）。

ロシヤ人	八四・〇	百萬人	グルジャ人	一一・〇	百萬人
ウクライナ人	二八・〇		猶太人	二・〇	
トルコタール人	五・〇		アルメニヤ人	一・五	
カザーク及 キルギーズ人	五・〇		モルドワ人	一・二	
白ロシヤ人	三・〇		獨逸人	一・二	

この中「民族的少數派」がどれくらゐ居るかといふに、先づロシヤ人中、約一千二百二十萬が「民族的少數派」の地位にあり、その中約五百八十萬はロシヤ共和國内にはゐるが、「民族的」自治共和國及び自治州に住んでゐる。残りの中、約四百四十萬はウクライナに、百二十萬は白ロシヤに住んでゐる。

ウクライナ人の約四分の一強（八百萬）はウクライナ共和國以外の土地に住んでゐる。そしてウクライナ共和国の内部には約七百萬の非ウクライナ諸民族がゐる。

バシキール自治共和國及びタタール自治共和國では、それ／＼半數以上が非バシキール諸民族であり、非タタール諸民族である。バシキール人及びタタール人は他の地域に何十萬となく住んでゐる。

このやうに計算してゆくと、全ソ聯邦において、「民族的少數派」の數は二千九百九十萬といふ夥しい大きさに達することになる。（この數字は決してデタラメではない。ソ聯邦でもこの事實を認め、「本來の意味における民族的少數派は約三千萬、すなはちソ聯邦人口の二〇％に及び……………」云々と述べてゐる）

〔註〕「數字から見た全聯邦共産黨の民族政策」前掲三三頁。

ラボボルトはこの數字を、更に「國際的比較」において検討してゐるが、その概略を述べれば次の通りである。世界大戰後の平和條約によつてバルガン、中歐等々の十四小國內の「民族的少數派」に對しては「國際的保護」制が布かれることになつたのであるが、この「保護」は有名無實に近く、過去二十年間「民族的少數派」の苦情や紛争は跡を絶たず、今日では一つのカタストロフにまで達してゐる。前記十四國家の人口は合計約一億二千萬であり、そのうち「少數派」は約三千萬を占めてゐる。ソ聯邦においては、既述の如く、民族の「分割主義」がどし／＼と行はれ、人爲的な、ノルマルな條件からいへば「實際に即しない」國家や半國家が數多く成立したのであるが、民族問題の解決されてゐない部分（數字でいへば約三千萬）は、今なほヨーロッパ全體における民族問題の未解決部分に匹敵してゐるのである。總人口と民族的少數派の比率を

とつて見ても、ソ聯邦はヨーロッパの十四國に殆ど近い。もつてソ聯邦における「民族的少數派」問題の重大性を推知すべしといふのがラボポルトの言はんと欲するところである。

しからば、これ以上細かく民族地域を分割することは不可能であらうか？ラボポルトによれば、ロシアにおける諸民族分布の歴史的特性、つまり諸民族の自由な移動、混血、同化等々の關係から見ても、ソ聯邦住民を種族的、言語グループ別に、地域的に割然と分割する試みは「空しい努力に過ぎぬ」。一言にしていへば、ラボポルトはソヴェート政權の治下における民族問題の將來に對しては悲觀論に傾いてゐるやうである。勿論この種の説に對してはソヴェートの側から幾多の反駁を期待しうる。民族の「解放」及び「平等」を誇り、社會主義建設といふ共通の目標による諸民族の融和、協力を高く評價してゐるソヴェート側にとつては、「少數派」問題の如きも恐らく克服しえない困難とはみなされてゐないであらう。こゝでその當否を論斷することは容易でない。しかし、いづれにしても「少數派」問題はソ聯においても當面からしく看過できない政治問題だと考へるのが至當であらう。

この意味でラボポルトの指摘は決して的外れではない。しかしそこに若干の疑點が無いでもない。例へば先に述べた千何百萬かのロシア人を一括的に「民族的少數派」として片付けてしまふのはどうかと思はれる。なるほど自民族（ロシア人）の基本的地域以外に住むものが千何百萬に達することは動かしがたい事實であるし、それらが名目的に「民族的少數派」をなしてゐることを否定することはできない。しかし一般的にいって「民族的少數派」が現實に問題となるのは、主としてそれが政治的、經濟的或ひは文化的に「支配的民族」の壓迫を蒙り、民族の權利を抑制される場合のみである。これを逆にいへば民族の壓迫といふ事實から遊離して「民族的少數派」を論ずるのはおよそ無意味に近いともいへる。この見地からすれば、他民族の共和國或ひは自治共和國等々に住むロシア人の悉くに「少數派」の烙印をおしてしまふのは却て誤解を生じやすいことになる。なぜなら、ソ聯邦においては、何といつてもロシア民族が文化的に最も高度に進歩した民族であり、政治的

權利としての諸民族の平等は憲法によつて一應保障されてゐるとしても、事實上の文化的不平等がある限り、多くの場合ロシア民族は今なほ「支配的民族」といつて語弊があれば、少くとも「指導的民族」の地位を確保してゐるからである。<sup>(註)</sup>それは、植民地において「本國人」が「民族的少數派」の悲哀を感じないのと類似した點がある。従つて、政治問題としての「民族的少數派」問題を考察する場合には、ロシア人はむしろ第二義的にとり扱ふべきであらう。

(註) 多くの具體的實例の中から一つを挙げよう。ソヴェート聯邦憲法第三十五條によれば、ソ聯邦國家權力の最高機關たるソ聯邦最高ソヴェートの兩議院の中「民族ソヴェート（民族院）」は、聯邦加盟各共和國から代表二十五名宛、各自治共和國から代表五名宛、各民族管區から代表一名宛の割合をもつて、聯邦加盟各共和國、自治共和國、自治州、民族管區別にソ聯邦人民によつて選舉されることになつてゐるが、一九三七年末に行はれた第一回最高ソヴェート選舉の結果を調べてみると、民族院議員總數五七四名の中、ロシア人は、一四六名といふ想像外の多數が當選してゐるのである。

つひでながら、右選舉の結果、當選した民族院議員の民族別構成を示せば左の通りである。(便宜上三グループに分けた。A群は聯邦加盟各共和國を形成する諸民族であり、B群は自治共和國を、C群は自治州を形成する諸民族である。)

A群(加盟共和國の代議員割當數は二十五名)。

ロシア人—一四六名、ウクライナ人—三四名、白ロシア人—一五名、アゼルバイジャン人—三四名、グルジャ人—三三名、アルメニア人—三〇名、トウルクメン人—一七名、ウズベク人—二六名、タヂク人—一六名、カザーク人—二四名、キルギズ人—一七名。

B群(自治共和國の代議員割當數は十一名)。

タタール人—一五名、逸獨人—九名、カルムイク人—九名、ウドムルト人—七名、コミ人—八名、ブリヤート人—八名、マリイ人—六名、バシキル人—六名、ヤクート人—六名、チエチエン人—五名、モルドワ人—五名、カバルチン人—四名、カレリヤ人—四名、モルダヴィヤ人—五名、カラ・カルバク人—四名、チユウシ人—四名、オセチン人—九名、アブハズ人—五名、アツジャル人—一名、イングーシ人—一名、等。

第三章 ソ聯邦加盟各共和國別民族分布の概観

C 群(自治州の代議員割當数は五名)

チエルケス人一名、ハカース人一名、猶太人一名、オイロト人一名、カラチャイ人一名等々。

詳しくは第一回最高ソヴェート會議における資格審査委員會の報告(サドイク・ヌルベイソフ)参照のこと。民族院代議員の「民族別構成」は、ソ聯邦諸民族の政治的地位を測るための一つの尺度としてその興味深い資料である。

「指導的」民族としてのロシア人の役割は、それがソ聯邦のあらゆる隅々にまで分布してゐることによつて確保されてゐる。別表第三を見れば分るやうに、ロシア人は爾餘の諸民族の共和國、自治共和國において、次の比率を占めてゐるのである。ウクライナ共和國約九・二%、白ロシア共和國約七・七%、アゼルバイジャン共和國約九・五%、アルメニヤ共和國若干、グルジャ共和国約三・六%、ウズベク共和国約四・七%、トルクメニ共和国約七・五%、カザク共和国約一九・七%、キルギズ共和国約一一・七%、タヂク共和国若干。自治共和國では、バシキール自治共和國約三九・九%、ブリヤート蒙古自治共和國約五二・七%、ダゲスタン自治共和國約一一・五%、カレリヤ自治共和國約五七・一%、クリミア自治共和國約四二・二%、沿ヴォルガ獨逸人自治共和國約二〇・四%、タタール自治共和國約四三・一%、チェワシ自治共和國約二〇%、ヤクト自治共和國約一〇・五%、モルドワ自治共和國約五七・四%、モルダヴィヤ自治共和國八・五%、ウドムルト自治共和國(舊ウオチャーク自治州)四三・三%、マリイ自治共和國約四三・六%等々。注目すべきは、これらの諸共和國においてロシア人がそれ／＼都市人口の著しい比率を占めてゐるといふ事實である。

「民族的少數派」の問題からみて、もつとも注意を惹くのは、前節の末尾に挙げた色々な民族であるが、人口の絶對數からみて特に重要性をもつのは、ウクライナ人、獨逸人、タタール人、アルメニヤ人等々であらう。全ソ聯邦二百六十萬といふ多數の人口をもつ猶太人は、それ自身いかなる共和國をも有せず、極東地方の一角にある猶太人自治州(「ピロ・ビジャシ」)も、その住民は大部分ロシア人であつて、猶太人は僅々數萬に過ぎないありさまだ。民族間の反目・不和が今日に至るまでもつとも甚しかつたのは、おそらく南カウカサス(アゼルバイジャン、グルジャ、アルメニヤ等々)であらう。ウクライナ及びカウカサスは、あらゆる意味で、ソ聯邦における民族問題の二つの急所だといはねばならぬ。

### 第三節 加盟共和國人口及び人口構成の過去十二年間における變化

今までの叙述は主として一九二六年國勢調査の資料に基いたものであるが、最近一九三九年國勢調査の結果が一部分發表されてゐるから参考までに過去十二年間の各共和國人口の増加及び都市農村別人口構成の變化を示す一つの表を作成して次に掲げることとした。どの共和國においても農村人口に比して都市人口の増加率が著しく大きいのは、兩次の五ヶ年計畫期における「社會主義的」工業建設の發展を如實に反映するものとして注目に價する。

ソ聯邦加盟各共和國人口及び人口構成の變化(單位、千人)

共和國名	一九二六年十二月十七日現在		一九三三年一月一日現在		一九三八年二月十七日現在		一九三九年(對する比率%)	
	都市人口	農村人口	都市人口	農村人口	都市人口	農村人口	都市人口	農村人口
1、ロシア	一六、六五	七、六三	二七、二五	一〇、〇八	三六、六六	一〇、九三	三、八四	九、七
2、ウクライナ	五、四	三、六九	七、一五	三、七四	一〇、七五	三、〇八	三、〇八	八、五
3、白ロシア	八、四	四、一五	一〇、九	四、四九	一三、七	四、九四	一、六九	一〇、五
4、アゼルバイジャン	六、〇	一、六四	九、〇	二、九二	一三、一	三、〇〇	一、七	二、二七
5、グルジア	五、四	一、〇三	八、五	二、三三	一〇、七	三、四四	一、七五	二、八
6、アルメニヤ	一、七	七、四	三、四	八、五	一、〇	九、五	三、九	二、八
計	九、四	二、九	一三、七	四、一	一八、一	五、一	五、一	一四、一

ソ聯邦	二六三四	二七四四	二七四六	二八〇〇	二八四六	二八七九	二九〇〇	二九三七	二九四七	二九七九	三〇〇〇
7、トウルクメン	一三七	一八二	一九九	二四二	二〇四	二二九	二四六	二八六	二三四	二七三	二九六
8、ウズベク	一〇三	一五三	一八五	二〇一	二二七	二四八	二四六	二八七	二八三	二四八	二七三
9、タジク	一〇六	一五三	一八五	二〇一	二二七	二四八	二四六	二八七	二八三	二四八	二七三
10、カザク	一〇九	一五三	一八五	二〇一	二二七	二四八	二四六	二八七	二八三	二四八	二七三
11、キルギズ	一三三	一八九	二〇〇	二〇一	二〇〇	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一

(註) この表は現在の區劃によるものである。

一九二六年十二月十七日及び一九三九年一月十七日國勢調査の數字はイズヴェスチヤ紙(一九三九年六月二日)より引用。千人以下は筆者において四捨五入した。一九三三年一月一日現在推定人口は「社會主義の國・ソ聯邦」前掲二〇七—一〇九頁より引用した。

右の表は、過去十二年の間に諸共和國の民族別人口構成にも著しい變化の生じたことを推知せしめるに充分である。若干の推測を許されるならば、カザク、トルクメン、タジク、キルギズ等々の概して經濟的發展の遅れた「民度」の低い諸共和國において、都市人口の増加率が全ソ聯邦の都市人口増加率を著しく凌駕してゐるといふ事實は、工業發展にもとづき當該民族(主として農民、遊牧民)の「プロレタリア化」のみによつて説明されないであらう。恐らくロシア人その他の「先進」民族がこれらの國に相當入り込んだことを示すものではあるまいか。諸共和國都市人口及び農村人口におけるロシア人の比率が一九二六年のまゝであるとしても、ウクライナはじめ各共和國の全人口に對するロシア人の比率はかなり増大してゐる筈である。何となれば、いつれの共和國においても都市人口の増加率は農村人口の増加率を遙かに凌駕してゐるからである。

各民族人口の増加を推知するための一つの鍵として、少々古い資料ではあるが、一九二七年度の歐露諸民族人口の自然増加率を示す別表第四をこゝに掲げることにした。

(別表第四) 1927年度ソ聯歐領諸民族出生率及死亡率 (其1)

(1927年度戶籍登録課調査資料による)

「數字から見た全聯邦共産黨の民族政策」所載

民族別	共和國別	總人口		都市人口		農村人口				
		千人當り出生數	千人當り死亡數	自然増加	千人當り出生數	千人當り死亡數	自然増加			
ロシア人	ソ内 聯歐領全體	44.7	22.8	21.9	34.1	18.7	15.4	47.6	23.9	23.7
	ソ内 聯歐領全體	45.4	23.2	22.2	35.2	19.6	15.6	48.0	24.1	23.9
ウクライナ人	ソ内 聯歐領全體	41.3	17.8	23.5	33.0	14.3	18.7	42.3	18.2	24.1
	ソ内 ウクライナ共和國	42.7	18.9	23.8	36.4	15.9	20.5	43.4	19.2	24.2
白ロシア人	ソ内 聯歐領全體	43.3	15.8	27.5	33.7	14.6	19.1	44.4	15.9	28.5
	ソ内 白ロシア共和國	42.3	15.1	27.2	37.2	15.6	21.6	42.7	15.0	27.7
猶太人	ソ内 聯歐領全體	22.6	9.2	13.4	21.6	9.4	12.2	26.7	8.6	18.1
	ソ内 聯歐領全體	18.3	9.3	9.0	18.0	9.3	8.7	25.2	10.3	14.9
	ソ内 ウクライナ共和國	23.0	9.2	13.8	22.0	9.5	12.5	26.2	8.5	17.7
	ソ内 白ロシア共和國	26.4	9.1	17.3	25.6	9.2	16.4	30.3	8.6	21.7
獨逸人	ソ内 聯歐領全體	51.6	19.1	32.5	33.0	16.6	16.4	54.7	19.5	35.2
	ソ内 ウクライナ共和國	47.8	16.2	31.6	31.6	15.7	15.9	49.3	16.3	33.0
	沿ダオルガ獨逸人自治共和國	60.8	22.7	38.1	49.6	14.2	35.4	61.9	23.5	38.4
波蘭人	ソ内 聯歐領全體	35.7	15.6	20.1	24.1	13.6	10.5	41.4	16.6	24.8
	ソ内 ウクライナ共和國	39.4	16.9	22.5	30.4	30.5	29.9	41.9	17.3	24.6
	ソ内 白ロシア共和國	40.5	13.9	26.6	28.5	8.4	20.1	43.5	15.3	28.2
タタール人	タタール自治共和國	53.1	24.5	28.6	49.6	27.1	22.5	53.3	24.3	29.0
モルドワ人	ロシア共和國歐領	48.3	24.5	23.8	—	—	—	48.9	24.8	24.1
アルメニヤ人	アルメニヤ自治共和國	59.3	18.4	40.9	48.3	18.2	30.1	62.0	18.5	43.5
チユワシ人	チユワシ自治共和國	44.3	28.0	16.3	—	—	—	44.4	28.0	16.4



(別表第四) 1927年度ソ聯歐領諸民族出生率及死亡率 (其2)

(1927年度戸籍登録調査資料による)

「數字から見た全聯邦共産黨の民族政策」所載

民 族 別	共 和 國 別	總人口			都市人口			農村人口		
		千人 當り 出生 數	千人 當り 死亡 數	自然 増 加	千人 當り 出生 數	千人 當り 死亡 數	自然 増 加	千人 當り 出生 數	千人 當り 死亡 數	自然 増 加
バシキール人	バシキール自治共和國	39.7	14.5	25.2	—	—	—	40.0	14.6	25.4
ウオチヤク人	ヴオチヤク自治州	56.2	41.3	14.9	—	—	—	56.2	41.3	14.9
ベセルミヤン人	ウクライナ共和國	45.4	19.4	26.0	37.8	14.9	22.9	45.7	19.6	26.1
モルダヴィヤ人	ウクライナ共和國	45.4	19.4	26.0	37.8	14.9	22.9	45.7	19.6	26.1
マリイ人	マリイ自治州	53.5	41.2	12.3	—	—	—	53.7	41.2	12.5
ズイリヤン人	コミ自治州	47.2	34.5	12.7	—	—	—	47.2	34.5	12.7
ベルミヤク人	ロシア共和國歐領	52.5	34.7	17.8	—	—	—	52.7	35.0	17.7
フィンランド人	同上	35.6	24.8	10.8	—	—	—	37.3	25.0	12.3
カルムイク人	カルムイク自治州	31.3	15.0	16.3	—	—	—	31.3	15.0	16.3
希臘人	ウクライナ共和國	44.3	14.8	29.5	31.1	11.4	19.7	45.8	15.2	30.6
カレリヤ人	カレリヤ自治共和國	42.6	26.1	16.5	—	—	—	42.5	26.2	16.3
ブルガリヤ人	ウクライナ共和國	49.1	20.1	29.0	—	—	—	50.2	20.7	29.5
レット人	ロシア共和國歐領	21.5	13.2	8.3	—	—	—	26.5	13.1	13.4
トルコ人	アルメニヤ共和國	58.0	14.6	43.4	37.1	21.9	15.2	59.6	14.1	45.5
カザーク、キルギズ人	ロシア共和國歐領	40.3	18.3	22.0	—	—	—	39.0	16.2	22.8
ジブシイ人	同上	36.5	15.4	21.1	—	—	—	38.4	14.6	23.8

(註1) ウクライナ共和國を除く

(註2) 白ロシア共和國を除く

### 第四章 民族同化に關する若干の資料

ソ聯邦における諸民族の分布を調べるにあつて、尙またその民族問題の特性を考察するに當つて、民族の同化といふ一つの重要なモメントを無視することはできない。

古い時代から、ロシアにおいて諸種族・民族間の混血及び同化がさかに行はれたことは以前の章でも簡単に觸れた通りであるが、帝政ロシアにおける半ば強制的な「ロシア化政策」が民族同化の上に顯著な役割を演じたことは争へない。そしてこの政策が例へばウクライナ人等の相當「民度」の高い諸民族の間に由々しい問題をひき起したことも事實である。

十月革命によつて政權を獲得したボリシエヴィキは所謂レーニン主義的民族政策の立場から、帝政ロシアの「ロシア化政策」を清算すると共に、少数民族のブルジョアの民族主義を排撃し、民族の「同化」に代へるに民族の「インターナショナル化」を以てした。少数民族の文化的向上は、何よりも先づその民族自身の文化を尊重し、發揚せしめることから始められねばならぬ。しかしながら諸民族プロレタリアートの協力一致を阻害する民族主義的偏見に對しては斷乎と闘はねばならぬ。これがボリシエヴィキの見解であつた。少数民族の言語を尊重し、形式においては民族的な、内容においては社會主義的な「民族文化の向上をはかる」といふ政策は、本来の意味における同化政策とは全然趣を異にするゆきかたであつて、ボリシエヴィキ的民族政策の特長的一面だとみられてゐる。しかし、これは、あくまでも「原則」であり、いはば抽象的理論に過ぎないのであつて、實際の問題が口で言ふほどスムーズに解決されるわけのものではない。そこには幾多の迂餘曲折あるを免れないのである。事實、目に一丁なき遊牧民や蒙昧な回教徒など雑多な諸民族を包含するソ聯邦においては、少数民族文化の尊重といつても一定の限度がある。スターリンもそのことはよく辨へてゐて、「民族文化の尊重といふのは、何も

カウカサス・タタール人のシヤフセイ・ヴァフセイの提燈持ちをすることではない」といふやうな意味のことを述べてゐる。  
 (シヤフセイ・ヴァフセイといふのは回教徒の祭禮における掛聲のやうなものらしい。我國でいへば池上本門寺の御會式にやるお題目囃しのやうなものであらう。) スターリンのこの言葉は、少數民族政策のきはめてデリケートな性質をよく現してゐて、面白いと思ふ。

ソヴェート政權の民族政策やその功罪について、こゝでこれ以上詳しく述べるわけにはゆかないが、前章でも指摘しておいたやうに、ロシア人の役割が帝政時代の「支配的民族」からソヴェート時代の「指導的民族」に變つたとしても、ロシア人による後進的諸民族の同化といふ顯著な傾向にはいさゝかの變化もないのである。概していへば文化は水のやうに高きから低きに及んでゆくものである。文化的に進んだロシア人が遅れた諸民族をますゝ「同化」してゆくのはいはゞ自然の勢であつて、これをあながちレーニン・スターリンの民族政策に對する背反とみるのは「辯證法」的でなさすぎる。

革命後二十餘年にわたる民族同化の趨勢に關しては、まとまつた資料がほとんど無いといつていい。これから提供しようとする民族同化に關する若干の資料は、きはめて断片的ではあるが、舊ロシアから引續いておこなはれ來つた民族同化の一道標をなすものとして、一應の注目に價するものであらうと思ふ。

### 第一節 言語別人口構成からみた民族同化の諸結果

第二章において我々はソ聯邦に住むさまざまの民族の名を挙げた。そして各々の民族がそれ獨特の言語或は方言をもち、獨特の文字を用ひてゐることは前掲グランデ教授の「民族表」によつても明かである。しかし第二章第二節の「備考」欄においても指摘しておいたやうに、民族によつては永い歴史のあひだに部分的にその「民族性」を喪つたものも少くない。その原因は何かといへば、舊ロシアにおける諸民族の移動、同一地域における雑多な民族の混住、民族間の混血、文化の交流、

ロシア化政策」の強行など、色々とあけられる。一部の民族はかくて次第にその民族的獨自性が稀薄になり、言語のみならず、風俗、習慣に至るまで他民族に同化されていつたものもある。

この一節においては言語による民族同化の實際を調べてみよう。それに就いてはかなり面白い數字がある。

帝政時代(一八九七年國勢調査)より一九二六年に至るソ聯邦民族人口の變化 (一八九七年=一〇〇)

民族及び民族のグループ	民族	係	言語	關係
リトワニヤ人、ラットガル人		一三三〇・二		一三四・二
タル		一一八・三		二二八・三
レツト(ラトヴィヤ)		二〇八・二		一七〇・五
ジブ		一八八・八		一二九・九
タルド人及イエジド人		一八〇・〇		八八・八
オセチ		一五八・八		一五五・八
トウルタメ		一五六・八		一五六・三
ウタライ		一五四・二		一三六・三
タランチ人、カシユガル人、ウイグル人		一五一・五		九四・五
エスト(エストニア)		一四八・三		一三四・七
コイミ(ズイリヤン)		一四七・八		一四三・九
アル		一四七・一		一三八・三
ポ		一四七・一		六二・一
モルダヴィヤ人、ルーマニヤ人		一四五・三		一三七・二

ウズベク人、キプチャク人、クラマ人	一四三・三	一四六・七
チエチエン人	一四三・二	一四四・五
ベルミヤク人	一四二・七	一三七・三
ロシヤ人	一四二・五	一五四・二
希臘人	一四一・一	一三三・七
グルルヤ人	一三七・〇	一四三・六
トルコ・タタール人	一三三・一	一四二・九
チユワシ人	一三三・〇	一三一・四
白ロシヤ人	一三三・〇	九七・一
モルドワ人	一三一・三	一二四・一
チエルクエス人	一二七・二	一一三・三
ウオチヤーク人、ベセルミヤン人	一二二・四	一一一・一
カラバク人	一一〇・八	一一〇・二
獨逸人	一一〇・二	一一五・八
カレリヤ人	一一九・四	一一五・四
マザリイ人	一一四・三	一一三・六
カザーク人及キルギズ人	一〇六・九	一〇九・〇
カラチヤイ人、クムイク人、ノガイ人	一〇六・五	九九・一
猶太人	一〇六・四	七七・五
舊プハラ及びヒワを除くソ聯邦全領土内の人口	一三九・〇	一三九・〇

(バシキール人を除く)

(バシキール人共)

(註) 「数字から見た全聯邦共産黨の民族政策」前掲三九頁。数字は一八九七年及び一九二六年の國勢調査に依るものである。

この表によつて我々はソ聯邦の主要諸民族を二つのグループに分けることができる。A群——十九世紀末以來多少とも言語的に他民族を同化した民族(表について云へば「言語關係」の人口増加率が「民族關係」の人口増加率よりも多いもの)。B群——十九世紀末以來多少とも言語的に他民族によつて同化せられた民族(表について云へば「民族關係」の人口増加率が「言語關係」の人口増加率よりも多いもの)。

A群の筆頭は何といつてもロシヤ人である。一八九七年から一九二六年に至る約三十年の間に現在のソ聯領内に住むロシヤ民族の人口は四二・五%増加してゐるが、ロシヤ語を用ひるものゝ數はその間に五四・二%増加してゐるのである。その他はごく僅かながら言語的に他民族を同化していつた諸民族——タリシ人、ウズベク人、チエチエン人、グルジャ人、カザーク及びキルギズ人等である。

B群は、民族の數からいへば歴倒的に多い。言語的にもつとも甚だしく同化されてゐるのは、ソ聯邦の領内に一定の民族地域を有しない所謂「民族的グループ」——猶太人、ポーランド人、ジブシイ人、レット人、エスト人、リトワニヤ人等——及び諸多の有力な民族の中に介在する弱小民族——クルド人、イエジド人、タランチ人、カシニガール人、ウイグル人、白ロシヤ人、カラカルバク人、カラチヤイ人、クムイク人、ノガイ人等々であり、ウクライナ人もロシヤ人によつて著しく同化されてゐることが分る。B群の中で比較的と同化される度合の少なかつたのはオセチン人、トルクメン人、コーミ人、チェルケス人、ヴォチヤーク人、カレリヤ人、マリー人等々で、アルメニヤ人はソ聯邦の各地に多數移住してゐる關係上やや強く同化されてゐる。トルコ・タタール群といつても色々な民族より成り、人口も非常に多いのであるから、一概にいへないが、タタール人はソ聯邦領土の各地に點々と群住してゐるにも拘らず言語的にかなり著しく他民族を同化してゐることは前述の通りである。(第二章第二節参照)。

A群、B群を通じて一つの簡単な結論を下せば、

(一) 十九世紀末以來、現在のソ聯邦領土内に住む大多数の民族は、言語的に多かれ少なかれ他の民族によつて同化されてゐる。

(二) 言語の上で多少とも積極的に他民族を同化してゐるのはロシア人、ウズベク人、カザーク人、グルジャ人等のみである。グルジャに住むアルメニヤ人及びメグルル人の一部がグルジャ化されたこと、ウズベク語がタヂク人の間に相當ひろまつたこと、一般に「ロシア化」の影響が強いことなどが前掲の數字にハッキリ現れてゐる。

(三) 同化過程はソ聯邦内の各地に點々と散住する猶太人、レット人等の間に殊に強く現れてゐる。

(四) ウクライナ人、白ロシア人が言語的にかなり著しく同化されてゐるのは、主として帝政時代における「ロシア化」政策によるものである。

以上、十九世紀末から一九二六年に至る約三十年間の言語關係における民族同化の動きを、かいつまんで述べたのであるが第二章にかゝけた別表第一は、言語による民族同化の諸結果を歴然たらしめるものであり、少なからず興味を唆る資料であるから、この表について検討してゆくことにしよう。

この表では、一九二六年十二月十七日現在におけるソ聯邦諸民族の「民族」人口と「母國語」人口とを數的に對照して、兩者の比(%)を最後に割出してゐる。この比率を調べた結果、ソ聯邦の諸民族を便宜上左の三つのグループに分けてみることにした。

A群 民族人口の九割以上が自民族の言語を「母國語」と認めるもの。

B群 民族人口の六割以上が自民族の言語を「母國語」と認めるもの。

C群 自民族の言語を「母國語」と認める人が民族人口の六割に充たないもの。

A群に屬するものは、ロシア人(九九・七%)、ブルガリヤ人(九二・四%)、フィンランド人(九五・八%)、カレリヤ人、(九五・五%)、ウエブス人(九四・六%)、モルダヴィヤ人(九二・三%)、タタール人(九八・九%)、クリヤシエン人(九九・一%)、チニワシ人(九八・七%)、マリイ人(九九・三%)、ウオチヤーク人(九八・九%)、ズイリヤン人(九六・五%)、ベルミヤク人(九三・九%)、ベセルミヤン人(九九・三%)、モルドワ人(九四%)、獨逸人(九四・九%)、カルムイク人(九九・三%)、ノガイ人(九七・二%)、ナガイバク人(九五・二%)、カバルチン人(九九・三%)、バルカール人(九九・六%)、カラチヤイ人(九九・五%)、チエルクス人(九七・七%)、オセチン人(九七・九%)、インゲリシ人(九九・五%)、チエチエン人(九九・七%)、アワル人(九九・三%)、ラーク人(九九・四%)、クムイク人(九九・二%)、ダルギン人(九八・三%)、レズギン人(九七・四%)、タバサラン人(九二・九%)、山地猶太人(九七%)、グルジャ人(九六・五%)、アルメニヤ人(九二・四%)、トルコ人(九三・八%)、グルジャ猶太人(九九・六%)、アイソル人(九一・一%)、イエジド人(九六・四%)、タリシ人(九七・七%)、カザーク人(九九・六%)、キルギーズ人(九九%)、ウズベク人(九九・一%)、タヂク人(九八・三%)、トゥルクメン人(九七・三%)、中亞猶太人(九三・八%)、キプチャク人(九九・七%)、タランチ人(九九・五%)、ドゥンガン人(九九・二%)、ペルージ人(九九・九%)、シヨール人(九三・八%)、ブリヤート人(九八・一%)、ヤクトイト人(九九・七%)、チュクチ人(九九・三%)、コリヤーク人(九五・三%)、朝鮮人(九八・九%)、などであり、

B群に屬するものは、ウクライナ人(八七・一%)、白ロシア人(七一・九%)、猶太人(七一・九%)、レット人(七八・三%)、エスト人(八八・四%)、イジョール人(八七・九%)、希臘人(七二・七%)、ジブシイ人(六四・二%)、ミシャーリ人、(八一・二%)、アブハズ人(八三・九%)、タート人(八六・六%)、波斯人(六七・八%)、カラカルバク人(八七・五%)、アルタイ人(七七・八%)、ハカース人(八九・九%)、ウオダール人(八八・九%)、オスチャーク人(八三・五%)、サモエード人(八八・九%)、ツングース人(六三・八%)、支那人(八六・一%)などであり、

C群に属するものには、ポーランド人(四二・九%)、リトワニヤ人(四六・九%)、クルイムチャク人(五二・七%)、バシキール人(五三・八%)、テプチャリ人(二・三%)、クルド人(三四・四%)、アラビヤ人(一五・九%)、クラーマ人(一六・四%)、ウイグール人(五二・七%)、イラン人(一六・三%)、カムチャダール人(二〇・四%)等がある。

この中には、その数何千といふ微小「民族」も含まれてゐるから、民族人口がソ聯邦總人口の〇・一%以上を占める主要な民族にはA、B、C群とも傍點を付しておいた。

國勢調査の言語申告を基礎にしたものであるから、どの程度まで正確な數字であるかは疑問であるが、大體の事情はこれで充分わかることと思ふ。

別表第一の數字から、ソ聯邦局は次の結論を導き出してゐる。

(一) ソ聯邦領土内に住む雑多な諸民族の間には、永い歴史を通じて多くの移動や混血がおこなはれ、經濟的にもかなり緊密な連繫が立ち立てられた結果、言語による同化は著しく廣汎にわたつてゐる。

(二) しかし大多數(六割強)の諸民族は、各々の民族人口の大部分(九割以上)が今なほ自民族の言語を保つてゐる。

(三) 個々の少数民族についてみれば言語的同化の過程は驚くべき程度に進んでゐることがわかる。例へば猶太人のうち自民族の言語を「母國語」と認めるものゝ比率は七一・九%に過ぎないし、ポーランド人はその四二・九%、リトワニヤ人は四六・九%、希臘人は七二・七%、ジブシイ人は六四・二%、バシキール人は五三・八%、クルド人は三四・四%、ウイグル人は五二・七%、ツングース人は六三・八%……が自民族の言語を「母國語」と認めてゐるに過ぎない。(尤も二國語を併せ用ひるものが、自民族の言語を母國語と認めないと申告した例も相當多いさうであるから、このパーセンテージは多少「割増」して見る必要があらう)。

(四) ウクライナ人及び白ロシア人に對する帝政時代の「ロシア化政策」の結果は今日なほ歴然と残つてゐる。即ちウクラ

イナ人の約一三%、白ロシア人の約二八%はロシア語を「母國語」と認めてゐるのである。猶太人、レット人、リトワニヤ人、エスト人の言語的同化も、同様にロシア語による同化である。

(五) その他の諸民族にあつては主としてタタール化、グルジャ化、ヤクト化、白ロシア化等々の過程が現れてゐる。例へば、言語關係において他民族に同化された四四四、一九三人のポーランド人中、ロシア語を「母國語」と認めるものゝ數は僅々一六二、一五五人に過ぎず、残りは白ロシア語或はウクライナ語等を用ひてゐる。希臘人で言語的に同化されたものは五七、七六三人であるが、ロシア語を「母國語」と認めてゐるものはその約半數(二八、九七四人)で、その他はグルジャ語、トルコ語或はタタール語を用ひてゐる。バシキール人の約半數(三二八、六五六人)は自民族の言語を喪つてゐるが、その中でロシア語を用ひるものは僅か四七四人(残りはタタール語その他を用ひてゐる——筆者)。ツングース人で言語的に同化されたもの一三、五二八人中、ロシア語を用ひるものは五、〇七七人に過ぎず、その他は主としてヤクト化したものである。アルメニヤ人にして言語的に同化されたものは三六、五三一人、その中でロシア語を用ひるものは約三分の一(一一七、一二七人)で、残りはグルジャ語、トルコ語等を用ひてゐる。

以上の結論に筆者の蛇足を一つ加へてみよう。

(六) 一九二六年の國勢調査によればロシア民族の人口は約七千七百九十萬人となつてゐるが、ロシア民族以外の諸民族でロシア語を用ひるものゝ數は約六百六十萬人と示されてゐるから、これを加算し、ロシア人にしてロシア語を用ひないもの數約十五萬を減くと、結局ソ聯邦全體でロシア語を用ひるもの約八千四百四十萬といふ計算になる。言語的にロシア化してゐる約六百六十萬のうち、ウクライナ人は約三百九十萬人、白ロシア人は約百三十萬人を占め、「ロシア化」の大宗をなしてゐる。その他の諸民族中「ロシア化」の多少とも顯著なものを挙げれば、

猶太人 (ロシア語を用ひるもの約七十萬)

ポーランド人 (ロシア語を用ひるもの約十六萬)	
レツト人 (同)	約 二萬八千
リトワニヤ人 (同)	約 一萬八千
エスト人 (同)	約 一萬六千
希臘人 (同)	約 二萬九千
・ジブシイ人 (同)	約 一萬四千
ミシャーリ人 (同)	約 三萬八千
モルドワ人 (同)	約 七萬七千
獨逸人 (同)	約 五萬四千
アルメニヤ人 (同)	約 三萬七千

などである。

## 第二節 民族間の雑婚について

民族の同化といふ見地からいへば、諸民族間の雑婚——そこから生ずる混血といふ一つのモメントも度外視できない。一九二五年より一九二七年までのソ聯邦ヨーロッパ領における諸民族の雑婚に関する統計(別表第五)は、この意味において注目せらるべきであらう。

この表を見て一驚を禁じ得ないのは、ソ聯邦の諸民族間における雑婚の率がきかめて高いことである。(内鮮人の結婚を珍奇な眼で眺めたり、日滿人の結婚が新聞の特種になつたりする我々の社會からみれば、これは確かに驚異的現象といはねば

ならぬ)。

表に現れた数字をみれば分るやうに、

(一) ロシヤ共和国において雑婚の率が特に多いのはポーランド人(男子は結婚件数の八〇%乃至八六%、女子は結婚件数の七九%乃至八五%までが雑婚)、レツト人(男子七一%——七四%、女子四四%——五六%)、白ロシヤ人(男子五〇%内外、女子三四%内外)、アルメニヤ人(男子三三%——四〇%、女子一七%程度)、猶太人(男子一九%——二七%、女子一一%——二〇%)、獨逸人(男子一一%程度、女子一一%程度)、フィンランド人(男子二〇%程度、女子も略々同じ)、ウクライナ人(男子一〇%——一四%、女子一二%程度)、バシキール人(男子一二%、女子も略々同じ)等である。

ロシヤ共和国はロシヤ人の「故國」であるから、流石にロシヤ人の雑婚件数は微々たるもので、男子が精々一・六%、女子は少し高くて二・五%程度に過ぎない。同じくロシヤ共和国の領土内の一定地域に古くから定住してゐるタタール人、チユワシ人、モルドワ人、マリイ人、ズイリヤン人、カルムイク人、ウオチャーキ人等々も、雑婚の率は大體低く、一%乃至五、六%といふ程度に過ぎない。

雑婚の率が特に多いのは、ロシヤ共和国内に一定の民族地域を有せず、各地に散住してゐる所謂「民族的グループ」、即ちポーランド人、レツト人、アルメニヤ人、猶太人、フィンランド人等である。バシキール人の雑婚率が相當高いことは、この民族が言語的に甚だしく同化されてゐるといふ事實と併せ考へる時、そこに一つの民族的特性といふやうなものを感じしめる。

(二) 概してはいへば、「民度」の低い、比較的文化的に遅れた諸民族にあつては、女子の雑婚率が男子のそれより著しく低いことがわかる。そこに宗教あるひは風俗上の傳統が働いてゐるのではあるまいか。

(三) 猶太人の雑婚率は、ロシヤ共和国においては著しく高いにもかかわらず、ウクライナ共和国及び白ロシヤ共和国に

おいては比較にならぬほど低率である。その原因は、かれらがウクライナ及び白ロシアにおいては同一地域に割合多く密集してゐるためである。これに反して、ロシア人の雑婚率は白ロシア及びウクライナにおいて急角度の上昇を示してゐる。

(四) 「ロシア化」の傾向は、他國におけるロシア人の雑婚率のうちにも顯著に反映されてゐる。

### 第二節 民族同化と宗教的對立

民族同化を問題としたつひでに、ロシアソ聯邦における各宗教の民族・地域的分布を一通り概説することにしよう。農奴制ロシアによつて征服された諸々の弱小民族——つまり所謂「異教徒」をギリシヤ正教に改宗せしめることは舊ロシアにおける植民政策のもつとも巧妙な手段の一つであり、「ロシア化」政策の一要素をなすものであつた。

「改宗」は多くの場合ほとんど強制的に行はれたものであらうから、それがどれだけの實質的效果を挙げたかは疑問であるが永い歴史の間に、宗教的に「ロシア化」された民族の數も少くない。しかし一方においては、きはめて頑固な「異教徒」があつて、「正教」を最後まで拒否したのもも少數でない。かのウラル地方のバシキールが、ロシアの植民的壓制に抗して一豫言者ムハメットの助力により、不信心なるロシア人を打破る「ために斷起した實例や、カウカサスの山地民らが「回教」の名による「聖なる戦」を叫んでロシアの侵略に對し一致團結した史實をみると民族問題における宗教的對立の重大性が決して馬鹿にならないものであることがわかる。

周知の如く、ソヴェート政權は「原則的」に反宗教であり、史的唯物論の觀點から、「宗教は社會主義の建設過程において自然に消滅する」ものであることを確信しつつも、現實的問題としての對宗教政策の重要性に堪がみ、あらゆる手段によつて「無神論」の宣傳に、宗教の壓迫に、「反宗教運動」の積極化に異常の努力を拂つてゐる。しかしながら、そのことから、ソ聯邦において宗教は死に瀕してゐる、したがつて今日のソ聯邦にとつては宗教などは全然問題ではないと結論するものが

(別表第五) ソ聯邦歐領異民族間雜婚件數 (其一)

(結婚件數 100 當り他民族との婚姻數)

「數字から見た全聯邦共產黨の民族政策」所載

民 族 別	男			女		
	1925年	1926年	1927年	1925年	1926年	1927年
ロシア共和國歐領						
ロシア人	0.90	1.10	1.59	1.53	1.95	2.53
ウクライナ人	10.06	12.67	14.31	6.84	10.83	12.74
白ロシア人	13.79	52.15	48.84	6.63	34.30	34.47
タタール人	2.07	不明	4.75	0.23	不明	2.24
チュワシ人	2.66	3.34	4.21	0.13	2.02	1.69
バシキール人	2.12	不明	12.60	1.82	不明	11.72
モルドワ人	5.29	6.39	7.16	2.02	5.34	4.48
獨逸人	15.32	10.94	14.09	7.52	8.44	11.43
魯太人	18.83	25.01	27.20	11.45	16.53	19.82
ダチヤク人	4.35	5.96	8.85	—	1.83	2.18
マリイ人	2.51	不明	8.04	—	不明	2.37
カレリヤ人	7.29	5.81	6.48	10.20	8.56	10.86
ズリヤン人	2.52	2.56	3.18	5.59	3.68	4.48
アルメニヤ人	32.90	32.12	39.55	37.52	12.58	17.13
ベルミヤク人	6.11	4.70	5.61	0.17	2.17	5.20
波蘭人	80.55	82.24	85.62	78.79	80.40	84.95
フィンランド人	21.19	23.57	19.95	14.24	17.79	20.68
カルムイク人	1.49	1.66	1.17	—	—	0.17
レソト人	70.80	73.89	73.75	43.95	52.82	55.56
キルギズ、カザーク人	6.64	7.76	15.23	—	1.74	0.97

(別表第五) ソ聯邦歐領異民族間雜婚件數 (其二)

(結婚件數 100 當り他民族との婚姻數)

「數字から見た全聯邦共產黨の民族政策」所載

民 族 別	男			女		
	1925年	1926年	1927年	1925年	1926年	1927年
ウ ク ラ イ ナ 共 和 國						
ウ ク ラ イ ナ 人	3.08	2.99	3.36	4.84	4.24	4.56
ロ シ ャ 人	38.85	31.91	30.93	30.30	25.85	25.71
獨 逸 人	4.23	4.62	4.97	4.74	5.52	5.53
波 蘭 人	39.23	34.10	30.74	42.48	35.43	34.75
獨 逸 人	11.63	12.14	12.10	10.99	11.08	11.35
モ ル ダ ヴ イ ヤ 人	20.67	18.25	17.49	16.01	15.47	14.45
希 臘 人	20.55	17.72	16.90	17.49	16.56	22.70
ブ ル ガ リ ヤ 人	17.30	16.34	17.30	10.38	8.85	10.14
白 羅 シ ャ 共 和 國						
白 羅 シ ャ 人	1.95	2.01	2.66	4.20	4.61	4.90
獨 逸 人	1.85	2.03	2.04	3.66	4.28	5.05
波 蘭 人	65.61	71.58	47.33	38.15	40.30	20.71
ウ ク ラ イ ナ 人	18.24	33.43	36.20	38.61	40.66	45.22
ワ タ ラ イ ナ 人	83.03	78.21	80.28	60.00	58.82	62.99
レ ッ ト 人	57.49	61.54	65.19	36.36	44.44	47.50
リ ト ワ ニ ヤ 人	64.01	69.74	76.92	61.40	47.73	55.88

註 1925年度——『自1923年至1925年ソ聯邦人口自然變動』に依る。  
 1926年度——『1926年度ソ聯邦人口自然變動』に依る。  
 1927年度——中央統計局未發表資料に依る。

あるとしたらそれは餘りにも早計であるといはねばならぬ。

第一に、過去數百年にわたつて、諸民族の精神生活を支配した宗教や宗教的習慣が、革命後わづか二十年そこそこの短時間の間に消滅すると考へるのは無理である。ロシア人は非常に「宗教心の深い」民族であるといはれてゐるが、それはロシアの風土や文化史の特性からみても充分領けることであり、ロシア人の生活に喰ひこんでゐる「深い宗教心」を一朝一夕に無くすることは「社會主義的テムボ」を以てしても不可能なことといはねばならぬ。ソ聯邦都市人口の約二分の一、農村人口の三分の二が未だに宗教の影響から「解放」されてゐないといふ事實は、ソ聯邦當局もこれを認めてゐる。かのスターリンの「新憲法」が「宗教の自由」を法律的に認めざるを得なかつたこともかゝる現實の事情を知らばあえて怪しむに足りない。

第二に、ソ聯邦の領土内に住む文化的に遅れた中央アジア、カウカサス等の回教民族にあつては、宗教はまさしく「生活と一枚」であり、民族としての存在が持続する限り、かれらからその宗教を奪ひ去ることは容易でない。過當の回教抑壓政策はかへつて政治的逆効果を生ずる怖れがあり、「反宗教運動」や「無神論」の注入もこれらの地方においては所期の成果をあけてゐないやうである。ロシアソ聯邦においてギリシャ正教に對立するもつとも強力な宗教としての回教の問題は、中央アジア、カウカサス諸民族に對する諸の政策や民族問題に關聯して今後ますます注目されねばならぬ。同様のことはシベリアの佛教徒やシャーマン信者に對しても云ひ得られる。

第三に、最近のソ聯邦において社會の色々な層に「宗教熱」が著しく昂まつてきたことは注目すべき現象である。この一見奇異にさへ感じられる社會現象も、政治的、經濟的諸原因に遡つて考へれば理解しがたいことではない。「跛行的」五箇年計畫の強行にともなふ勤勞民一般の物質的缺乏や恐るべき肅清のテロルによつて購はれた國民の精神的萎縮、生活不安などが、人々をますます「神」へと誘惑するのである。それが一時的傾向であるか否かはこゝで究明すべき限りではない。唯一つ、ソ聯邦において宗教を「消滅」せしめるに足るだけの社會的諸條件が今なほ成熟してゐないといふ事實を知らば充分で



あらう。

「はしがき」が大變長いものになつてしまつたが、要するに宗教はソ聯邦においてもまだ永く命脈を保つであらうし、民族問題の見地からしても、それは今日なほ一つの重要なモメントをなすものである。従つてソ聯邦諸民族と宗教との關係について一通りの知識をもつことも無駄ではなからう。

一八九七年國勢調査によるロシア帝國主要宗教別人口分布表(別表第六)を見れば分るやうに、フィンランドを除くロシア人口は一二五、六六八、一九〇で、これを宗教別に分類すれば次の通りである。

ギリシヤ正教徒……………	八七、三八四、四八〇(六九・五%)
正教非改革派及び分離派……………	二、一七三、七三八(一・七%)
カトリック教徒……………	一一、四一〇、九二七(九・一%)
新教徒(プロテスタント)……………	三、七四三、二〇九(三・〇%)
その他のクリスト教徒……………	一、二二一、五一一(一・〇%)
回教徒……………	一三、八八九、四二二(一一・一%)
猶太人……………	五、一八九、四〇一(四・一%)
その他非クリスト教徒……………	六四五、五〇三(〇・五%)
合計……………	一二五、六六八、一九〇(一〇〇%)

これを地域別に分けてみると次の表ができてあがる。

一、歐露(フィンランドを除く)

(別表第六)

地 方 別	正 教 徒(Православные с единоверцами)			舊教徒(ロシア正教非改革派)及分離派	
	男	女	百分比	男	女
I. 歐露 (フィンランドを除く)	37,361,595	39,102,362	81.81	799,218	928,140
II. ヴイスラ沿岸地方	430,403	233,381	7.06	5,947	3,159
III. カフカーズ	2,382,666	2,214,462	49.48	68,241	67,565
IV. シベリヤ	2,538,605	2,445,627	86.99	114,911	122,700
V. 中央アジア	344,064	302,686	8.36	31,066	32,424
全露合計	43,082,998	44,301,482	69.54	1,109,675	1,154,063

Большая Энциклопедия 所載

ロシア帝國主要宗教別人口分布表 (1897年國勢調査に據る)

(別表第六)

地 方 別	正教徒(Православные с единоверцами)			舊教徒(ロシア正教の非改革派)及分離派信者			羅馬加特力教徒			各派新教徒(プロテスタント)			其他基督教徒			回 教 徒			猶 太 人			其他非基督教徒		
	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比	男	女	百分比
I・歐露 (ノインランドを除く)	37,361,595	39,102,362	81.81	799,218	928,140	1.85	2,172,807	2,165,970	4.64	1,572,157	1,668,764	3.47	29,934	25,319	0.06	1,822,740	1,732,895	3.80	1,836,949	1,928,817	4.03	162,948	157,121	0.34
II・ヴイストラ沿岸地方	430,403	233,381	7.06	5,947	3,159	0.10	3,419,422	3,568,045	74.32	210,134	208,796	4.46	206	79	0.00	4,530	196	0.05	640,327	676,249	14.01	218	5	0.00
III・カフカーズ	2,382,666	2,214,462	49.48	68,241	67,565	1.46	33,283	10,669	0.47	30,005	26,606	0.61	613,172	547,034	12.49	1,710,839	1,498,018	34.54	32,001	26,470	0.63	16,023	14,027	0.32
IV・シベリヤ	2,538,605	2,445,627	86.99	114,911	122,700	4.15	241,891	9,963	0.60	10,075	5,759	0.28	488	44	0.01	71,660	54,426	2.20	18,483	15,994	0.60	169,404	124,391	5.13
V・中央アジア	344,064	302,686	8.96	31,066	32,424	0.82	11,606	1,522	0.17	5,519	3,957	0.12	3,592	1,250	0.06	3,756,631	3,232,009	90.29	7,259	5,470	0.16	891	448	0.02
全露合計	43,082,998	44,301,482	69.54	1,109,675	1,154,063	1.72	5,664,665	5,756,262	9.09	1,829,040	1,914,169	2.98	647,718	573,793	0.97	7,369,928	6,519,493	11.06	2,536,184	2,653,217	4.13	349,511	295,992	0.51

第四章 民族同化に關する若干の資料

ギリシヤ正教徒……………七六、四六八、九五七（八一・八％）

正教非改革派及び分離派……………一、七二七、三五八（一・八％）

カトリック教徒……………四、三三八、七七七（四・六％）

プロテスタント……………三、二四〇、九二一（三・五％）

その他クリスト教徒……………五五、二五三（〇・一％）

回教徒……………三、五五五、六三五（三・八％）

猶太人……………三、七六五、七六六（四・〇％）

その他非クリスト教徒……………三二〇、〇六九（〇・三％）

二、ヴィストラ河沿岸地方（ポーランド）

ギリシヤ正教徒……………六六三、七八四（七・一％）

正教非改革派及び分離派……………九、一〇六（〇・一％）

カトリック教徒……………六、九八七、四六七（七四・三％）

プロテスタント……………四一八、九三〇（四・五％）

その他クリスト教徒……………二八五（——）

回教徒……………四、七二六（〇・一％）

猶太人……………一、三一六、五七六（一四・〇％）

その他非クリスト教徒……………一一三（——）

三、シベリヤ

第四章 民族同化に関する若干の資料

ギリシヤ正教徒	四、九八四、二二二 (八七・〇%)
正教非改革派及び分離派	一三七、六一一 (四・一%)
カトリック教徒	三四、一五二 (〇・六%)
プロテスタント	一五、八三四 (〇・三%)
その他クリスト教徒	五三二 (——)
回教徒	一二六、〇八六 (二・二%)
猶太人	三四、四七七 (〇・六%)
その他非クリスト教徒	一九三、七九五 (五・一%)
四、カウカサス	
ギリシヤ正教徒	四、五九七、一二八 (四九・五%)
正教非改革派及び分離派	一三五、八〇六 (一・五%)
カトリック教徒	四三、九五二 (〇・五%)
プロテスタント	五六、六一一 (〇・六%)
その他クリスト教徒	一、一六〇、二〇六 (二・五%)
回教徒	三、二〇八、八五七 (三四・五%)
猶太人	五八、四七一 (〇・六%)
その他非クリスト教徒	三〇、〇五〇 (〇・三%)
五、中央アジア	

ギリシヤ正教徒	六、四六、七五〇 (八・四%)
正教非改革派及び分離派	六三、四九〇 (〇・八%)
カトリック教徒	一三、一二八 (〇・二%)
プロテスタント	九、四七六 (〇・一%)
その他クリスト教徒	四、八四二 (〇・二%)
回教徒	六、九八八、六四〇 (九〇・三%)
猶太人	一一、七二九 (〇・二%)
その他非クリスト教徒	一、三三九 (——)

以上の諸表は何を示してゐるか？、先づ第一に、ギリシヤ正教徒は歐露及びシベリヤにおいて壓倒的多數（八割以上）を占めてゐる。それは、これらの地方にロシヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人が壓倒的多數を占めてゐることによつて容易に説明される。第二章はじめの表を見れば分るやうに、カウカサスの全人口に對する右三民族人口の比率は三割強（合計約三百十六萬）に過ぎないのに、ギリシヤ正教徒の比率は約五割（約四百六十萬）となつてゐる。即ちこの地方には宗教的にロシヤ化された「異種族」の數も相當多いことがわかる。

第二に、カトリック教徒はその大部分がヴィスラ河沿岸地方（ポーランド）に集中してゐる。ポーランド人はほとんど全部カトリック教徒であるから、この地方においてカトリック教徒が七割四分といふ絶對多數を占めてゐるのは當然である。

第三に、回教徒は、中央アジア人口の九割以上を占め、全カウカサス人口の約三割五分を占めてゐる。これはそれらの地方にトルコ諸族がきほめて多く集中してゐる關係によるものである。

第四に、猶太人（ユダヤ教徒）は比率からいへば歐露人口の四％に過ぎないが、絶對數においては三百八十萬に近く、毎